327
384

三好猛雄著

最近釧路案内

前編
釧路史概要
釧路史蹟
あいぬ考
山容水態
動物植物
阿寒高山植物
次編
釧路の「音」
釧路の「色」
釧路の「味」
後編
支廳管内諸統計
海霧
築港
歩いて觀る摩岸
根室望遠鏡
おぼろ道すぢ
別保から茂尻矢
釧路マップ
豆の帶廣
詩文雜考

鈴木時計店
正確第一

北海道釧路國全圖

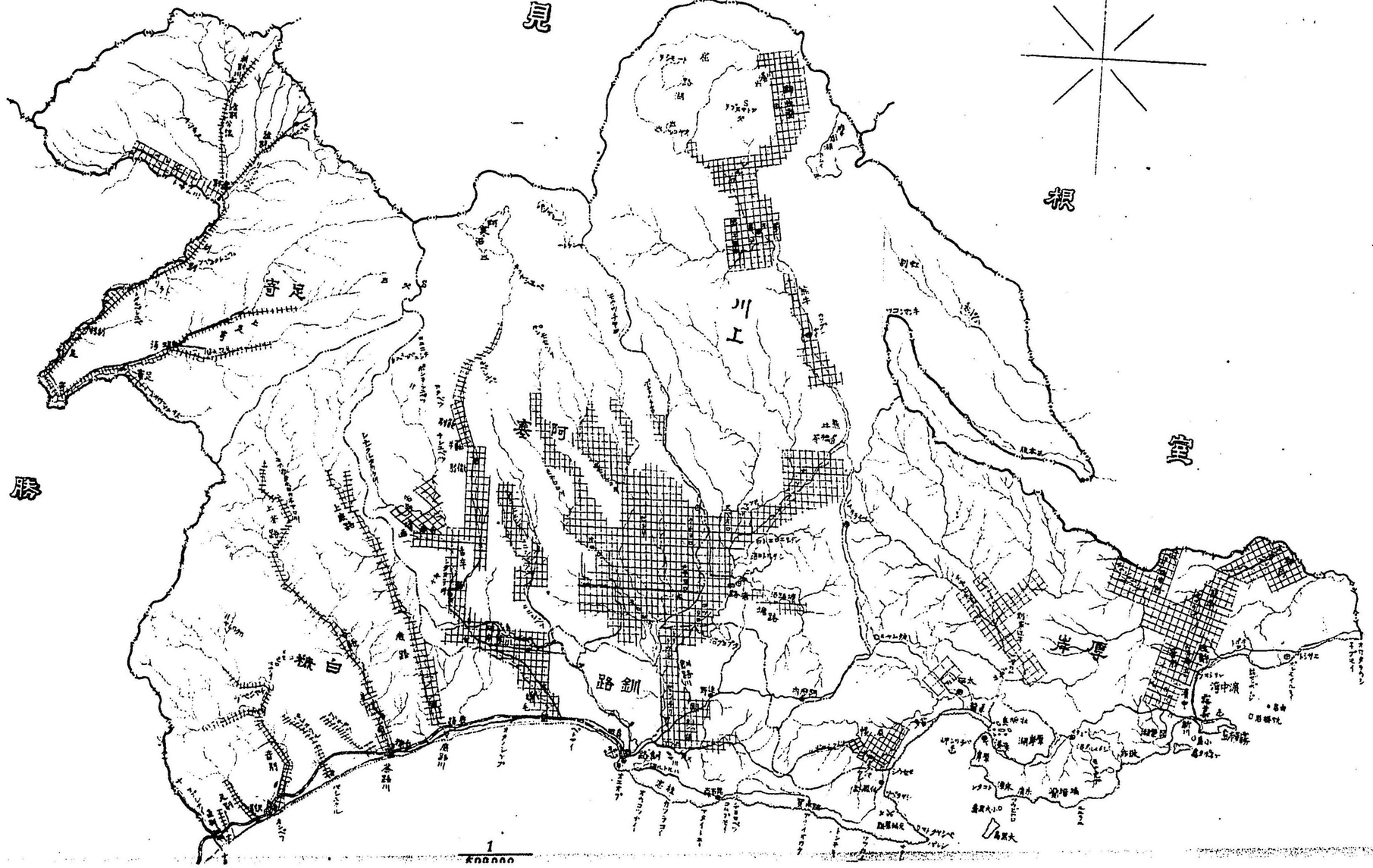
北

見

十

根

凡例



1

北海道鉄道略図全図

北見

根室

十勝

足寄

川上

阿寒

釧路

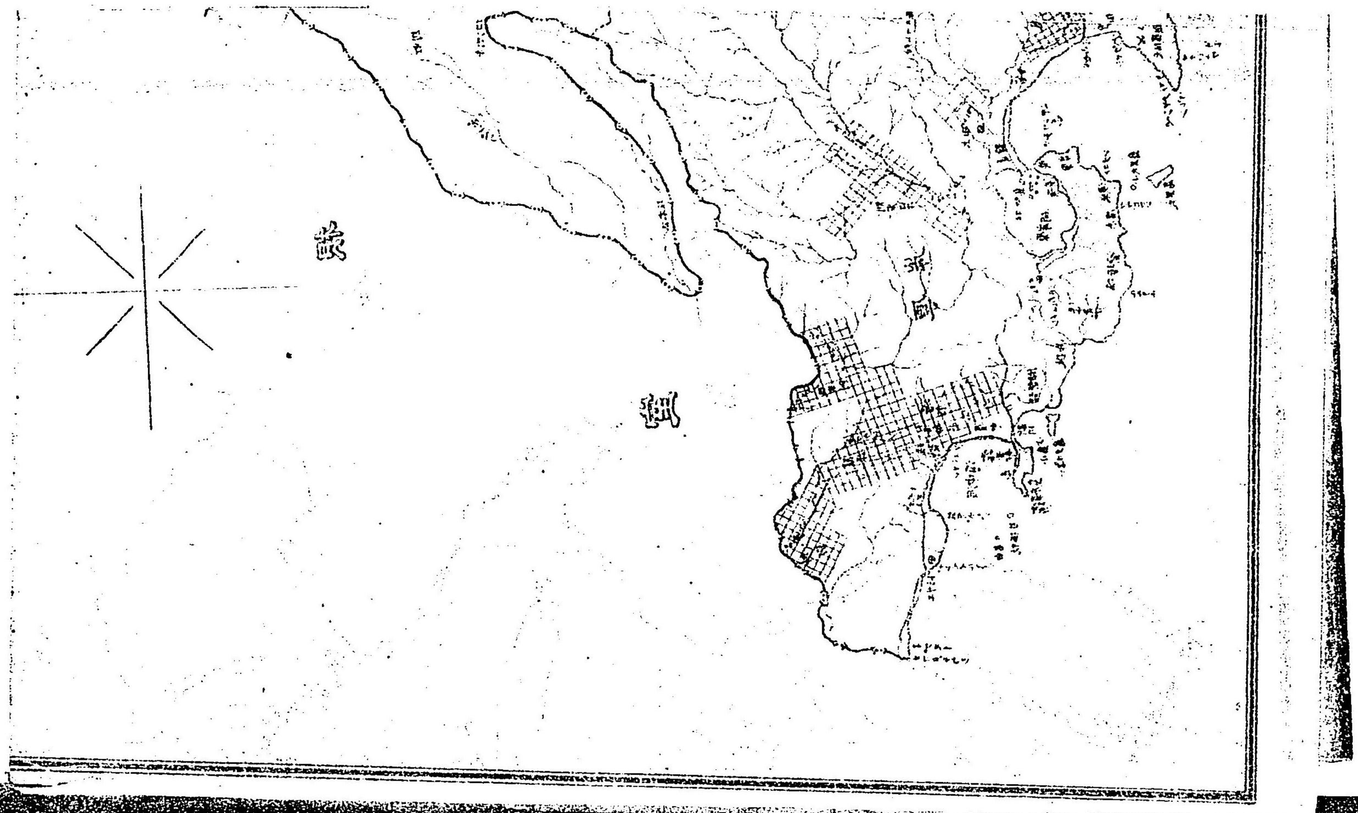
白糠

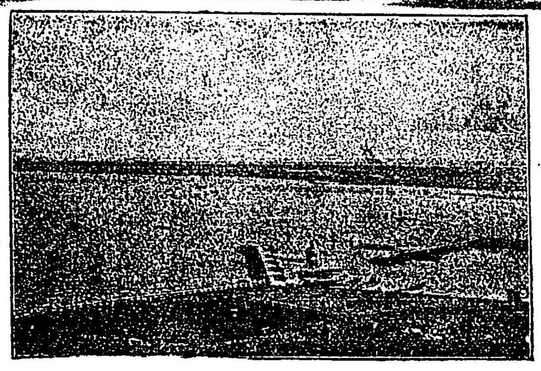
厚岸

1/500,000

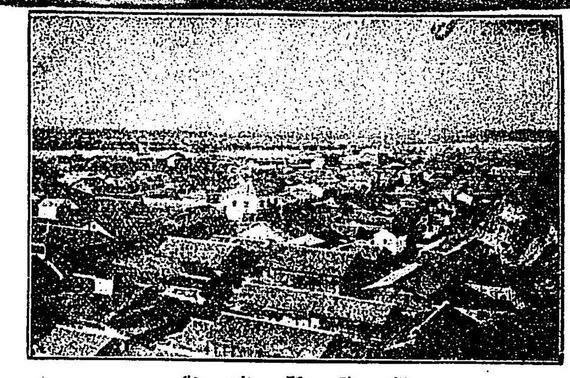
凡例

国界　郡界　支庁界　町役場　村役場　戸長役場　鉄道　道路　河川　湖沼　滝　小滝　温泉　鉱山　炭山　硫黄S　廃鉱×　布

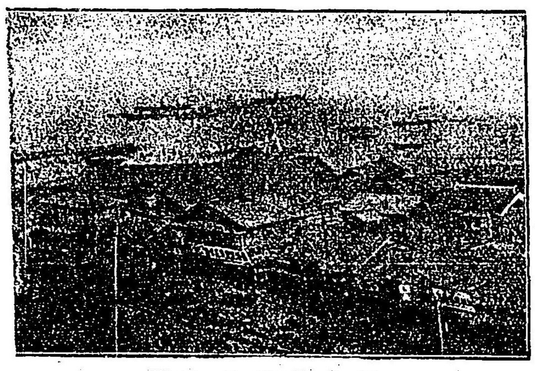




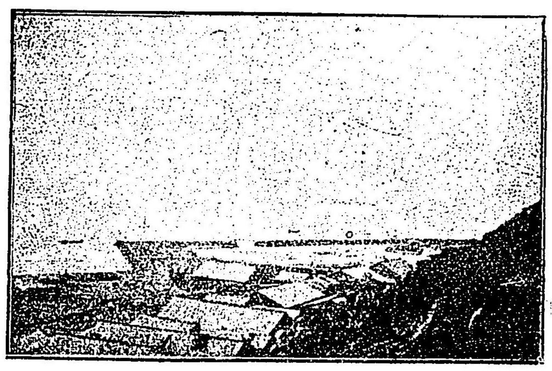
釧路港内全景



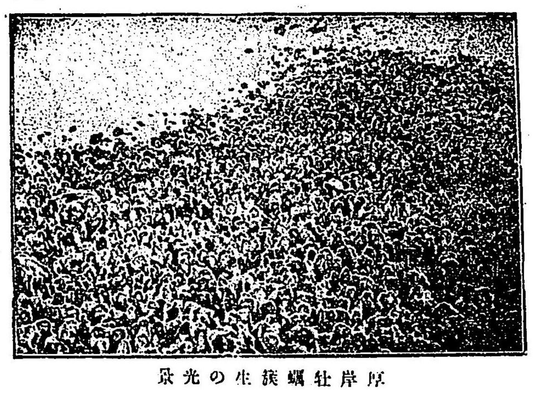
釧路市街



釧路港築船入場



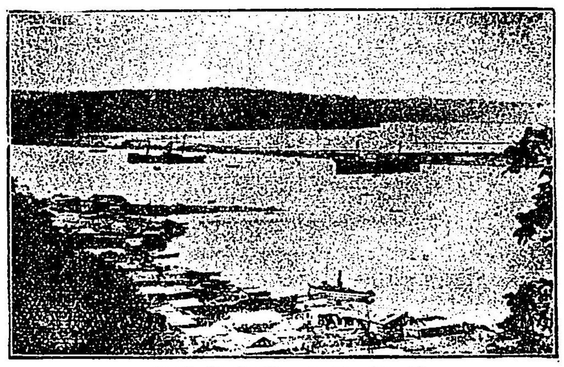
釧路港築工事人知埋立



厚岸牡蠣養殖の光景

厚岸全景

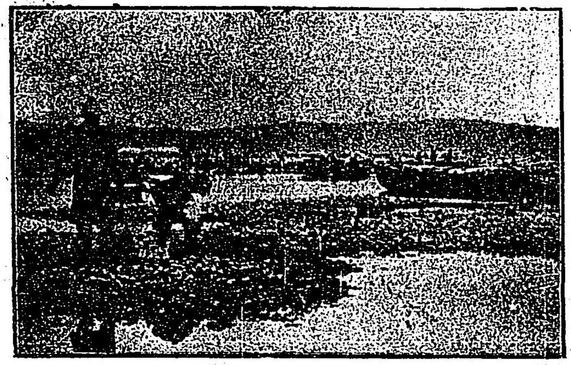
厚岸國泰寺梅花



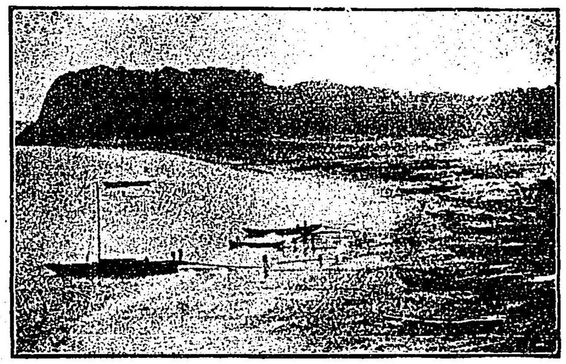
(村龍眞岸對)口入湖藏

厚岸辨天島の牡蠣

床丹村蚶殼及蠣乾燥



厚岸牡蠣湖南網貝採収



牡蠣蕃殖の光景

第八排排渣架鉆鋼

裝鉆內渣路鋼

立鉆鋼八角架工裝裝鉆鋼

仿井田鉆鋼

324-774

序

銕嶺は殊に風變りな事を好む

三好銕嶺と云ふ男は餘ッ程物好な男である、殊に風變りな事を好む、風變りな事を好むが爲めに、常に一定の物に執着する事が出來ぬ、會社員になつたかと思ふと新聞記者になつたり、新聞記者になつたかと思ふと直ぐ自轉車屋になつたり、自轉車屋になつたかと思ふと今度は又測量師の眞似事などをする、何時になつたら彼れの職業が決まり、何時になつたら彼れの生活が定まる事かと實は陰ながら頭腦を惱ました一人である、之も彼の持つて生れた病、何れかと云へば餘りに彼れの才氣が働き過ぎる即ち彼れの才氣は主人の銕嶺以上に働いて、やゝともすれば之を飜弄する傾きがあるからである、大事な主人公を下宿屋の二階の上に祭り込むで獨り才氣のみが宇宙を馳け廻つてゐるのは

明治43.11.4 内交

何よりの証據である、若も此才氣が單獨の活動より脫して、錢嶺と共に、働き、錢嶺と共に奮發が出來るならば其時こそは錢嶺の成功である、して今回の「釧路案內」は彼の才氣が主人の錢嶺と共に働いた具体的の證據である、此調子を外さずに進む事が出來るならば、彼れの前途は正に確に祝福すべきである、僕は此見地よりして錢嶺君の「釧路案內」を歡迎する

庚戌九月

釧路新聞社編輯局に於て

遠藤次水

序

衆にちやほやされるぢやらう

第一子『釧路案內』は。疾くに世の中へ出る筈ぢやつたが、父親の朝寢が遺傳したと見えて、今だに出ずに居る。何んでも宜い思ひ付きの目覺しでもあつたら追つて呉れ。と『釧路ある記』を書いたとき知合になつた、三好錢嶺と云ふ人から云つてよこされた。

俺は第一子『釧路案內』が、男性であるやら、女性であるやら、まだ見たことがない。それで何を書げて宜いか俺自身にも判らぬが。釧路と云ふものは、年こそ取つて居らぬけれども末の見込も充分に立つて居るものゝやうに聞いて居るし。夫れに器用な錢嶺と云ふ罪の深い人が、色やら、味やら、音まで附けて出すと云ふことぢやから、定めし世の中へ出しても恥づかしからぬものぢやらうと思ふ。

一体、人間と云ふものは、賢いやうでも阿呆な動物ぢや、杜の鎭守樣の御本体は、と訊いて見ても知つて居るものが尠い。況して釧路と云ふものを知らぬ人には、行末ドンな見込があるやら、又ドノ位立派なものであるやら判るもんぢやない。此の理屈から云つても、俺は屹度第一子『釧路案內』が衆にチヤホヤされることぢやらうと思ふ。夫れをおもや目覺しなんか無くても宜い筈ぢやや。

明治四十三年九月中澣

釧路新聞社の一隅にて

芋野杢兵衛

案内の案内

「案内」なぞゝ言ふものに碌なものは無い。といふのが普通である。爾ればと云つて、往々名前に騒かされる書も尠くない。現代の所謂成功は、後者にあるかも知れん。乍併、名實相伴はざる場合には、後者は邪氣が深い。吾輩も奇抜な名を附けて、驚かさうかとも思ふたが、元來柄でないのだ。矢張り「案内」で澤山だ。何でも澤山集めて、澤山書かうとは思ふたが、頁が許さぬ。

開拓判官松浦氏は、安政年間巡見の際「欲出題璧、一劒應召募、裹糧出塞關、險河皆涉渉、大岳儘躋攀、筆不洩奇絶、身無論苦艱、我何輕性命、此役重於山。」と云つて大に誇つて居る。眞に本道山川の奇絶を洩す無く。役小角以上に努めて御座る。吾輩は松浦氏の眞似は能きない。それで正直に蝦仙の詩文を拝借した。唯吾輩は、縦に循環するあるものと、横に廻るあるものとをぐる〳〵書きなぐつたつもりだが、何が出來たかは一寸も知らん。同じ處に書く可きものを、彼處此處に散してゐるが、それはわざとさうしたのではなく兎に角さうして置いたのである。何故こんなにしたのかと云つてる間に、こんなものは不要になる。思ひ付き〳〵拾ひ集めながら、低い破れ机に脊を曲げて書いたので原稿は汚い、文は成つてない、順序も何もあつたものぢやない。

名物の海霧も霽れて、大陸的の秋氣に包まれた、阿寒の山々は目の前に、蚊帳の釣手を外づして放つた様に見える。低い机は、頬杖を突いて〻此の景を眺めるに好い。日は襟裳埼に落ちた。瀬戸海から瞻る彼の石槌山は、蚊帳の處々をもつと抓み上げないと似合はぬが、山の色は此方を佳とする。「我屋無佳物、小樓背大灣、(恰度似てゐる)客來未交語、鈎箔露江山。風細波舒月、峰巒掃翠烟、來擬恣吟眼、(想像が付く)漁舟已着先、天涯人未返、飄落雪霜繁、今日題詩句、明朝即爪痕。弘化丙子、在千江刺、賦三樹」數年漂泊の吾輩、此其此詩此一卷、將に筆を擱んとして考ふれば、泥土偶然指爪を留む、鴻飛ぶ那ぞ復東西を計らんと言つた蘇軾の詩を思ひ出し、聊か蘇軾の人生觀にアテられた様な氣もする。六月厚岸の殘櫻を見てから既に三ヶ月、此の月末には最う霜が隕ちる。一指大の一爪痕たる此一卷、一顧を賜はらば幸也。嗚呼ヶ間寒はあるが斯う書き附けたり。

九月二日、阿寒山頂の雲頗る奇なる夕

蛇足

變更又變更してかくなれる此一卷、人の詩文を何處迄で信用する氣か、自序に代ふる案内にまで二ッ三ッ持つて來る抔は醜面過ぎる。案内式の勿體にも程がある位は、心得て居さうなもの、要するに之は弊の攻撃に陥つたものである。唯、今後此醜面を再び爲ざらんとを期す。

再び爲る爲ないと云つてる間に、七千萬圓十五ヶ年の本道經營案の御蔭で、釧路の面目は一新再新せり。

編著者

例言

一、此書の所謂案内たる所は、後篇の全部と、前篇中の史要史蹟の一部、山容水態、動植物等にわらん。他は著者の勝手放題なる臆斷と、振舞とのみ。讀者之を取捨する亦勝手たる可し。

二、初の豫定は、此勝手なる振舞の全部が一卷と成る筈なりしも、變更又變更遂に書名をも變更して斯くはなれり。後篇は釧路支廳の編纂に係るもの、印刷の都合上全部を譲り受けて、細密なる一覽案内表として之を合す。豫定は又茲に一變し、著者の雜文の大半は著者之を除去したり。

三、寫眞は著者之を蒐集し、一度函館毎日新聞紙上に揭げしものを載せたるなり。若し二度のお勸めと嘲る者あらば、幷は憶に同社の此著に對する多大の厚意を解せざる者也。尙此書の出版に就いて同社の與へられたる厚意を感謝すると共に、一般同情者に內容の不整を陳謝す。

四、附圖の根室と釧路との國境は、摩周湖東南隅よりキンマンコッに到る一線を以てすることを正なりとし、又五十萬分スケールを脫したることを印刷後に於いて發見せり。

五、前篇は之を釧路に於いて印刷する等なりしも、又函館毎日新聞社分工場の盡力に成る。此の變更と、時恰も同分工場亦繁忙なりし爲め發行少々遲れたり。

最近 釧路國案內前篇目次

○釧路史概要……自一頁至三頁
▽釧路の起原　▽松前氏と東蝦夷　▽露人の南下と開發　▽近藤重藏等の探檢　▽幕府の直轄　▽佐野孫右衛門　▽澁岸の不穩と北警備　▽明治以降

○釧路史蹟……自三頁至九頁
(一)…茨尻矢御供山　(二)…厚岸盤螺山印(三)…蠣島辨天社　(四)…國泰寺

○わいぬ考……自九頁至一一頁
▽非コロボツル說　▽アイヌの釧路に於ける起原　▽三才圖繪　▽世界中の最從順民族　▽千載一遇　▽經濟觀念と獸蹄　(附)蝦夷竹枝…(七絕)…鎭田楓江　愛憶…(七絕)…山村猪村

○アイヌ百年間戶口增減……一二頁

○山容水態……自一三頁至二二頁
讀久摺日誌…(七絕)…南華　▽雌阿寒岳…(山名、眺望、位置、地勢、山相、噴火口、溫泉、登路、高度、土質、動物植物、氣象　▽雄阿寒岳　▽阿寒湖……阿寒湖…(七絕)…松浦北海　▽阿寒瀑布　▽風蓑呂湖…塘路到跡狹登…(七絕)…逸非小枝、阻久摩湖附…(五言律)…號津殺堂　▽磨周湖　▽磨琴山…風蓑呂湖…(七絕)…春湖山人　▽春採湖…(七絕)…春湖山人

○動物植物……自二二頁至二四頁

○雛阿寒扇山植物……(百余種分類列舉)……自二四頁至二七頁

○釧路の「音」……自二七頁 至二九頁
○釧路の「色」……自二九頁 至三一頁
○釧路の「味」……自三一頁 至三三頁
○新聞と其人……自三三頁 至三四頁
○海霧……（厚岸紀行一節）……三 四 頁
○築港……（同 上）……三 五 頁
○歩いて觀た厚岸……（同 上）……自三六頁 至四二頁
○根室望遠鏡……（同 上）……自四三頁 至四四頁
○おぼろ道すぢ……（同 上）……自四四頁 至四七頁
○別保から茂尻矢まで……（同 上）……自四七頁 至四九頁
○釧路マップ……自四九頁 至五五頁
○豆の帶廣……五 五 頁
○詩文雜錄……自五六頁 至五七頁

（前篇目次）　二

最近釧路國案内（前篇）

○釧路史概要

▽釧路の起原　▽松前氏と東蝦夷　▽露人の南下と開發
▽近藤重藏等の探檢　▽幕府の直轄　▽佐野孫右衛門
▽沿岸の不穩と其警備　▽明治以降

蝦夷地としての吾釧路は、其起原古しと雖も、成文の起原は大凡一百年以前にあり。尤も彼の武田信廣が夷管領奏狀を討つて蝦夷地全土に覇業を開きしは長祿二年にして、今を距る四百五十二年なりと雖松前氏の威力は以て渡島以外に及ぶに足らず。爾來寛政の末年に到る凡三百四十年間、往々愛奴人の爭鬪反亂を視るの外、何等の記すべきものなきが如し。只松前氏は沿岸漁利と舟便との地點を撰んで下吏を置き以て非常を戒め請負人の運上を監査するに過ぎざりき。

然るに明和以降露人の南下するもの漸次多きを加へ、樺太より千島に侵入して安永の変には既に厚岸に迄其羽翼を延ばし、動もすれば掠奪に類する事をなせり。是に於て幕府は北陲の地等閑に附すべからざるを悟り、寛政の初年に於て近藤重藏、最上徳内等をして先づ東蝦夷の探檢に當らしめ、次で直轄地となして幕府自から開發經營の事に任じたりき、故に春秋の筆法を以てすれば、露人蝦夷地を開發せりとも云べきか。

而して幕府が東蝦夷を直轄せしは寛政十一年光格天皇の御宇にして徳川將軍家齊の十三年、松前氏は第十四世章廣の時に當り今を距る正に百十一年なり。釧路の意味ある歴史は蓋し是より始まる。

寛政十一年幕府の所轄となるや、先づ交通の便を緊要とし吏を發して新道の開鑿に任せしむ、白糠釧路厚岸間に於ける沿岸道路及其間に於ける驛遞の由來は實に茲に始まれり、享和二年吏に函館奉行を置きて幕府の計畫を踏襲せしめ、施設經營につきて一層の完全を

期せしかば露人の窺ふもの漸く影を没し、夷徒又恩に服して敢ねて騒擾の患なし、仍て幕府は函館奉行の印綬を解きて之を松前氏に再下するに到れり、頃は文政四年にして函館奉行を置きてより未だ二十年に充たざるに早くも斯の如き効果を挙げ得たる所以のものは、時の奉行戸川安倫、羽太正養以下数名の功重きに居ると雖、亦文化以来の東蝦夷請負人佐野氏の勤功による也、佐野氏一度釧路及白糠の漁場請負人となるや土人の撫恤に、道路港灣の修築に移住者の勧誘に、漁具の普及に、一意釧路地方の開發に盡したる事明治の初年厚岸の請負を山田文右衛門氏の手より移すに到るまで凡そ七十年以上に及べり、殊に明治二年より三年に亘りて四代目佐野氏が奥羽地方より二百三十餘戸を釧路白糠に移住せしめ且作業及生活に於て各自遺憾なからしめたるが如きは忘るべからざるの紀念事に屬す。

然るに松前氏奉行職を受けて幕府の政策を續ぐや、東蝦夷沿岸又漸く不穏なり、故に天保年間厚岸釧路に衛戍を置き弘化元年砲台を知人岬に築きまた烽火台を設けて以て海濱の警備となす一説には厚岸播羅山頂にも三門の砲を据ゑたりと云ふ、尋で安政二年松前氏第十七世崇廣の時幕府再上地を命じて直轄となし仙台侯をして警せしめたりき。

明治元年、版籍奉還の事あり政府は應急の手段として清水谷公考をして函館府知事たらしめしが彼の函館戰爭によりて渡島半島は擾乱の巷となり從つて民政の事暫く放棄せられ加ふるに請負人佐野氏の頓挫するありて佐賀藩の支配となり釧路拓殖は、一時中絶の姿なりき。

仝二年八月初めて、北海道と改稱せられ茲に民部省中に置かれし開拓使を獨立せしめて函館に移し東久世通禧之が長官となるや、次官黒田清隆氏の經營によりて拓地興産の事業再び其緒に就き、佐野氏亦開拓使の命を受けて釧路に來り經營する所あり、仝四年開拓使廳を札幌に移すや北海道は數支廳に分轄せられ而して釧路は根室支廳の統轄となれり。

仝十三年、厚岸郡役所を設けて釧路全國を管せしより學校病院等の開設となり教育衛生の事稍興る、十五年廳使置縣によりて更に根室縣の所轄となりしより以來十九年三月北海道廳の管轄となり、更に釧路郡役所をして釧路一圓を管治せしめたる明治二十四年に到る約十年間、戸口の調査行はれ、電信架設せられ、郵便局置かれ、而して釧路市街は漸く繁榮に赴けるが仝三十年官制の改正に依り釧路郡役所廢止せられて現釧路支廳の管轄する所となり以て今日に到る。

○釧路史蹟

▽湧尻矢御供山　▽厚岸鏡蝙山　▽蝦島辨天社（附山田文右衛門）　▽國泰寺

口碑傳説に由れば、知人岬の神居岩だとか、塘路の城趾とか、屈斜呂、白糠、厚岸方面にも隨分あるやうだ。之等を洩らさず書くのが釧路案内の本分なれど今一々之を調査するは困難でもあり又明瞭し難い。アイヌ君等には氣の毒ではあるが、一傳播小説と見るの外さまで重要事項と認む程のものでない。其小説も彼等の思想を窺ふには便利なものであるが、本道一般の夫れと少しも異つた所は無いから四箇所許りで御免を蒙つて置く。厚岸方面の多いのは、仝地が較古いのと、厚岸史蹟研究會の平尾言外君が調査して居たのを其儘貰つて輯めたからである。尚「釧路史概要」も同君に頼むだのである。同君に謝す。尚御供山は區々の説はあるが、アイヌ城趾と斷定したい。少々長いが、アイヌ

くすり川　　樋口光徳

名にしおはゞいよはひを延べてくすり川
ねぞが千年ののちもみてまし

考の項と參照する爲に二三說を引つぱり出して見た。

※　※　※　※　※

（一）アイヌ墨趾（蕨尻矢御供へ山）東蝦夷夜話曰ふ。クスリにメンカクシ（精一郎の故名）の館趾とて、シャシコツといふ所あり、この會所許（今の喜望樓附近）クスリ川に傍ひて凡七八町可ゆき右手の丘へのぼりまた四五町可ゆけば丘のただ中に凡五段もやわらん四丘を爲したるところあり、頂は平坦にして僅に二十歩には過ぎざれども繞旋して登る、勢いかにも砦構なり麓は溝を二重にめぐらし其內に一族麾下聚落をなしたる其跡明に殘れり、抑東蝦夷は强勇他にこゑ、好んで鬪をなしし故に兵器を多く所持すといひ傳ふるは、このわたりの土人にして、既にシプチャリ（日高静內郡有眞村、有名なる沙具奢城趾のある處なり）のシャムシャインが大亂以後、精一郎の祖父なるペケラニシの頃迄は鬪爭やむときなく、チモロ、アツケシとは能く戰ひをなし、シャシコツの館へ責寄せられしと數度なり、偖また此所の土人いにしへ岩穴居にして館を圍繞してこゝに窪き所あり今の土人これをさして矮人の住居跡なりといふ、而もこのごとくいひしは最ふるく、精一郎が祖父ペケラニシなどの時代にはわらず、矮人の立去りてより後も夷人は穴居したるならん、又かの割書の風俗も矮人より學びたりといふが其實ならいかにやわらん、此入墨について享保中白石先生の蝦夷志に「染唇用青草、名曰口草、未審是何物」とありおのれ口草を土人の古老に問ひしにまた知らずと答ふ、但樺の皮を燒きたる灰墨もて傷口へさすともいへり。▽歷史地理雜誌上河野常吉氏曰、本島千島唐太の三派アイヌは皆往時石器土器を使用せりと思はる、近時樺太大泊の丘陵に、二個のチャシと數多の竪穴及び墳墓と並びて一圍をなせるアイヌ遺蹟ありて其內より數多の石器土器鐵具等を採取せりと云ふ、アイヌが石器を使用したること疑なかる可し。千島蝦夷の從來穴居使石の事その論說多し今又贅せず、北見國常呂郡下常呂原野の竪穴より石製烟管と共に出たる石製紡錘車も亦アイヌの使用したるものたる可く同處の竪穴よりは土器片を出したるが、各地に存在する「チャシ」に石器土器と共に金屬器のみを出すものあり、其事實によれば、本島アイヌは其初め石器土器を使用し、金屬器其他便利の器物を得るに從ひ漸次之れを廢したるものと推定し得べし。十勝國は處々にアイヌ部落ありしも海漁の利乏しかりしかば和人に接し其感化を蒙ること亦少く享保の頃迄此地に穴居人の在り安政の頃迄石製烟管を使用せし者ありしも皆之が爲ならん。近年バチェラー氏は十勝國にて一老婆に逢ひしに老婆は入墨を指して「アンチピリ」と言へり「アンチ」は黑曜石「ピリ」は疵の義なれば黑曜石の疵といふことなり即アイヌが昔時黑曜石の破片を以て入墨をなしたる事を知る可し。

かくて三派のアイヌが皆竪穴に住し石器土器を使用したりと決定するに於ては、トンチ說、コロボックル說の根據は大に動搖せざるを得ず。何となれば古今に亙り東西に涉り未開人の間には奇怪なる小說は其常なり。長大なる人種、矮少なる人種、手長人種、足長人種、一眼人種、三眼人種、其他不可思議の者少からず、若し眞にコロボックルが此に住居し其アイヌと衝突し追ひ退けられたりとせんか、衝突は各處に於て幾回もありしなる可く、從て之に關する話も種々あるべきに、西は渡島より東は擇捉島に至る迄唯單にコロボックルの一女子を捕へ見しより彼等は去りて見ゑずと云ふが如きは、一の鑄型によりて作られたる傳播小說の性質を顯はすものにあらずして何ぞや。是豈人種の衝突代謝の事實を證據立つる者ならんや。

尙曰、「チャシ」は其或るものは竪穴と密接の關係を有せり。即陸奥國上北郡蛯澤及中志、石狩國深川村納內。日高ショップ、十勝旅來村、釧路後靜村ウラヤコタンの「チャシ」の如きは、砦內に竪穴あり、其他チャシの附近に竪穴あるもの少しとせず、其遺物も附近竪穴のものと同一なれば或時代の或土地の住民は、竪穴も作り、チャシをも造りたりと斷定するを得べし。チャシは何人が何の爲に造りたるやをアイヌに問ふに、或は知らずと答ふるあり、或はコロボックルの遺跡なりと答ふるあり、或は神の遺跡なりと云ふものありと雖も、聞亦アイヌの遺跡なりと斷言するもの少なからず。陸奥及び渡島にあるものは蝦夷館、又は狄館等名を有し而して狄（イヌ）は彼の地方にてアイヌに使用したる名にして明にアイヌの遺跡たるを示せり。尙舊記類に據るも「チャシ」はアイヌの城砦にして其據守の爲めに造りたるもの

たるは疑を容れざるなり。

小金井博士はコロボックルは歴史的實在せしものにあらずとし、坪井博士は現時のアイヌが石器土器を製することを知らず穴居せずと云ふ、又前者に從ひ大陸人種及び日本人種と交通頻繁となるに從ひ技術を忘れ若しくは退歩せるものに因るとなす「プレヒストリック」の著者ムンロー氏の說あり、今予は茂尻矢御供へ山のシャシを見て坪井博士の說に贊するを得ずアイヌ考にも云へるが如し。釧路厚岸何れも漁獵に便なる山水に富む、即ち彼等は生活上有利の根據地に於いて倘し他より侵さんとするものあれば之に備へ、之を防禦するや同時に自ら滿足を欲せんとしたるものにあらざるか。兎に角其何れの說たるを問はず、往時彼等の勢力の一班を表はしたる遺跡たるは疑ひないと思ふ。

（二）盤螺山

盤螺山の史蹟に關しては其頂上開鑿の碑文がある。

盤螺山　夷言取魚棚之義　蓋峭山頂遏平也其地臨熱消灣　西望阿寒諸山　翠如新沐與波光映發　眞勝地也　初喜多野竹澤臨其地也　以私費多募夷民剪草萊闢榛蕪　造磴道千餘級　以便登覽　夷民等樂而爲之　不日告成　余曾聞其勝　神遊每以不到　其爲憾焉　今夏奉西征之命　適得與竹澤同登探其地　豈非有勝因而然耶　命愛其風煙　不忍去　顧謂竹澤曰　君煙霞之癖　一至於此乎　可謂不讓柳河東耳　竹澤笑曰　僕何唯煙霞癖哉　抑亦有以矣　瞭望遠近　以備不虞一也　海嘯可僻二也　使夷民便採樵三也　登覽運動氣血四也　與酒夷人爲昇平醉民五也　凡此五事　僕敬意所存　何唯勝遊哉　余於是乎　爽然旋面目乃知竹澤之志不在縻樂而在民隱也　宜哉　夷民歸德　化革風尙自　其管所肪　然則竹澤牧民可不負其職哉　萬延元年庚申五月鈴木善敎撰之

文中の熱消灣は即ち厚岸灣である事は言ふまでもない、所謂三縣以前の稱呼はアッケシでも月字は區々であつた、古記錄をみると熱消の外、惡消と書いてゐるのもある、喜多野竹澤といふのは幕吏の喜多野省吾の事で安政年中に於ける函館奉行所詰の幕官であつたと思ふ、そして此時代は再度の函館奉行管轄時代で、當時は仙臺藩の兵卒が屯戍して居つたのである、喜多野省吾は此内に屯戍兵を假りて安政五年に今の苫多の山道をも開鑿したのであるから、仝氏は厚岸地方の恩人と云はねはならぬ、少なくとも近藤重藏の廣尾山道に於ける最上徳内の模似山道に於けるが如しといつてよい、然らば盤螺山に設けられた登道の位置は何れかといふと殘念ながら未だ見つからない。

吉田東伍博士の大日本地名辭書には又はバラサンは俗に丸山ともいふ岬上に幕政の頃砲臺を置かれ埠頭を警備したり云々とある、之は疑問とすべきものである。

（三）蠣島辨天社

釧路方面から、陸路厚岸にくるものは湖龍の渡船場で舟を呼んで波に浮ぶと左手に見ゆるさゝやかな湖中の社祠は即蠣島辨財天である。

北海道唯一の產物として、又厚岸の特產物として名高い蠣は此入江に產するので其牡蠣殼によつて造られた幾十幾百の塊磈が或は島嶼の如く或は暗礁の如く点々として周回約七里の此入江に散らばつて居るのが潮の干滿によつて蠣州となり浮島となる。

春の終りから夏秋にかけて灣上にさゞ波の靜に渡るとき、周圍の丘の綠を宿した、水面に浮ぶ蠣州の小社は宛もそれ安藝の嚴島を盆栽にしたと云はうか、げにや安藝の國も蠣の產地と聞くものを。

厚岸の僧侶今立某の話によると此内に安置せる辨天像の背部に文字ありて山田文右衛門と刻せられてあると、又土地の故老も山田文右衛門が立てたのだと云ひ傳へて居る。

山田文右衛門は天保八年に厚岸の請負人となつた以前から、日高沙流新冠邊の場所請負人であつたのが、天保八年から北厚岸の請負人を兼ねたものと見ねる、此人は文久年間沙流新冠の沿海で昆布の養殖を思ひ立ち凡三萬個はかりの大石を勇拂から新冠あたりまでの沿海に投じ一年餘を經て之を檢せしめたるに多くは埋沒して居たが其堆積した面は良質の昆布が生長しつゝあつた、大いに喜んだ山田氏は更に多數の石を投じて增殖を計つたので文久以前までは五十石位の上り高であつたのが、慶應年間に至つて二百餘石を收獲した、今は幾何程同地方の產出するか知らないが當時運上屋をごまかして甘い汁を吸つて居た請負人の中に山田氏の功勞は實に沒すべからざるものであらう。

（四）景運山國泰寺

有名の古刹國泰寺は政治的意味によつて建てられたので、當時の寺號は東夷鎭撫北海監察護國道場最勝禪窟景運山國泰寺といふすばらしいもので、開基は征夷大將軍贈正一位一品大相國德川第十一代源家齊公といふのだから云はゞ住職は蝦夷鎭守府將軍でもあつた、それで家齊將軍の宸命を以て親任せられた住職が奥羽街道を下つて赴任する儀式及其行列は頗る盛大なもので、今存して居るかどうか知らないが陸奥の下北郡佐井村に能登屋といふ大きな旅館があつて、そこが當時以來の宿泊所であつたといふが、其狀況を見たといふ人の話によると今日は交代の住職の御着日だといふと前日からの用意の上に入口には白砂を敷きつめて三葵の定紋の幔幕を張りまはし、いざ御着となると土地の重立つた人々は恭しく御出迎の所に御先ぶれについて先驅の聲と共に靜々と成らせられたといふのを以て見ても、如何に當時の住職に重大な意味を持たせたかといふ事がわかる、當時の掟書を見ると

一天下泰平國家安全ノ勤行怠慢アルベカラザル事
一蝦夷ナシテ本邦ノ姿ニ歸化セシムル事
一毎々ヨリ死亡ノ民ナシテ未來得脫セシムル事

一隣邦ノ外夷渡來シタルトモ國ノ咄リナカラシムル事

右之條々堅ク守ルベキモノ也（文化元甲年四月）

即ち蝦夷平定と外寇警備とを主眼として兼ねて移住人の定着心を養はうとしたものである、爾來文久年間に到る約六十年間嚴然として其名實を保つてきてゐつたが明治維新の改革と共に件の任務は自然に解かれて明治七年開拓使より十ヶ年遞減法を以て米金を下附せられて今日に到つたのだが、其本來の任務を解かれた時が丁度九代目の住職であつて何かの事情の爲に早世した、院代の藤田崇岳といふ僧侶は昨年七十幾つかで身まかつた、約三十年ばかり無住職で現時の橘悟堂氏は十代目にあたるそうである。

堂宇は明治十四年に建設した假堂であつたが、之も甚しく頽廢したので昨年更に位置を變更して佛殿及庫裡の再建に着手したが本堂だけは未だ其運びに到つて居ない、何にしろ北海道に於て百年以上の舊蹟といへば誠に珍重すべきもので殊に德川幕府が如何に蝦夷經營に苦心したかをうかがう好史料たる全寺日誌が三十二冊の大冊となつて今日保存されてある。

自文化元年四月　至仝三年十二月　一冊
自文化四年　至文化十一年　一冊
自文化十二年九月　至文政五年七月　二冊
自文政十一年十二月　至仝十三年　四冊
自天保二年正月　至仝八年五月　十四冊
自天保七年四月　至弘化二年七月　五冊
自弘化二年七月　至嘉永六年五月　二冊
自嘉永六年五月　至文久元年六月　二冊
自萬延二年六月　至（年月不詳）　一冊

此日誌は全寺の日々の事項を專らとしたものであるが、其間地震海濤氣候人事等の外に外艦來襲、警備、小圖等の記事が散見せらるゝのである。

憾ふに文化文政の昔外夷の侵略を患ひて數回に亘つてなされた幕吏の視察の結果東エゾ地最重要の地と卜せられた厚岸があはれ地の利も人和に及ばず、今や退衰の渦中に落つると共に曾てば東エゾ一帶の鎭府と目せられた國泰寺も亦寒村の古刹とあれ果てた。

此外に厚岸は中々多くの史蹟に富んで居る、龜甲神社の由來や、チャシコツの遺跡を傳へる神威岩や、一寸には中々調べ盡せない、且又調べた中にも再考を要する點もある、實地に踏査しなければ疑はしい樣なものもある、それで厚岸史蹟はこれだけにして置く。

○あいぬ考

▽非コロボックル說、アイヌ口碑、彼等の釧路に於ける起原、三才圖繪、世界中最從順民族、千載一遇、經濟觀念と歌踊

物々しく言ふのではないが、釧路にコロボックルの跡があると云ふのは信を置くに躊躇せざるを得ない。（釧路史蹟參照）六千年乃至一萬年の埃及の文華及び其起原最近南米アンデス山下より發見されたる七千年以前の文明の遺物も、幷を繹ぬ可き順序を有つて居るが、文字無く曆日無きアイヌ民族の口碑傳說は聊か研究材料となり難い。其傳說を眞に受けて、穴居の跡石器土器の遺物を直にコロボックルに結び着けんとするとのは少々恐れ入る。例令彼等以外に或る民族が一時遊獵の居を占めて居たとしても、同種族を離るゝ遠き者ではあるまいか。顧氏三才圖繪に云ふ「東方有小人國、名曰噲、長九寸、海鵝過而呑之、故出則群行。」豕を引き出した所で誰が信ずる。乍併、念々極りなき宇宙

の昔を探ぐる如に、釧路厚岸近傍僅に千年の昔の事柄口歟より察して想像を逞しくすれば、大畧千年前後ではないかと思はれる。或は征夷當時即ち千三百年前に遡るかも知れん。

が、杳として捕促する能はず、恰も七千年前に溯りて法螺をふくよりも雜事である。蝦夷の天地亦幽遠なる哉だ。

阿寒山頂のポンマチチシリ（小雌山）がマチチシリよりも高且大に、即ち命名後噴火爆發の爲め斯くなりたるものとすれば、是に關する著しき傳說がありさうなものだが、彼等は山神の祟りを恐れて雜草花木を採らぬ位なもので更に事實の徵すべきものなく、山神の祟りを恐るるのも是亦危難恐怖より來る、崇拜の念として自然民族の常とするも、噴火口内の植物より推して其だ古き事たるを疑はない。川上郡西別が今尙人工孵化場として適する如に、屈斜呂が鮭の爲めに古くより彼等の生活地に適したる事、厚岸が湖中蠣島を成す程の牡蠣の繁殖夥多にして何千年も前より彼等の食料を得るに便なる地として、古昔より連續の居住處たり得るかが察せられる。然らば少くとも千年以上、或

彼等の石器土器、或はコロボックル說、穴居の跡に就いてはより以上を茲に記するを止む。但彼等の祖先が果して何年前より釧路近傍に住し、アッケシ、クッチャロ、クスリ抔其他水涯山谷の隈まで其跋涉の跡に天然人事の形物狀態の意を寓して地名を殘したのに就いては後者の敎を待つ爲としても少々逃べる必要がある。厚岸が釧路よりも古くから榮えてゐる抔は面白い材料だ今日から云つても無論惡ひ根據地ではない。殊にアイヌの戰國時代とも云ふ可き長祿慶長和頃の混亂時代の根據地としては誠に結構な所であつたに違ひ無い常に地の利を逐ふて移る彼等のことであるから連續して住居したか何うかは不明だが安政前後と今日の戶

は比羅夫の征夷當時以降盛んに此の方面に移住したものではあるまいか。

敎にしても、明治以來の彼等は、幸福である。千載一遇とはこの事であらう。有難き明治の文明敎育を受くる春採白糠の兒童を見れば、何時迄も自然にのみ制せられる〻事多く燻り老ひて終る者でない事が分る。春採の如きは永久保秀二郎氏の熱誠なる薫陶の下に日に月に脫化しつ〻ある。

本年英京倫敦開催日英博覽會に出悉けた彼等の一族は「世界中の最從順民族」と云はれたさうだが、之は全然冷嘲されたのではあるまい。但彼等は自然民族に於ける通弊たる一定の意志なき爲、文明感化の早き如く又奸惡の徒に誘拐され易きは遺憾である。兎に角に、今日迄アイヌ風俗として各種の著書にあるやうな習俗は次第に變遷して、正しき生活を嬉ぶ樣になつたのは、獨り彼等のみならず、明治　聖代の賜として嬉ば

亡國の歌踊と爲られながらも珍しき可笑しく看られて居るものが、近き將來には興國の動作となり、熊祭や撫髯の禮も寫眞繪畫で滿足せねばならぬ樣になるのであらう。年によりての豊凶は偶々爭鬪があつたとは云へ、一般に食料豊富なる釧路の天然は、此處にも呑氣な歌謠を好む性を繼いで、神威だの、戀だのと恰も印度の非文明人の二の舞を遣つて居たが、四圍の事情は之を許さぬのみならず、經濟觀念の必要を自覺する時期に到達したと見ゐ、永住の基礎を作ることを希ふ樣になつたと云ふ。所謂亡國の歌踊が無くなる原因は是が主なるものであらう。

○夷竹枝　　嶺田楓江

圍欒炙肉坐沙場、　碧顏黃髯傾酪漿、
鼓腹鳴々歌未罷、　九郎山下月如霜。

愛儂　山澤猪村

紅葉知秋花識春、　葛衣被髮語還諄、
看他世上人根食、　太古山容太古民。

遊樂部所見（安政年中）佐藤西山

深顰多鬚勢傴僂、　口邊創刺見人羞、
定知此是夷村落、　茅屋門前祭獸頭。

演俚歌意賦一絶　岡千仞

妬婦初頭帆影明、　双行紅涙送郎行、
春風不度神威岬、　腸斷海山千萬程。

○アイヌ百年間戸口増減（釧路に於ける）

年代	戸數	人口	男	女	備考
文化六年	四八二	二、二五八	一、一〇三	一、一五五	東夷雜々夜話
文政五年	四三八	二、一五三	一、〇三二	一、一二一	雜書
安政元年	二〇七	一、四六八	七一八	七五〇	安政元年巡見記
明治十年	三四六	一、四八四	七二九	七五七	開拓使の調査
仝三十年	三六四	一、五六九	七六八	八一〇	北海道廳調
仝四十二年	四〇七	一、六四三	八〇八	八三五	釧路支廳調

穴居から木造居、朴直から狡猾猜忌、今は明治の文明人を氣取り、明治以來增加したと雖も、未だ百年前の戸口に達せぬ。早く戸口と共に元の朴直に歸つてほしい。

○山容水態

▽釧路天然對人類の初期は原始的民族の衰亡のみ
▽第一期開拓は天然を利用するに在り之を保護するにあり

北海道の天然美と云へば、椴松の林が連想されるが、釧路も森林とは何萬年前からのお馴染であるらしく第三紀層地下に昔の俤が偲ばれる。古書には春鳥沼と石炭とは附きもの〳〵樣になつて居るのは一寸面白い。今の針葉樹濶葉樹も古く太く近代のものとは思はれぬ程の立派さ。春夏の濃霧は此の中の仙人の仕業ではないかと疑はれる。六月初旬の薄綠の芽は、九月下旬に黃に紅に染み、濶葉樹の秋色は常綠美なる椴、蝦夷松林相と雄大の美觀である。殊に釧路の秋の天高氣靜なる最快晴時と來て居るから堪らない。

前森林時代以後の地殼の變動は、大した景趣を殘したもので、山川湖沼海岸の風致は、寛政以降の紀行詩（之はハイカラに非ずしてカキガラの層也）阿寒川の上流には、松浦氏の「那智に彷彿華嚴に幾倍」と云つた炭山鐵夫は「お祖父さん時代の悶着です」と云つて坑內作業をやつて居たが、蓋し之は、屢々坑道掘進中所謂斷層なるものに打ち當つて其炭層の行衞を心配した時の戯談である。即ち之等石炭成生以後の地殼の變動を悶着と云つたのであらう。斯く釧路の山川は何の因果が變化に富んで居る。數多き沼湖河川美趣と共に富源となり富を生むの導火線となつて居る。

北海三高峯の一たる雌阿寒岳を筆頭に、釧路川二十餘里の上流に聳つ山々。其峯影を醸して、清澄靜かに太古の色を湛へたる屈斜呂摩周、或は海拔五百米阿寒湖畔の幽境は委しく紹介する必要がある。塘路春採も亦湖畔の土人昔を語り。（と云ふと隱居臭いが）厚岸鹹湖の風光、殊に牡蠣島の奇は、米國太西洋岸に散見せるラクーンに類するとやら、正に東洋の珍である。

（之はハイカラに非ずしてカキガラの層也）阿寒川の上流には、松浦氏の「那智に彷彿華嚴に幾倍」と云つた

瀧がある。

天然の利用如何は釧路發展の消長である。釧路天然對人類の初期は原始的民族の衰亡のみ、殘骸のみ。第一期開拓は歩を進めて殘骸をさへ復活せしめんとするに到つた。希くは、天然を愛し、天然を利用すると全時に天然美の保護亦周到ならんを。

讀久摺日誌　　南　華

七里澄湖擁絳巒。　摩周山峙勢龍蟠。
洞熊欲吼斜陽際。　讀到那邊膽氣寒。

◉雌阿寒岳

▽山名、眺望、位置地勢、山相、噴火口、温泉登路、高度、土質、動物植物　▽氣象概況一班、暴風雨記事

雌阿寒山は、其頂上の大噴火口を以て峯を東西に分つ。東方を「マチヂシリ」（雌山）西峯を「ポンマチヂシリ」（小雌山）と云ふ。今では西方小雌山の方が稍高大であるのは面白い。察するに現今尚蒸氣を噴きつゝある活火山なれば命名後爆發ありて斯の如きか。西峯の南なる所謂阿寒富士の三峯を合して雌阿寒山を成す。

絶頂快晴日の眺望は、浩蕩雄偉實に仙境。地は北海東部の高を占め、南東に大平洋を、北に網走を越ねてオコック海を東北遙に陸を迎る視線は、根室半島國後の山に消ねて、千島列島は夢の如く雲に入り浪に沒す。南幾多の山脈は波浪に似て東西に長く。西に蜒蜿たる中央山脈の一帶、所謂大陸的雄偉觀は、石狩岳、十勝岳、ヌタップカウシ山の雲に聳ねて雪皚々たるの中に在り。東方最も眺望に富み、近く翠中に漫々たる阿寒湖は、オンチモシリ外三島を浮べて「鏡湖磨碧環」の句其儘、其東岸に雄阿寒嶽の英姿を望む。阿寒川の下流には釧路町の人煙港頭、白帆點たる厚岸灣も亦目廂の中に在り。時に雲烟縹渺の間、摩周羅臼濛琴の連山の景なる、「天庭に翔翔し、帝座に呼す」とは是邊の境を言ふもの乎。動植物の珍奇なるもの數十にして止らず。（別項に高山植物として之を記せり）

▽本山は北緯四十三度二十三分、東經百四十三度五十九分四十秒に位し、半腹以上傾斜急にして概ね三十二度内外を以て低下し、東方は「フレペヌプリ」に連り阿寒湖を狹んで雄阿寒山に相對し數條の溪谷を有す。南傾斜は山麓ワクカクニプ澤より阿寒川となり、北オタウシペヌプリに連り北東オータンベ、フシコタンベ、北はポンスリコマベツ澤にして阿寒湖に入る。北西方オンチスリコマベツ澤あり、西麓なるキムトウ湖は一名島田湖とも云ひ地形圖には無きものなり。南はポンマチヂシリと阿寒富士との接點に於て西方に開く一溪谷あり、之れ雌路川の支流ラワンの水源たり。一支脈は南東方に延びて蜿蜒群山に連亘す。

▽山巓は一大火力を以て破壊せられたるもの〻如く、其幾部は熔解岩及其砂礫を以て成る、殊に時々大噴と稱して濛々蒸氣を噴出し、到る處硫氣温泉の湧出せる、阿寒富士の倒扇形なる是皆火山の特性なり。而して數種の草莽を散見す。

▽頂に二噴火口あり、幾年前の破裂なるか詳ならず。東西兩峯の中央に在る者最大にして二峯は恰も其岳壁を成し、直經凡三丁、底淺く且坦にして、扁平なる二小丘あり。其北西隅より盛に蒸氣を噴出し上昇十余丈に及ぶ。時に其量多き時は、滿山を覆ひ、僅かに四町を隔つるマチヂシリ頂上に於てすら硫氣鼻を衝いて堪ね難きことありと、土俗之を大噴と云ひ、其口には硫黄累々たり。大噴口の側に小噴口十數個あり、鳴動は稀にして常に僅の白雲の昇るが如きを見るのみ。

▽温泉は一見帶黒色のもの　一、帶白色　一、無色二三あり、分析の結果は皆無色にして有毒性物質を含まず、此中帶白色のものは千分中一、七二の固形物を含有し、其主なるものは酸化鐵、礬土硅酸、石灰及硫酸にして、有毒性金屬を認めず無色無臭の如きも之に觸るゝ岩石は青白色を呈し居れり。

▽登路（釧路線大樂毛驛より舌辛を經て）東方飽別村字ピリガニップより登る一路あり、駄馬を上下せしむるに足る。フレペヌプリ山麓を南側より西側に沿ふて登る凡一里半の間は傾斜緩慢にして椴松の密林中所々エゾ松を交生す。大阪と稱する所より傾斜稍急なるも暫時にして復た緩となり里餘にしてマチヂシリ東面中腹の邊松漸く疎にして偃松帶に入る、硫

黄採掘事務所より假松の密生となり、山漸次急峻となるも迂回して容易に頂上大噴火口南東岳壁に達す。之より絶頂に至るには三十二度の傾斜にして是を一周せんとするには少くとも五時間を要す。

▽明治三十年道廳技師水科七三郎外三氏の觀測隊が「ルールマン」式に依り算出したるマチヽシリの高度は、十勝に基き千三百二十二米突三、網走に基き千三百十九米突、釧路に基き千三百二十五米突にして、平均千三百二十二米突三なり。ポンマチヽシリは稍高く千四百十三米突三なりと。

▽山頂の表土を攪成する母岩は安山岩質熔岩、土質は安山岩質砂質壌土なり。

▽明治三十年マチヽシリ山頂に於ける道廳水科技師等の臨時觀測記に據れば

◎氣象概況　氣壓平均六百四十八粍二一にして之を十勝、釧路、網走各測候所の觀測に比するに、十勝より百〇九粍二七、釧路より百〇六粍四九、網走より百〇五粍五二低く十勝の較差最も大なり。最高全年八月十五日午後八時及十六日午前八時の六百五十二粍二にして、最低は同二十五日午後四時の六百三十九粍なり。

温度は平均八度九六にして十勝（一九、四五）より五度三二、釧路（一八、二）より四度〇七、網走（一九、三七）より五度二四低し、其最高極は八月九日二十九度三、最低同月十五日二度五なり而して其變化は平均八度九六にして十勝の一一、四四より二度四八、釧路の一〇、二より一度二四少く網走七七、五より一度二一大なり、最大は八月十六日の十七度四、最少同月四日の四度五とす。

濕度は平均八十四、一五にして十勝の八五、六二、釧路八五、〇より稍乾燥、網走八一、七七より濕潤なり、風速度平均八米突一四なり。

風向の最も多きは西風にして北風及南風之に次き東風最も少し又風力は西風最も強く北風之に次き東風及南風弱し、西風は濕氣少く高温を保ち北方の風は常に濃霧を伴ひ濕氣多く温度低し故に西風は能く晴天を保ち北方の風は濃霧と共に温度低冷霧益濃密なれば温度益々低下し爲に手足の感觸を失はんとするとあり、八月十五日の現象は其最たるものにして温度二度五に低下せり。

天氣は概して言へば夜間は風力強く雲量少くして晴天を保ち晝間は之に反し殊に山頂は昇騰氣流の襲よ所となり忽ち陰忽ち晴變化極りなし。

山上の氣壓は、午前二時の六四七粍八七乃至正午の六四八粍四一間にありて概して晝間に高く夜間に低きも山下の網走、釧路、十勝之に反す。

◎暴風模様　（三十年八月）

山上に於ける暴風は北より西に逆轉して靜止するものと西より南に逆轉し、再び西に順轉して鎭靜するものとの二有、殊に西風は其數多く且速度亦猛烈なり概して西の暴風は晴天を保ち北の暴風は雨霧を伴ひ來るを常とす、然れども雨景は少く一回六粍以上に達するとなし。

強風或は烈風の際は殆んど平等に連吹するも風力愈々猛烈颶風となるや強弱斷續して其速度一定せず一高一下其間凡五秒間に互るとあり、猛烈なる風の將に來らんとするや山岳先づ響應を起し忽ちにして襲來す其光景實に悽然たり。

今回觀測したる暴風日數は八月中十九日の多きに居れり就中猛烈を極めたるは二十六日夜半一秒間三十八米九の颶風なりとす（暴風中晴雨計の變化は高低不定不規律特に水銀面を注視したるに一進一退毫も靜止せざりきと）

◉雄阿寒岳

地名辭書には、郡の北端に在り、雌阿寒岳と共に有名なる火山、標高千五百十四米突、美麗なる圓錐狀、釧路より廿里、麓より頭に至る一里半と。雌阿寒岳の高度は全書には千六百十七米突とあり。山麓の直徑約一里半、阿寒湖、パンケトー沼にて東南北の三方を圍む。山頂をピンネシリと云ふ。

松浦氏紀行に曰く。（安政五年三月）曉霧咫尺を辨せず相呼應して進む事百餘歩、茂樹陰森として衣を鉤け髮を冒す、石滑にして路絶ゑ、熊鹿の跡を踐む、殘雪未融けず、蒺藜蹊を刺し草鞋血を濺ぐ（中略）異艸奇花、芬々儻恍たり、滴金露最多し、土人採て之を食ふ、山は赭禿、攀援して登ること二十町許、木幣多に到る、地僅に平坦、春草萠ゑず、寒威知る可きなり。

土人木幣を立て岳神を拜す、湖を望むに清澄愛す可し、小憩して攀つれば滿目樺樹其大五六尺、唯窺地に滿ン、又行く事二十町可り、岳東に出づ、雪積が

にして路險なり、五葉松ありて岩に攀ぶ、皆大二三尺、異草夥し、土人は山神の祟りを畏れて敢て採らずと云ふ、日午山嶺開淵四顧峯巒、多く兒孫の俯伏するが如くにして岩脚下に立つ、三生頻に指點して余に示す、戀語通せざる所あるを恨みぬ、元の范德機句あり云ふ「戀語翻人飜自苦、好山不敢問何州」余始めて此語の妙を悟る、又遙かに大岳の天末に特立するものあり恨むらくは土人の識らざるを、想ふに是石狩岳なる可し、其間廣袤百里、山川相繆り蜿轉として奇を呈す、天暝く霧遽り俄頃にして混沌たり心神畏懼す、土人言ふ是岳神の所爲なりと木幣を立てゝ祈る、余亦國歌を賦して岳神を拜す、餐飯して憩ふに雲霧漸く晴れ寒氣凜列歩を展ぶるに艱難なり、則松枝を雪上に藉き蹲踞して下る半時ならずして樺原に達す、日既に申、湖濆を過ぎ温泉に浴す、傍に石あり龜背に似る是其源なり水は石罅を透りて流る其熱銀を鎔す、小流に合して湖に注ぐ、之を掬すれば硫氣あり、倦疲漸く癒ゆ、壯佼八生此に至りて余を待つ、木皮を以て屋と爲し魚鹿を捕へ以て饗す、風土殊異言語侏離、眞に別天地なり。

雪中の異草珍花爛熳是れ奇觀、高山植物の特色か。

眺望快偉なる雌阿寒岳と全じ所が面白い。阿寒鐵道通じたる曉に彼と是との對照は妙であらう。

◉阿寒湖

前記登山者の毎に鏡と形容し仙境と云ふも無理はない。周圍十里とか十餘里とか云ふが實は七八里位である。北西隅にチウルイモシリ、北岸オタウンナイ河口にヤイニタイモシリあり。南岸阿寒河注入口に接して周圍約半里短艇形に長きオンチモシリ、其左手ポッケー水流崖約三町ポンモシリ（小島）を見る。初夏湖畔の躑躅、石楠花、島上、四圍千年の綠漲る眞夏の午時、牧馬の嘶を聽きながら湖心に眠れば、夫こそ羽化登仙。屈斜呂か此處に離宮を造營して、塵境と崇め奉るか何うかしたいものだ。湖中のカッチエップと稱する小魚も亦珍也。近年宮部博士の發見に係る一水草あり、莖一寸大の半球狀にして、分裂して蕃殖するとは、噴火口内のメアカンフスマと並びて珍中の珍である。余曩

阿寒湖　　松浦北海

水面風收夕照間、　　小舟撐棹浴崖還、
忽落銀峯千仞影、　　是吾昨日所攀山。

◉阿寒瀑布

阿寒川を溯る約六里巍然巉岩舟を捨る所瀑布あり。松浦氏久摺日誌曰、（上略）俯視石潭、其深不知幾仞、水悍怒鬪激、岩勢犬牙差互、巨木掩日、瀑布懸焉、横亘大凡五十尋、高三百尋、狀白龍下垂、或化球玉、或起雲烟、千態萬狀、彷彿那智、而幾倍於華嚴、衣霑髮竪、慄粟不能久留、賦國歌、書木皮、歌云

いつまでもながめは盡じわかぬ山
　妹背の中に落る瀧津瀨
山姫のさらせる布もふるければ
　妹が白髪と我こそはみめ

（前號）　一九

◉屈斜呂湖

釧路川の溯行約二十五里其水源は大湖。水面は阿寒湖より四百米突低く、僅に百米六なりとはこの川の舟揖に便なる所以也。

トーモシリの翠巒千尺湖心に峙つの絶景は又とあるものぢや無い。夏秋は無論の事。蕊翠嵐嫣々と絮を捲いて周回十有二里の水鏡に吹き附くるの雄大は、もう日本では見られまい。北西岸の御料林、東岸跡狹（アトサプ）登森林皆鬱蒼たり。紅葉綠樹の眺め盡くれば、筏となつて碧瑠璃に浮び釧路河に流る。重疊なる哉此山水。若し夫れトーモシリ千町歩を限りて居を占め温泉に浴し牧畜家禽、蠶絲を繰るを擅にせんか、桃源を氣取り損ねても惡くはないであらう。湖中處々に温泉の湧出するあり、嚴冬氷結せる湖面所々に穴を見るは之が爲めなり。

松浦氏の黑烟云々今は無し。

（前號）　一九

塘路到跡佐登硫黄山　淺井小枝

絶無柳暗又花明、　腸斷春風十里程、
五月硫黄山下路、　棋楠翠裡聽鶯聲。

松浦氏紀行、　九磨の湖上に刳舟を行るに、かの沼（ト）島（モシリ）は周廻一里、岸皆壁立樹木陰森北面少しの澗あり、また西に向ひ三十町許遡りて西岸ヤヤコツモシリに着す（周二十町許）是も根木立、周回赤壁東面に一つの火坑有り常に燃えて黒焔を噴出し其響遠きに聞ゆ、岸に船を寄せよと言へ共土人恐れて寄せず、強て其十餘間脇へ寄せ、深林の中より望むに心目眩掉、須臾も留り難し、而も出船するや西風吹き起る波浪逆立、一葦の小舟いかんともし難きに又其火坑の傍に泊し風の止むを待つ、即ち日も暮れ掛るや彼の餘はます〳〵照り耀き我等の面に映じ、偖六つ過と思ふや光り湖面に映じて昼の如し。

聞說九磨湖、　一々疑鬼設、　巧哉造物者、
到此逞詭譎、　毎向日淪際、　有火騰巖穴、
始如金蛇掣、　終如燎原烈、　光焔長萬丈、
可以察毫髮、　松生脇何大、　日擊記頗末、
燭陰與燭龍、　奇觀莫或軼、　一部山海經、

○松浦氏紀行曰、　湖中に一の立岩有神岩といふ、夕方湖面を眺望せしに、岸を隔つる事十餘町にして大さ筵の如き黒き頭を上ぐる者あり、其口を開けるが頗中恰丹朱を含むが如く、夕陽に映するや金鳥の東海に泛むが如く、其光赫々として水に映じ、土人は見て懼かず神魚（チエプ）といへり、湖中此魚計にて他の魚なし、其小さきもの岸に寄る事ありと、依て飯粒を投じたれは、窺標の小魚多く群り来りける、此魚は臼沼（洞爺湖）支笏湖にもあり、また余は南部の湖にても一度見たるが其れと同物とおもはれたり。

倩汝補遺缺。

右題久磨湖圖　　鴛津毅堂

◉摩周湖

川上郡の北東端、根室北見の國境に接し四面連山を以て圍まる、水面標高三百五十六米、東西一里乃至半里南北約六十町周圍六里。形狀法馬の如く湖心碧澄にして宛然玻璃鏡を開く、東岸に神嶽峙ち、排水路を有せず。

神威嶽の頂に曰く、　西別の水源よりよぢ登り神岳の嶺に至らんと欲するに、樺の木枝を接へ、五歩松、石楠花、木石を繋ひ其間に丹赭綠を塗抹せし如き奇岩怪石簇々と重り、攀ぢんとなすも、螫确たる險阻霏々落々として、復如何とも爲し難し。匍匐して登るや右の方は恰も立つる如き所、左の方、直立千仞の岩根碧水溶々目眩して臨み難し。扨、山八分に及ぶや岩落ち石崩れて如何しても頂上までは難しと思ひしかば、否やを土人に問ふに、此頂上へ登りし者一人も無し。然るに君は先立ちて登らるゝ故に我等も附随へりといふに、驚きて下らんとするや、一人余に代り先に立ち匍匐して上る事又三四百歩、馬の背とも云ひ、劍鉾の如き所を過き、胎内〳〵り。（後畧）

◉藻琴山

川上郡根室國境に在り高距千二十一米突、屈斜呂湖北畔に屹立し、其距離經一里、湖畔の諸山と共に千島火山脈に屬す。

松浦氏紀行曰、　ピポロより孝野を經て凡二里ニマンベツはクスリ舍利の境也、（中畧）（又五里にて）モコトウの上に出る、此沼周り凡三里西岸より下りて海岸（ピ）に出づ、人家五軒あり、アフニと云へる老婆の方に宿しけるに、我等山より出し故、喰物も無しと思ひ、子供等大勢を沼に遣し、蜆を取つて一同を煑しぬ、感賞すべし。

屈斜品湖　　春湖山一人

森渺無波潜太湖。　更又水中抽島區。
崖樹槳舟人不見。　殘月如鎌驚宿鷗。

◉春採湖

釧路町より何里と云ふに非ず、何町と云ふにあらず釧路の快晴時、湖畔の丘陵秋の色を愛で、半日の清遊、霜晴の遊行、氷上のスケーチング、行く〳〵は公園地として紅き櫻に、綠の中に舟を浮べるのも面白からう。釧路の戸數を何萬と數へる時には、湖畔の絃聲に鴛鴦の浮寢安からざるものがあらう。東西に長く一砂塘を隔て、太平洋の濤聲高く、園続せる丘陵は高く迫り低

く潤き、白き水鳥は閑に、山深く鳴く山鳩は優、冷露害を加へるものやないさうなが、心地は好いものぢやない。仙鳳跡附近の密林、北西の山地屢々其影を見に更くる夜の牡鹿は幽なり。櫻散つて鈴蘭の香高き霄る。明治十五年頃鹿と共に夥しく狩り獵つたさうだ低徊趣味に富む。此水に緣ある石炭は徘する棹聲に、が又蕃殖したらしい。鹿は頗る稀れである。阿寒の赤漣靜かなる帆足に運ばれ、鬼呼海岸を縫ふ線路に積み熊は八九月頃山頂の岩高蘭の實が葡萄の樣に熟した頃替へられて町に出づ。春鳥とも書きハルトルのトを半ノソ〳〵と登り込むさうだ。水鹿、狸狐、貂、兎、シ濁音に記せるあり。二十余年來茲に廬を開き土人を敎マ鼠等一般北海の獸類は大抵居る。臘虎は百十四五年ふるに熱心なる永久保秀二郎氏は春湖と號す。特に此前までは海岸に來た樣に窃記に見える。今は鯨、海豹。著に一詩を寄せらる。阿寒屈斜呂兩湖亦各一詩有り。海驢の稀に來る位のもの。虹別地方の鹿は冬期の一產

春採湖　　春湖山人

平湖如鏡最淸幽。　花影動時飛白鷗。
兩岸風光水心上。　看做鯨鰐便炭舟。

○動物植物

別保山野の蕗が大きくなつて何となく山が暗くなつた頃は放牧の馬が喰はれて居たり、夜半の山道俄に馬が驚いて振り落される事がある。熊は無暗と吾々に危害を加へるものぢやないさうなが、心地は好いものぢやない。仙鳳跡附近の密林、北西の山地屢々其影を見る。明治十五年頃鹿と共に夥しく狩り獵つたさうだが又蕃殖したらしい。鹿は頗る稀れである。阿寒の赤熊は八九月頃山頂の岩高蘭の實が葡萄の樣に熟した頃ノソ〳〵と登り込むさうだ。水鹿、狸狐、貂、兎、シマ鼠等一般北海の獸類は大抵居る。臘虎は百十四五年前までは海岸に來た樣に窃記に見える。今は鯨、海豹。海驢の稀に來る位のもの。虹別地方の鹿は冬期の一產物であつたさうだが今は少し。沼には白鳥、鴛鴦、雁、鴨、鵜、田鳴、山鳥、カケス、エゾライテウ、ルリキビタキ、コガラ等、阿寒噴火口内イワツバメの群飛せる、別保山中はとぎすの やかましい 杯は一寸面白い。爬蟲類の厥な奴さん二三種、茸採りに行つて驚かされる。阿寒山頂ムカデの一種、メクラグモ、ジヨラウグモの一種、蝸牛類エゾマイマイ、ヒメマイマイの二種稀に、仝山四千尺以上晴れたる日、ヒメヒヨドシ蝶の幾百と群を爲して飛ぶなどは、平野の圖でない所だ。農學士川上瀧彌氏が學生當時採取して松村博士の撿定したる昆蟲は五十九種類あり。

魚類は鰊、鯛、鮪、鮫、鯉、鱒、鱈、鮎、鰈、キユウリ、チカ、目拔鯛、大鮒の刺身は誰も甘しとし、鰍の共和へは俳味たつぷり、厚岸の白魚、牡蠣の吸物、フライも詩になれば、釧路川に溯るシユシヤモ、塘路沼尻のワカサギ、阿寒湖のカワチエツプ（春湖山人の樺魚と云ひしもの）は釧路の珍物他にはあまり無いもの。

阿寒湖　　春湖山人

雌雄寒嶽聳雲間。　上有鏡湖磨碧環。
秋老樺魚喰喁外。　靑山紅葉影斑々。

深綠なる 棋楠樹（松柏科、いちゐ、和名あらゝぎ、きやらぼく、をつこ、やまびやくだん、みねぞう、すはうのき、アイヌ名うるまに、くねに、學名 Taxus cuspidata, S. et. Z.）の枝に眞紅なる蒴形の實を結べるは盆栽として翫賞するに最も好い。幹高五六丈周圍五六尺に及ぶものあり。樹皮は黑赤色薄く裂目なし。葉は互生葉、多少に縱列をなし、少しく上撓、線形、中肋、尖頭にして銳刺を爲し、上面深綠長さ六七分幅は一分あるなし葉柄短く一分に充たず。花雌雄異株にして枝椏の葉腋に至つて小さき雄花を攢簇す、長二分、其基脚に數小苞あり黃褐色、倒卵形にして覆瓦狀をなし排列す。雄蕊多數（九）花絲短小、葯多室、楕形の鱗片下に着生す。雄花は葉腋に獨生、始め綠色、蒴形をなし多くの小鱗片内に包まれ其頂端に一珠孔あり、裸殼は極めて堅し。（挿木すれば根を生ず）材質は淡褐赤色にして少し裝色を帶ぶ。肌理頗る緻密、彈力あり アイヌは必ず獵弓に之を用ふ。建築材、床柱、板、机、箱、桶、火鉢、それから鉛筆材としては第一等か。不

思議にも冷澗の陰林を好み、葉落松、椴松の下に生育し全道到る處に産するも釧路根室に多く殊に厚岸には良材が多い。

河畔の地には楡榿、柳、赤楊、胡桃、槭、白楊、ドスナラ、笹、芦、雜草は最も多く、蕁麻は手足を刺されて蜂毒の如くなるとわり、ソサソテツ、エンレイサウ、劍寄奴、艾の二つは丈餘に達す。ハンゴンソウ、トリカブト、ウバユリ、莎草、ヤチボウズ、澤瀉、觀音蓮、高原地には樺、楢、欅、桂槭、赤楊、刺楸、椴槐、白楊、菩提樹、黄蘗、厚朴、アオタモ、萩、蕨其他。屈斜呂湖畔、阿寒、尾幌の林相は美にしてまた富源也。

釧路の野崩芽は四月中旬、濶葉樹の萌芽白糠五月中旬、釧路下旬、野桑も亦仝期、原野山林の青みを帶ぶるは六月中より下旬、野草の最も盛んに生長するは七月上旬、楓は九月下旬候に紅く十月上中旬仝山是紅葉黄葉して釧路の名物も殘りなく露れて、澄み渡る月光に珠と燿く露は霜かとばかり、春採別保の濶葉樹は十月中既に眞つ裸朝々の霜に馬の息はいと白し。

○雌阿寒の高山植物

火山灰、石コロ交りの砂の中にポツリ〳〵と頭を出して可憐なる、淋しみのある咲きやうとでも云はうか所謂神秘的な處のあるのは高山植物であらう。松浦氏の異艸奇花芬々と云ひ、土人は神の祟りを恐れて採らぬと云つたは、ふ次ぎの様なもの。川上農學士調査、宮部博士の校閲したるものである。

先づ雌阿寒山の植物帶は之を四帶に分つを得べし、▼第一帶は山麓阿寒川畔及ルチッシ原野之に屬しニレ、ヤチダモは河畔に、ミヅナラ、ヤマハンノキは原野疎林をなす、▼第二帶は山麓より凡そ三千五百尺の間針葉樹の純林にして、トドマツ、エゾマツ蟲々として喬く長く、其下には笹がある。山麓には濶葉樹シウリ、シナ、オガラバナを混ず、アカエゾマツは凡三千尺以上に繁生し、ナヽカマドは四千尺以上に疎生す、▼第三帶はハイマツ密生して、純林殆んど頂上に達す、谷に沿ひてミヤマハンノキ疎林をなしミチヤナギ頗る淋しさうに立てり、▼第二第三帶の間濕水繁茂せる一區あり、ウコンウツギ、シロバナシャクナゲ、(姫石楠花)クロウスゴ、オホバスノキ、タカネバラ、イソツツジ、等雜生、▼第四帶は頂上及火口内之に屬し、ガンカウラン處々に、ミチズワウ、イワウメ岩に纏ふ、コマクサ、メアカンフスマ、イワブクロ、メアカンキンバイ、ホソバオンタデ等點在せり。

▼仝山に産するもの　二百三十七種、第一帶四十種、第二帶百六十種、第三帶四十四種、第四帶十五種あり。第二帶以上の百余種の中より左に列記す

○隱花植物之部

菌　類

一、Chrysomyxa Rhododendri (DC)De Bery.
(on Rhododendron fraehycarpa.)（二、三略）

地衣類

四、Cladonia cristatella. Tuckrm.（五、六、七略）

蘚苔類

八、Climacium Ruthenicam. Lindl.（自九至一七略）

羊齒類

一八、シノブカグマ　一九、シラヰワラビ
二〇、ミヤマキノデ　二一、ゼンマイ
△木賊科　二二、イヌスギナ　△石松科　二三、ヒカゲノカヅラ　二四、スギカヅラ　二五、アスヒカヅラ　二六、マンネンスギ

○顯花植物（裸子類三其他被子類）

△松杉科　二七、アカエゾマツ　二八、トヾマツ
二九、ハイマツ　△禾本科　三〇、ヤマガリヤス
三一、ゾノガリヤス　三二、ヌカボ　三三、ヌカキビ　三四、ヒロハノドヂョウツナギ　△莎草科
三五、テンツキ　三六、Carexfidentula, bidentula Franch.（三七略）　三八、アカンスゲ(新稱)
三九、エゾマツバスゲ(四〇略)四一、ヒメスゲ
△燈心草科　四二、ミヤマヌカボシ　△百合科
四三、マヒヅルサウ　四四、オホバタケシマラン
※四五、タケシマラン　△蘭科四六、コフダバラン
※四七、フタバラン　四八、ヒトツバラン(四九略)
△楊柳科　五〇、ミヤナギ　五一、タチヤナギ
△樺木科　五二、ミヤマハンノキ

△蓼科　五三、ホソバオンタデ　五四、ウラジロタデ
△馬齒莧科　五五、スベリヒユ
△石竹科　五六、エゾフスマ　五七、メアカンフスマ
山頂及火口内ニ産ス細長淡黄色ノ根莖深ク土中ニ横走シ細根及莖之ヨリ叢生ス、地上莖一寸乃至五寸地下莖長キモノ一尺ニ超ユルモノアリ、葉ハ對生、無柄厚質、楕圓形、巾三分長五分乃至七分或ハ披針形巾一分五厘、長五分、地ニ近ヅクニ從ヒ小形トナリ遂ニ一小卵形ノ鱗片狀ナナスモノアリ其色淡黄ナリ。鋭頭網狀脈、葉一肋アリ莖葉共ニ微毛アリ、緣邊列毛排列ス各節間一分乃至五分、花ハ頂生及腋生ニシテ單出、一莖ニシテ二分岐ヲ出スコト常ナリ。花莖直立セズシテ稍偏斜シ花謝スレバ屈下ス、花梗長キハ七八分短キハ四分ナリ。萼片五、披針形巾一分五厘、長二分、鋭頭花辨五、白色殆ト萼片ト同長、卵狀披針形、稍鋭頭長サ二分五厘巾一分五厘。雄蕊十個五個ハ較短ク長キモノ長サ三分、花絲白色、葯二胞各胞長楕圓。雄蕊下位、子房卵形、花柱三個絲狀、上部ハ外方ニ彎曲シテ相離ル胚珠數生胎臟形ニシテ短柄アリ中軸胎座十二乃至十五個アリ
△蠅取科　六〇、Epilobium sp.　七一、E. sp.　七二、E. sp.　△繖形科　七三、チシマゼリ（七四略）　△山茱萸科　七五、ゴゼンタチバナ　△鹿蹄草科　七六、マルバノイチヤクサウ　七七、シャクヂャウサウ　※七八、ギンリヤウサウ　△石南科　七九、オホバスノキ　八〇、イワツヽジ　八一、クロウスゴ　八二、コケモヽ　八三、コメバツガザクラ　八四、シラタマノキ　八五、ハナヒリノキ　八六、イソツヽジ　八七、ミヤマヅワウ　八八、コヤウラクツヽジ
此奇草ハ明治十八年八月故北海道廳技手農學士藤田九三郎氏始メテ此山頂ニ於テ採集シタルモノニシテ後チ露國植物大家「マキシモヴキクツ」先生ノ命名記述スル所ニ係ルモノナリ
△鼠粟科　五八、コマクサ　△十字科　五九、ヤマタヂツケバナ　△虎耳草科　六〇、クロクモサウ　△薔薇科　六一、ゴエフイチゴ　六二、タカネバラ　六三、ナナカマド　六四、メアカンキンバイ　六五、マルバシモツケ　△酸漿草科　六六、ミヤマカタバミ　△岩高蘭科　六七、ガンカウラン　△冬青科　六八、ツルツゲ　△科萊菴　六九、ヒメミヤマスミレ　△柳葉菜科　七〇、Epilobium sp.　七一、E. sp.　七二、E. sp.　△繖形科　七三、チシマゼリ（七四略）　△山茱萸科　七五、ゴゼンタチバナ　△鹿蹄草科　七六、マルバノイチヤクサウ　七七、シャクヂャウサウ　※七八、ギンリヤウサウ　△石南科　七九、オホバスノキ　八〇、イワツヽジ　八一、クロウスゴ　八二、コケモヽ　八三、コメバツガザクラ　八四、シラタマノキ　八五、ハナヒリノキ　八六、イソツヽジ　八七、ミヤマヅワウ　八八、コヤウラクツヽジ　△岩梅科　九〇、イワウメ　△櫻草科　九一、オホサクラサウ　△龍膽科　九三、オヤマリンドウ　△玄參科　九四、イワブクロ　△茜草科　九五、オホバヨツバムグラ　△忍冬科　九六、ウコンウツギ　△桔梗科　九七、タニギキャウ　△菊科　九九、オホエゾアザミ　一〇〇、ミミカウモリ　一〇一、アキノキリンサウ
（以上※印を附したるものは北海道にて新に發見せる種類なり）
九九、シロバナシャクナゲ

○釧路の「音」

理學者は總てのエナージを熱に換算する。
今茲には、釧路のエナージを捕へて「音」とする。
傳へ聞く釧路の音はお昌なもので、鼻で返事をして聞いてゐる譯には參らぬ。釧路にも所謂現代の寵兒が居やうから惡い音もある。音として惡感を起さしめるものは賞讃せぬ。殊に、惡い音を好む社會だからと云つて、惡い音を賣らうとする者も無きにしもあらず。是は惡事の賣買契約を以て一種の快事とする劣惡極まる除外者である。惡い音を聞きつけて來るものありとすれば、泥坊か賭博者か惡魔の子である。此の方面のエナージは茲には音として換算をせぬ。
綿密なる音は後篇に讓る。先づ卷頭の地圖に、川に沿ふて縱橫に劃せる黑線は、明治二十二年以來の撰定にて、殖民地原野約四億七千餘萬坪、高丘と平原と相半し、平地草原七千餘萬坪樹林地一億四千餘萬坪、泥炭地六千餘萬坪、仝二十八年以後の區劃地總面積五萬七千餘町歩。此の音を聞いて移住して來た農民は二千七十三戸、九千五百人二万千二百五十町歩を處分した。今後尙三千四百戸收容の見込があると。沿岸地質は第四紀層で至重の農耕地である。海岸一帶第三紀層の斷崖は釧路、厚岸、演中の港灣を有し、雌阿寒岳西

麓に亘る南西の地は石炭豊富にして、寛政以後タキイシとか釧路炭田とかの音を傳へたのは之である。

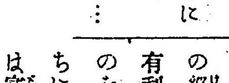
第三紀層の中でも火山岩質（輝石安山岩）は千島帶山脈で、雌阿寒西麓に遮斷せられ、北東一帶と厚岸郡後部村の海岸に小露頭を見る。前者に石炭ある如く之には金脈鑛が無いとも限らぬ。足寄郡の一部には古生層の小露出がある。丘谷に在る森林は四千町歩、ゴツン〳〵と筏や牽車で釧路に送られて夜となく晝となく轟の音、枕木を轉ばす音は寐て居ても聞ゆる。之が清英米と洋行してもう一度此の音と繰り返す抔はハイカラの方だ。四十八万圓以上の輸出とは大したもので、供用官林三千六百町歩擇伐永久的產額は年々五十万尺締ある。夏季の濃霧と冷濕なる氣候は、廣漠たる原野を牧畜に利用せられて居る。馬一萬、牛二千六百家禽幾萬、海には後篇に示す如く幾百の漁網と舟とあり七八十萬から百五十萬に達する水產額。汽船入港五十萬屯。

朝五時から晩の十一時迄汽車の音。電信の發受は日本一。今に市外電話は厚岸、根室、帶廣に通ずる。築港と云ふ大工事、一々數へ來れば新興隆運の釧路と誇るのも當然である。二ヶ町二十二ヶ村、一万百八戸、四万八千八百二十人、自治費十七萬圓餘（一戸平均九圓五十錢）を支辨し、地方稅五萬三千圓、國稅七万五千圓を負擔し、二千六百四十戸の實業家を有す。釧路一箇國は、全道の約七分五厘の面積三分四厘の人口で、全道生產額の大略一割を扱はんとするに到つた。が未だ到底完全なものでなく、價値を斷定するには未だ早い。

釧路町、釧路港と云へば、國內の首要地たるは勿論東海岸の樞要地、世界交通の要路と云ふ振れ込みである。約四千戸二万人（村部を除く）實業家千四百五十戸、所得稅を納入する者九百人、戸數割を負擔するもの三千七百、一定時の無担保貸出二十萬圓內外、銀行預金三百萬圓近く町內有價證券大略四万圓と云ふ程度であるから、先進の函館、小樽に及ばざると遠しである。及ばないからと云つて將來の經濟的地位は、今後釧路の設備如何に依り他を凌駕するとはさまで難事であるまい。世界の交通路は滿鐵の空想ではない。落石の無線局が布哇と通信し得る如く米大陸と西伯利亞大陸との距離は釧路を中繼とするに於て最近最便となるさうなれば、洋行するのは木材斗りでなく、新らしい音が生きて新らしい洋行品が出來る。即ち是が誇り得べき釧路の音である。

ウント太鼓を鳴らすに限る。香香の高くなるやうに先づ太鼓を堅固に大きくせねばなるまい。

ふ次は色と云ふ處に連絡をとつて行く……



○釧路の「色」

▽積極的釧路の發展策　▽經濟的循環現象　▽自覺新勢力
▽會社其他事業經營難、諸業組合觀

大きく成つても釧路、小さく成つても釧路、一度地球の上に釧路と云ふ固有名詞を据ゑ付けた以上は永劫取り去る事は能きぬ。困らうと困るまいと仕方の無い現象である。

釧路と云ふものが定められた以上は、何うしてもかうしても釧路たる所以を發揮せしむる必要がある。乃で釧路の最も生命とする所は何であるかと云ふと、その經濟的地位の發展と、價値の向上とである。地勢的有利の位置に在る以上は之即ちエナージの確固たるものを握つてゐる譯である。過去現在の生產の多少は直ちに釧路の價値を決するに到らない。無論生產の增加は富の增進であり、地位の發展向上ではあるが、先進地の配下若しくは其の鼻息を窺つて居る間は、勢力範

圏も、獨立區域も自己のものと安心する事は能きぬ。即ち純然たる獨立と新生産的方面の實力如何とに歸するのである。

エナージーの熱を音と換算した我輩は、分解的に、回轉せる動力の部分を「色」として働振を視る。

働き振りの特色に由つて其傾向を察し、適く所を知ると云ふのが順序であらう。

今迄に表はれて居る特色、明治十七八年前後は最も普通な殖民時代である。それ以後今日に到る間は殖民時代は無論のと個人的若しくは團体的の危機であつて、頗る統一を欠き、動もすれば各々個人的に極端に走らんとしたかの如く思はれる。實例を擧ぐれば厚岸鹹湖の牡蠣の生産休止、河口の埋没、釧路河口の閉塞、物價の急變、道路の頽廢、漁撈に關する不規律等である。

之等は急速開發の成せる自然界の破壞と云つたら云ひ過ぎるが、利用方法の宜敷を得なかつた結果である。傾斜の緩なる流域の堤防は古來水蝕の度少く、隨て薄弱なる堤防を木材の放流で崩したる結果流砂は河口を塞いだ。牡蠣の蕃殖を休止せしめた。他に無いから値を騰げる。溝板の上迄馬車を牽く。何んでも彼でも漁業權利を獨占したい。さうして無暗に不景氣に泣く、不便に泣く、直ぐ嘆願とか請願とかに出る。怪しむを止めよ、是をこれ經濟的環循現象と云はずして奚ぞやだ。

曰く會社、曰く法人、是れ自謎或は發展策に非らずして一種の個人的申譯手段なりと一稅務官吏は云つたげな。是も矢張り新開地の「色」である。

然しながら熟つて仔細に觀察すれば、之も自愛の一部分を表示したものである。即て一般的經濟思想の發達は、循環現象の刺戟に應つて秩序を無視するとの能きない證據を具体的に發表せんとする兆候ではなかつたらうか。

もう一つ何々組合の流行である。挽材會社の設立に木挽商の組合が生れるのは、一面自護策とも視ねさうだが、湯錢、豆腐、其他勞銀物價の引上策として組合が生れる抔は、正に之れ羊頭狗肉である。音を聞いて來る新來者こそ好い面の皮、お氣の毒樣だ。組合の目的はこんなものではない。

金融機關が、自己の焦げ附きを棚に上げて置いて、まだ鬱飛時機ですらないものだ。而してまだ其の上倉庫、銀行、運送、保險屋根性の固りで定期船增加だの、航路が何うの、時々鐵道迄も其口調で運げ口上を使ふ樣な現象があつたのは、抑も誰の罪ぞと問ふて見たい。双方が氣を揉む抔は何處まで意氣地が無いのであらう。是でも世界的交通の要路たる港民の資格が有るのかと訊いて見たかつた。

如何に文明が自然を支配するに在りと雖も、さう何處までも文明を振り廻して自縄自縛をやらなくてもよかりさうなものだ。

若し今迄が犧牲であるとすれば、今の自覺を大にして、新しい堅固なる基礎の上に、彈力ある生産能力の發展策に向つて、團結的行動を執つて貰ひ度いものだ。之れでもかと責め付けるのは野暮の骨頂である。

採算家的冷酷は野蠻の人格である。兎に角之は既に去に屬してゐる。現在將來の眞相でない事を辨明して置く。より以上內面に渉る必要もないからこれで止めて置かう。

○釧路の「味」

飛んでもないヘッデングを放り出しては見たものゝ、味のありさうな事は書けさうにもない。颯張り旨くない。もう〳〵滅多に氣取るものぢやない。

是れは〳〵と謂ふ程のものは、そんなに並べ立てる

程あるものぢやない。味の有りさうなものは少くないものだ。皆無では味が無くなつて了ふ、有り過ぎては有難くない。なア……矢張り世の中だ。書かうと思ひながら何處に何う味があるんだが分らぬ。

昨年法相が「釧路は江戸ッ子式だ」と云はれたさうだが、何處に江戸ッ子の味があるか臭ひがあるか吾輩には分らぬが、法相ともあらうお方が、ありもしない事を被仰筈はない。

十勝釧路根室から代議士を一人出す樣になつたのは何年だつたか忘れたが故柳田藤吉翁が初めてである。だが翁は根室の人だ。其次の選擧は四十一年の春。或は運動者は喋言る。

「何と云つても選擧區が廣いものですから、候補者は骨が折れたべねと思うんし」「釧路は築港問題と云ふものがありやしたから町から誰が起つかと云ふので下馬評が立ちますべい。持せ振りてねですか名乘が上らないんですねね。ソコデ氣の早い厚岸の木下成太郎君が起つたでがす」

「釧路帶廣では噂さが高くなつてる所へポーツカリ白石義郎君がおッ起ちましたねい。さあ野次りましたねい。株讓りの廣告文まで肝格がどうのかうのと木下君一流で遣つたも何んもですぜ」「愈々白石君が當選になりやすと今度ア道會議員の補缺選擧でがすねい。一方は町長の秋元幸太郎君だとか、佐々木與兵衞君だとか。まセッ返しには佐藤國司君だとか古瀬恒次郎君だとか野次りましたねい。だがアとう〳〵秋元君も一年は道會の味を見たのでげねすから、佐藤君も今年はお鉢が廻つたといふもんでげねせう。佐々木君は兩年共會社を楯にしやして出ねねんですねい。」「武宮善吉君ですかい、あの人は出ねい方がようがすよ」「佐藤君でねすか、新聞にもありやしたね一布衣より一躍道會議員ですてねい」

「斯う言ンちやゴタ〳〵して居て何も出來てねないやうでがすが、四十二年三月にや十二ヶ年繼續てね大した築港案も決まりやしたでがす、夫れからア電燈電話でげすかね。之も近い內にや根室帶廣と厚岸は無論市外電話てねものになる。之に鐵道が出來やす。まつたア剛寒線根室線てねのも通ずるてねのでげすから。やつぱア仕事は道つてるんでげねすねい議員の當り年でげすねい」

「中等教育問題も、公會堂問題も、公園問題も片附きやしたら今度ハア自に見ねぬ骨が折れやすから人物問題と出やすかねね」「人物問題となりやすと大分事ア面倒になりやすから別の時にしやせう」

○新聞と其人

◎「釧路新聞」は三十五年七月とかの創刊で。二千號は今年四月であつた。四六判には四十一年の七月からであつたと思ふ。日景綠君の主筆で、富村茂三郎君といふ經營者は社の維持上何うしても無くちやならない人が居る。白石東泉社長は更にお構ひなしとふ風である。日景君は漢學系の論說は勿論、紅筆懸板詞といふ奇拔な三面ものも見たことがある本年六月かに全社を辭して十勝に「とかち新聞」の獨力經營を始めた。

今の主筆遠藤決水君は昨年の晩春からだと思ふ、「北海タイムス」からの決水君で入社當時「木材工藝地としての釧路」といふ二段拔きの大說を七八回書いた。「ドンナ……」杯の二段拔も始めた。「人語式」に何でも遣る。青森大火の慈善文士演藝會の時編輯局裡の服裝其儘で高利貸に扮て此處でも「人語式」を振り廻した。一等の出來といふのはお世辭の評ではなかつたらしい。「私シ遠藤ですッ」といふのは電話癖である。全社には「迷生式」と曰らいふ大杉迷生君が居る。「有緣無

緣」脚色で元の寶來座に大入のヤンヤをやつた。演藝何でも御座れ。時に二幕散らしの一頁記事の辛辣なる會の軍人は型に囚はれた。李兵衛としての「釧路ある記」には「迷生式」に「椋十式」の衣を着せた。

◎「釧路日報」之は昨夏秋元松堂君が社長となつてからの題號である。西島敗袴君が四十年の「北東時報」から四十一年元旦より「北東新報」として四六判日刊となし、四十二年春「釧路メール」と更め苦心經營して居たが敗袴君は今春東京に去つた。今は茂又仙骨君の主筆で、初號の二段抜きを時々遣るのと「時事俳評」の四號活字は到底茂又君一流のものである。二段抜きと松づくしの踊りとは又面目を表はして居る。日報は由來日報流の筆法と記者を有す。

◎「釧路毎週」古川萍水君といふ健筆家の獨舞臺。嘗て佐藤南畝君の實業新報より引續いだもので「萍水式」といはぬ「古川君式」といつてる。小形の週刊八頁。口は吃々たる萍水君、だより談叢的のもの、文學方面

とは一頭地を抜いてゐる。「浮世草」風の記事は毎週となつて以來あまり見ねぬ。

◎「釧路商業新報」商光として山縣匠河君と珍らしく佛教文藝商況を書いてたが、今は坂本溪泉君の一人持ちにて商況報三八の日發刊。其東京期米電報は今の處他新聞にはない所のものである。

◎釧路記者倶樂部の事、尚新聞に關する事書く筈なりしも之は畧する事にした。

○海霧（厚岸紀行の一節）

●電話線の雫の音に目が覺めた。今朝五時（五月廿八日）二重障子を排して窓の硝子越しに見ると、目の前の濃霧を横ぎる百餘條の電話線は雫を横に乏しては滿らして、砂埃の上に微かな音を立てゐる。決して目の覺める樣な音ではないが睡眠中に古い記臆を呼び起して覺めたに違ひない。濃霧があるのに頭は何だか愉快である。

●九時過船の出るのを確めて返つて來て突然厚岸へ行くと言つたら御飯を喰べいと言はれたが、港内の船が見え透き出したのを見て來たせいか何だか急がれるので外套一つ持つて運動靴で飛び出した。

●三年前函館から此の港へ着いたのも恰度十時頃であつた。今反對に三年目で船に乘る。本船へ移つて甲板から見る町は早や濃霧が晴れて薄く日光をさへ受けて春の色が見える大分販やかである。崖の上の浦見町は米町の所で凹み嚴島神社の方へ最も高くなつて燈臺の突つ立つ下は斷崖の知人それから沖に出てゐる磯の彼方は鵬程萬里の太平洋となる。沖にはまだ所々海霧が見える。村瀬十勝丸船長を訪ふた。荷揚中でまだ船は出ない。

●「函館以來の海霧で襟裳岬を見たいと思つたのでしたがとう〳〵見ず、今朝入港の時は半哩の先が見えなかつたです。」「左樣最も深い時は船首から船尾が見ねませんね」を初めに、二月頃の流氷は困る夫れから此の海霧と來て東海岸の航海は秋を除く外あまり樂な方ではないと言ひ乍ら何にこんなものと思つてる樣な顏色もあつた。談は進んで築港に及んだ。漸と十二時過ぎ船は錨を抜いて厚岸に向ふ。

○築港（前項の續き）

●知人岬の燈臺を中心に約半浬弱の半經を以つて半回航春採沖を東に進む。聊か余事ではあるが

●釧路港修築に就いて述べて遣く。明治十九年北海道廳を置かれてから港灣が調査された。港内約四万坪工費六十八萬五千圓餘の調査は出來たが厚岸も修築せねばならぬと言ひ出して兩とも決しない。三十二年再び廣井工學博士は（道廳技師）港内三十五萬餘坪工費三

百四十三万六千餘圓の設計は當時の園田長官の十年計畫が第十三議會にて確定當時であつたから、八個年計畫で四十三年には出來上る豫定であつた。所が十年計畫の事業には故障があるので園田安賢長官は北海道事業計畫を立案して特別財源たる森林經營で釧路港の修築を遣らうとし、前の設計を第二十三議會に提出し衆議院は可決したが貴族院で跳ねられた。

○跳ねられた理由は森林經營、港灣修築の計畫の調査が不完全だといふに在つた。河島醇長官は關屋忠正氏（道廳技師）主任で廣井博士案に阿寒川港外放流導水堤の替りに河口浚渫と更め四百七十五萬九千五百四十一圓の工費、百三十餘萬圓を增加した此案は本道官民の大熱誠で二十五議會を無事に通過したので昨四十二年の春王三月此地は尺と積んだ雪の上に大提灯行列の祝賀を遣つた。

○村瀨十勝丸船長曰く「錨掻は惡くないのですが知人

（前篇）　三六

埼燈臺正西の知人礁は五鏈ありますから濃霧の時は晴天光達距離十四浬の燈臺も見ゑぬのみか現に船底が擱岸して居てさへ船が何處にあるのだか分らぬ時がある位西南の最多風は最も困難です」之は即ち缺點の問に對する談である。

○修築の目的は此の缺點を全藏補ひ盡す譯には行かぬが、十勝釧路の千百方里北見南半を加へて明治五十年には此の人口四十萬以上に達する計算で、現今三百五十萬圓の產物は三千萬圓以上に、年五十萬噸の船は三百萬噸の入港があらうといふ盛大なものである。

○釧路より三時間の航程船首には火黑島、左舷には仙鳳趾岬、船は左舷に廻りて厚岸港に入る。

○歩いて觀た厚岸（前文の續き）

○海圖を指して船長曰く、「此通り港口四浬の內仙鳳趾の礁脈と愛甲岬の礁脈有可航水道は一浬と四分の一しかありません」大黑島の燈臺を後に見乍ら這入つてこの愛甲埼との一直線ですね之を來て盤螺山を少し內に廻つて燈臺が隱れると錨地です」左舷では水夫がレッドを振つて三尋半と云つてる。

船は止つた。十勝丸の寫眞を貰ふ約束をして船長と分れた。釧路よりは近く投錨して居る。鮮も少く賃金も安い。

○小さな棧橋には鮮から上る人よりは多くの人がゐるそれが皆我等上陸者の顏を見てゐる。柾葺の家屋は僕の眉庇と相高低してるからさう驚く程の立派な町でないが、後方を廻る山、路の幅の跡今朝歩いた町よりは落ち着いた樣な奧床しい町だと灣月町の入口で思つた。店の人の視線は皆僕等の方に向いてる、一人サッサと離れて歩いて見るが矢張注視されて居る。若竹町と云ふ町があるが竹はなくて櫻が咲いてる。色は紅い、何せ櫻町と云はぬのであらうと思ひながら店の人に見られ乍ら小さな板橋を渡る。釧路の眞砂町よりは砂礫が多い。松葉町とあるが眞砂町と云へば灣月町と對照が好い、灣月町よりも洲崎町と云ひたい。道路は坦々砥の如く運動靴では何とも音がせぬ、閑靜な町を閑靜に歩く譯だ。併し朝食以來飯を喰はずであるから何かを要求してるが、珍らしさ心地よさ見られながら見ながら歩いて居るので要求は頻りに釧路町名の移轉に飛んで厚岸と云ふ町が何處かに有りさうだ。

○桑雨君の所で暫く休んで梅香町を歩き出すと烟煖たる櫻花に出喰はす、愈々以て怪しからん。梅なくて何の巳が櫻哉と云ひたい。目前の櫻が見ゑなかつたのかそれとも梅は枯れて後で櫻を植ゑたのか。田圃に出た、蛙が鳴いてる。櫻町が陳腐なら蛙町としたら妙であらうと思ふてると、彼處が遊廓だ行つて御覽と云はれて、御覽するのがいやになつた。是れだけ見られてゐるのに風俗壞亂女までに見られて堪るものか知らぬ間にな

（前篇）　三七

ら見られてもやらうが。

○見られに來たのぢやない見に來たのぢやと二時間もぶら〳〵ところ〴〵を歩いてゐると平尾言外君に邂逅した。「案内」を出版せうと思ふて遣つて來た材料を頼むと云つて立話をしてゐると、宿は何處だと訊かれるから宿は厚岸だと云ふと話は自然に他に移つて國泰寺の事となつて別れた。

○享和二年幕府鎌倉建長寺住職文翁に命じ臨濟派の一寺建立文化元年五月景逕山國泰寺鎌倉五山派の僧侶を以て住職となし有球の善光寺、樑似等の湖院と共に東蝦夷地三寺の一にして今猶盤螺山に在り地方の尊信する所と北海道拓殖報文にあるが橘梧堂住職は厚岸の人と大談判を始めると云つてた。

○五味旅館に泊つて名物の牡蠣と白魚の吸物を食つたら岡山か宮島かへ行つた樣な氣になつた。今朝雪の音に目が覺めた原因はと考へ出して見るに、今日は櫻を見た蛙の聲を聞いた牡蠣と白魚を喰つた。備前の岡山で去る年の事朝櫻を見やうと眠いやつを頻りと愚されて後樂園に出懸て行く途中或る所で塀の內から出てゐる櫻の雫がポチリ〳〵と落ちてる音を非常に面白く深く印象された事がある今日と一寸似て居ると思つた。

○室は三尺の椽を隔て、太平洋の水に臨んで居る。太平洋と云つた處で一浬餘を灣入してゐるから庭池の樣に靜かで激勵よりも沈思をそゝる。但し僕は此場合沈思から激怒を連想する。

此渚の柾葺の家に寢て居ては煽動られてる樣で面白くない。安藝の宮島は此論で行けば單なる艶麗であるが建築美と內海の萃を拔き四時の變化で持つてゐる。

松島には瑞巖寺があるさうだが行つて見たくて堪らん兎に角伊達政宗が建てたもので今でも確かだと云ふのだから猶眼龍風の建築に違ひない。釧路へ來て東北人に松島の話を訊くと瑞巖寺の話をするものがない。察するに猶眼龍は大きな廣告札も何も立てゝゐないのであらう。厚岸も見た所煙筒らしいものは眞龍村の一本だ。人の顏ばかり珍らしさうに見たつて仕方がないや。

○つら〳〵考ふるに厚岸は釧路町よりも古いのに戶數や人口は半分に足ぬ。それで國稅や地方稅は餘程多く收めてゐる所は釧路が鐵ならば厚岸は金だ。大分寢て居て法螺を書いたが空想でも惡口でもない。

○眞龍村へ行くのに何とか云ふ渡船がある。何と云ふ名稱があるか分らぬ。困るぢやないか、若竹町梅香町松葉町なんて碌でもない名を附けて風流がつてゐたつてこの風光明媚の渡津に名がないなんて似合はぬ。好い加減の名を附くるよりも無いのが好いかも知れんが下手の紀行を書くにも一寸困る。

○約三丁の此の渡しを越して眞龍村の北海挽材合資會社を見る。裏は鹹湖に尾幌森林の材木が累々、表は厚岸灣に岸近く迄汽船が着くさうで結構此上ない工場だ。未だ竪鋸が無いが近いうちに据るのぢやさうな。鋸屑が竈の中へ獨りで這入つて行く仕掛は中々旨く出來てゐる。燃料は之で餘るのぢやさうな。機械は百餘馬力未だ餘力がある譯だ。

○眞龍村は將來根釧鐵道の開通と共に或は厚岸よりも便利になるかも知れん。對岸の厚岸たるもの憂然たる可けんやだ。

○例の渡船に戻るが、此處からの眺望は、鹹湖を繞る山、厚岸町からかけて盤螺山岬の彼方に仙鳳趾を望む所は紀行文範流に云ふと一幅の畫圖だなんて型に嵌められる景である。辨天島の牡蠣殼層は僕の云ふ東洋の珍であるが島其者は何等の奇も美もない。●●奔渡村の津川君は、此處へ松を植ゑるに土壤共、言はゝ大きな土の鉢で松を据ゑねばならぬと云ふ厄介ものである。

○即ち一大公園計畫なのだ。此の牡蠣は雌雄別で吳廣島の牡蠣とは異つてるのだと云ふが成程長い殼は一尺

以上もあつて形狀から異つてる。味は廣島の方が美である。明治十五年乾牡蠣二十六万斤價格一萬圓（從業員二百五十人）十七年には二百萬斤以上十一萬圓十九年が最高二十八萬斤價格十五萬八千圓（從業員四百三十人）の海外輸出品を出して居る次第に價格は昇つて來る實れると云ふので四百八十人と從業者は倍加して廿七八年頃まで毎年十四五萬圓を上げてゐる。周回四五里の湖だから高は知れてる。廿五六年から減る一方四十年には十五年の十分一價格まで下つて二千五百斤が千三百圓。夫れでも從業人員は有繋に減らぬ。まだ三百〇と五人、所得は二十分一になつてゐる。今日では六七百圓、人工蕃殖は有望ではあるさうなが、斯う人工減殖を遣つたのだもの堪つたものでない。

○現今では大に注意をしてるさうだが催り頼む。もう一つの原因は木材流失と共に泥砂の沈澱であると云ふが、是は誠に御尤でそんによそこらの河口も大變になつて實業倶樂部が騒いでる。

○冬期は此邊場氷結して人馬來往には平常の船人が案内をするのだとは危險な様な便利な様な不便な渡し場だて。金の厚岸は未だ眠つては居ない、眞に蚊龍天に沖する様な三町の一大橋を計畫してると聞いては今迄の胸の瘤がピッタリ癒つた様な氣もする。三錢の渡賃は安いものだが待合せの時間は高價なものだ。牡蠣売を踏んで蛸の干してゐる家の前を奔渡村に出る。

○鹹湖に沿ふた奔渡村は、何の家も何の家も肥料製造業と役場の焙印のある札の懸つて居ない家は無い。奔渡村水産組合長の津川和吉君の家を訪問したら、今度來られる迄には大建築を遣つて置きますと云つてた湖の將來は眞實大建築を遣らねばならぬと云ふ意味であらう。君の公園計畫は大賛成だ。

○小丘を越して厚岸に下ると町の裏手である。棹舟水下成太郎君の云つた子規の里とは此處で、學校の上手は藤の花が一尺あまり垂れてゐた。

○宮城野勇太郎君の家も柾葺ではない、尺の大黒柱は古く光つて居た。二階の客室で竹石翁伯が絹に筆を走らして居たが、主人公は不在であつた。

○根室銀行厚岸支店を訪ふ、青山彌三郎君は云ふ、厚岸には倉庫がありませんから貸出には困難です、今は三十萬圓位の預金ですが九月には八十萬圓以上になる事があります。金利ですか今の處或は釧路より二三厘高い事になつてるですが將來鐵道開通の上に現金輸送の便を得て釣合はとれて行ます。高利貸の金利ですかと、今迄何でも答へられた青山君笑ひ出して話しが進まぬ。

○三十二年拓殖報文には七分、八分に達すとあるを後で見た。是は獨り厚岸のみならずであらう。青山君又曰く、四十年の大漁と三井の木材輸出等とは厚岸の經濟界を一變せしめたと。即ち、從來厚岸は函館の勢力の小高みに、京都なぞで見る風の門がある、釧路厚岸には珍らしい庭園が築かれ、家は例の柾葺の二階屋がある。玄關に立つと。若い奥様が純東京辨で、極靜かな言葉でお上り遊ばせと案内される。兩三年來虎屋で偶つた人、今日の様子、書棚、チルソン辭典、華山東湖の額、今迄烟に捲かれる様であつたのが、厚岸の邊で斯様遣られると君の勢力に對する疑念は晴れる。藥瓶を置いてゐるが仕事は遣る、氣焰も吐く。新聞で見る事務官の當ツ摺りは讀めた。

○七八日も歩いたが途中でよく出合つたのは上田衛兵衛君（嘉永元年生）と云ふ、鍬、鎌たる江洲人今は厚岸の元老である。温厚で額の煌々と輝いでゐる中野米藏君（嘉永六年生）は新築の香高き土藏瓦葺磨白壁の店未だ殘つてゐる秋田辨で昔氣質に番頭さんをやつてゐられる處は輪島屋旅館の二階で曾つて福富君に似て居ると思つた中野さんに獨得の光彩を放つ。店の盆栽に

範圍で資金の輸入も多大であつたが此の五六年來に從ひ來の負債を拂つて、產地直輸入が多くなり、函館からは僅かに其繰り合せであると漁期の終り頃からは郵便局には代金引換、小包郵便で事務を取る處もなくなるとは實業家の一顧に値する。電話は目下（六月）四十餘名の豫定にて、來る十一月迄には開通する。同時に根室、釧路間の市外も出來る筈。

○中元寺豐若外三四名は訪ふて不會。慶應出の山崎常二郎君からは時事問題の二三を聞いた。波止場と云ふのか棧橋場と云ふのか何んでもあの附近では黑い髯の丹前の旦那に睨まれた。小便をする場所を見出し得ないには閉口した、折柄出食はしたのは前田支廳長と徵兵官の一行。病院の看護婦が銀杏返しであつたのは妙に思つた。教會堂は二等株だと說明された。凝實珠の出來損ひの樣な門柱が數ヶ所あつたが何と云ふ形であらう。

○新聞はタイムス、小樽、釧路のものよりも函每が歡迎されて居る。蠻妓の惡口は大に聞かされたが所謂漁時蠻妓の顏は見なかつた。小船の腹が光明丹か何かで赤く塗つてあつたのは何の眞似であらう。釧路に馬車が多い如に厚岸には小船が多い。船と云へば、十勝丸は僕の上陸した翌朝根室の七里手前貝売島で暗礁に乘り上げたと聞いて驚いた。大膽だと仲仕達が云つてたが海霧には叶はないか氣の毒な事だ。

○再びつら〳〵按ずるに、今より三百五十四年前（寬永二十年）此處に和蘭船の漂着した事は「松前廣記」にある。長崎屋傳兵衛の事、享保年間南部の辻文左衛門の江戸に木材を販出せる事、筑前屋作右衛門が酒田廻米船數十艘云々、近藤重藏のウス以東第一の景勝と、厚岸の廣記は多い。此厚岸が何故釧路に及ばぬか、根室港と一寸對照して聊か僕の私見を述べて見やう。根室望遠鏡觀察も亦決して無用であるまい。

○根室望遠鏡

◎此項は、十勝丸の坐礁と、二三日先き（六月一日）貿易港として開かれたのと二ッが主である。

◎根室の名物は海霧と何とかである。と聞いた。納沙布半島を廻らんとした十勝丸は、海霧の爲に敢なき最後を遂げた。現今の二十世紀の文明は此名物に對して全く無價値の樣である。北海道東岸の海霧、黃海の海霧、地中海の海霧、アラスカの海霧、其他到る處の海霧、一に濃霧は、二十世紀の文明からは超然たるものである。唯僅り比較的濃霧に超然たり得るものは、無線電信と、水中信號器と、倫敦の繁盛と位のものであらう。根室は、落石無線局に近いが、之を利用する時機は未だ遠い。

◎落石無線局はあつたが、十勝丸には無線局もなく、濃霧に對する何の防備も無かつた。唯救援に行つた武藏艦の無線電信は預つて救助に効あつたらしい。今後無線電信と水中信號器の利用は聊か海霧と航海との安全を期圖し得るか。今後九十年の二十世紀も聊か望はありさうだ。現在に於て「落石を距る東千三百浬の海上を航行中なり、船中無事何日横濱入港の豫定」なんて寐言の樣な通信を、東京電報として載せた新聞が二日も後でなければ見られぬ厚岸釧路の狀態は如何にすべきか。

◎六十萬圓の蟹鑵詰は根室開港の主因となつて居る事は內田管船局長の談話として今日來た新聞に見ゐる。濃霧の中に世界の何分の一の富を集めた倫敦は、最堅なる英國氣質と其商工業と地位の利用に由つて其價値を增進せしめたものである。眼らんとして蟹鑵詰の爲に目を開けた根室港の年輸出額は三百四十萬圓で霧多布港に二十倍し厚岸に十倍し釧路と相伯仲して居る。根室の創始年代は分らぬが、石狩釧路厚岸霧多布の

場所を働いた飛彈屋久兵衛も明和安永中に漁場請負を遣つて居たが、寛政元年國後の亂に恐縮を申付られて以後の百年は材木屋七郎右衛門、高田屋嘉兵衛、天保三年藤野善兵衛、仝十年山田文左衛門を經て白鳥宇兵衛が二年間其後藤野善兵衛が引續いだのは嘉永二年。根室と〇路は矢張り因緣は絶ねぬ。發達の差こそあれ經濟關係は共通である、濃霧に超然たり得るものは倫敦斗りぢや無からう。

〇おぼろ道すぢ　（厚岸紀行續き）

〇十勝丸は納沙布半島の海務案山子、生還覺束ない。急きはせぬが、安閑としてるも面白くない。昔の屯田兵村今の太田農村も見たいが、御免を蒙つて電信線の無い尾幌殖民道路を指していざ出發となると、山本君が「一寸之を」と止めた。六月六日午前第九時。

〇六日間泊つてさう思つたのだが、山本君中々の策士だ。香の好い、棋楠樹の柱懸を出して、サア何か紀念の句を書けと云ふ。宗匠よろしくで沈吟稍久之するが中々出ない。ヤット「時不知漁る島よ殘花……」と遣つたが旨くない。裏へ「群來模樣網おろす洲の明け易き」とぬたくつたが之も嘘だ。歸りながら「海霧漁れと時不知寄る島や蝦夷櫻」と直したが物足らぬ。北海道のお女房さん達が拾ひたがる蛸石が海霧雨に濡れて光つてゐる海岸を五六分間歩くと三商七漁の眞龍村は通り抜けた。

〇段々と海に迫つた、知らぬ山路の一人歩き、原地名シンリウチンコロ（高丘地の意）は成程と考へる。雨か海霧か厚岸灣は雲霧漂渺。昔からの目標盤螺山埼は見ねぬ。苫多村の沖は、小鯡が湧いたとかで地曳網が忙がしさうだ。チエツプボウジ「魚湧き返る」ださうなが、仙鳳趾はまだ四里以上ある。

〇安政五年幕府の喜多省吾と云ふ御役人樣が、伊達家屯戍兵に作らしたと云ふ苫多街道は、僕には不可解道で進路に迷ふ。加之に雨脚漸く繁く帽子からは雨垂、インバネスは重く、運動靴は赤土が粘着いて歩けない十勝丸の涙雨と晒洛ても居られず、山本君の好意の傘を持つて來れば可かつたにとは思ふたが、若し海の方から見たならばこの辷る態は雨案山子の綱渡りと云はれるかも知れん。

〇磯の奥と引換に樹の樹脂が匂ふ。黑い根ッコが点々と開墾地にある。軒先きが頸の下になる半草半柾葺の農夫小舍がある。一本喫ふ考で潛り込むと煙り臭い、四枚硝子の窓一枚といふ未開地處分法の形式に作つた小舍だ。庭には雞詰の空雞が二つ三つ轉つてる。雨休と見ねて奥のお爺さん中々起きない。起たすのもお氣の毒と、尾幌への道を訊いて直ぐ出る。横に飛ぶ釧路の雨は今日に限つて垂直に降る。

〇眞龍村から三時間許り歩いたイヤ踊つた僕は、便內の家並を見て急ぎ足、もう一時半だもの。村の手前に新しく堀割つた大溝がある。例の二萬圓の尾幌分水工事。國費のお蔭か便內の家々は賑かな樣だ。

〇六間餘の殖民道路に出たが、泥路は益々深く、空腹を感ずる、厭な濕氣が肌に透る。柱懸を臆面もなくぬたくつた鐵子聊か逡巡の躰態。辷るは辷るは、小奇麗な尾幌小學校だと傍見をすれば、將に犬走から下水に眞ッ倒と云ふ所。ゑんやらやつと郵便函を見付けた。森林看守駐在所もあつた。

〇三三、五五、三十四軒は無い樣だが「尾幌市街地……旅人宿山田……」と郵便函の向ひの家。市街地とは滅多に受取れぬが、鐵子も旅人たる資格は充分あるつもりだ殊に此處を市街地と謂ふ以上は、鐵子は正に旅人樣と威張る資格があらう。旅人樣か何か知らぬが、腹は空く、前程は九里、帽子は一貫目、靴は五貫目、

弱つた風は見せぬが宿の御亭主は泊れと云ふ。仕合せなく終りまで聞いた。聽衆無慮十二人の聽き振りの方が餘程面白かつた。

な事に熊が出る山賊が出ると云つて呉れないで助かつた。熊や山賊が出ますからと云はれると空威張にも宮本武藏の眞似がしたかつたかも知れん。外套は裏まで濡れて居る。飯を食つたら三時半、口實も何もない泊らざるを得なくなつた。

○斯樣なると前途よりも後方が氣懸りだ。「明け易し」「蝦夷櫻」の句が氣に懸る、矢張り人間は誇りが多い。さアに市街地が氣になる、句を直したいと思つてると、御亭主が這入つて來た。「このせんべいは私が燒きます、かりんとうも燒きます、豆腐も拵へます」よく世話も燒くやうだ。之も誇りだ。

○雪所の方で、「昨日昆布森のお醫者さんが鐵砲腹をしたさうだ」と話してゐる。好い電報材料だと思ふたが、太田村局八里、釧路へ九里今日の間に合ふものぢやない。でも市街地の人は違つたものだ。

○時「に浪花節はお好きで」と云はれて「時にお好き」になつて見る「お邪魔でもお宅を」貸すと、お向へお隣りの中婆さん中爺さん、若い衆、小供衆が來て「だん〳〵だアんと」と始まつた。「時にお嬢び」でも詮方

○仙鳳趾から來たこの「新俥人」は炉の榾に跨つて湯豆腐で酒を呑んでゐる。山陽が耶馬溪で寵窓蕭然と云つたのは此の圖だなと思ひながら僕は榾の火で乾た靴足袋を穿く。漁は少ないさうだ。

○雨は落ちも飛びもしないが曇天の道路は愈々悪い。尚二萬圓の國費を仰がねば分水工事の價値はないやうだ。一里行けばよくなりますと亭主が三四遍言つて呉れたが、成程兩側の楢の疎林、腐植質壌土の道路が一里斗りで、枕木、根角の伐り出してある森林帶に入つた。殖民道路は森林のトンネルを行く。少し高くなつた樣だが百米突の高さはない。樹は密に且大。七分の針葉樹林である。

○天然更新を遂つてゐる林がある。時々薄日が射して、風は全く死んで林中寂々、立木は油煮の如く動かない。間に一寸廣い所があつて、一二軒農家がある。此處も矢張り馬鈴薯が主で澱粉の原料らしい。昨夜の浪花節でないが「だん〳〵だん」と高くなつて來る道は、峯傳ひに郡界に近づく。

○辻交左衛門が此の森林を伐つて江戸に運び、帆檣に賣つて利を占めたと云ふが、行き行きて峯に峯に行く兩側盡く是帆檣で、眺望は遮ぎられて居る。幹小なる所は身を入るる處もない。最高處が郡界で、遙々と天を廣せんとする根の間に、散り殘る櫻があつた。此の前後四里許人家一もなく水を飲む谷もなく、辨當昏りの生鷄卵は何よりの命であつた。釧路郡に降る道は勾配が急である。最高き處地形線に據ると三百米の上はない。荷馬車が二臺登つて行つた。「來滿土橋」を渡つて一里漸く人家あり、運炭線路と交錯して別保牧場より別保橋に尾幌殖民道路は終る。

○別保から茂尻矢まで

▽馬糞の天寧街道　▽釧路川の利用　▽活動の一端
▽茂尻矢今昔　▽厘毛問題　▽厚岸紀行終る

○別保と茂尻矢は炭山で生活してゐる。尾幌別保から出て電信線に出合ひ、釧路河と少しの間隔を取つて町に入る十間の大通は、馬糞の臭で鼻持がならぬ。別保川

口で筏にしたのが町に流れ、石炭船が舳艫相接して下る。秋になると鮭網を曳く。天寧の富士製紙工場は、百余尺の煉瓦煙筒がボンヤリとしてゐる。

○馬糞に敬意を表してゐると、徴兵官一行中の前田支廳長馬を飛ばして歸つて來た。ヤアと云つてると後れて隨行の二三騎も來る。雲裡太には馬が五六放牧されてゐる。薪が澤山積んである。

○阿寒太には山と積んだ木材の中から製材、發電所の煙筒が白い木肩の煙を揚げて、活動の一端が眼に入つた。彼處には、小川君と云ふ大きな躰格の主任が居る。「碓り遣らんと不可よ」「ホー、さうおやらう」なんて云つてるのかと思ひながら茂尻矢に着いた。草野製軸所と云ふのか、大日本燐寸軸木會社と云ふのか此處にもエンジンワークがある。

○厚岸では大分顔見せをして來たが、茂尻矢では都會の工場町臭い所があつて、急がしさうだ。滿三年前初めて見た茂尻矢とは大變化をして、字茂尻矢町になつた。有名（？）な御供山はアイヌ全盛當時の勢力の殘骸で、此茂尻矢は釧路新聞の決水君は、「豆腐の茂尻矢」と示して居る。釧路發展の勢力を云つたが、工場と豆腐はよく見る圖で、豆腐の茂尻矢益々御隆盛の段大賀奉る。

○岐路に伸がある。正月の鳥追然たる女が三味を鳴らして歩く。其後を握飯を持つた小供が三四人蹤いてゐる。伸は厚岸の四日谷君で、厚岸から來る人を待ち合して居たのらしい。四日谷君と共に製材造船會社擇外の角材の山を見て歩きながら好い栓角だと賞める、○に坂の刻印があつた。會社の事務所を訪ふて後藤君の苦心談が始まつた。未だストーヴが焚いてある。工場は午后六時が晝夜の交代時で丁度休んでゐる。四日谷君は熱心に後藤君と鋸鋸の問答。釧路厚岸の製材專務同志だから綿密な探算話が多い。要領は器械の靈動と歩調の問題、エンジンオイル問題、販賣問題、皮板屑板問題、荷造運搬問題、製品置場問題、鋸屑利用問題釜掃除問題と是悉く厘毛の計算問題で、三百五十年前の辻文右衛門の帆柱輸出以來之丈けの發達があるかと感心した。

○釧路マップ

『マップとは何アんだ』!?『案内だから町の地圖を書いて御案内します』

○地球上の陸や水やを、線と点とで表はしたものを地圖と云ひ、海圖と云ふ。と同じく、或意味において此書全体がマップである。鳥瞰圖、側面三觀、店頭百觀、釧路新聞に連載した釧路の流行や、臭感、觸覺、釧路氣質等の原稿は實に二百余頁となつたので、編入を見合はした。否マップに縮圖した。無論美人も出ます、醜男も出ます。藝妓の噂の怪しからぬのも、怪しからぬのも皆マップです。

○釧路の大輪廓は『殖民時代』である。鐵道全通前に見たのと、今とは全然別天地の感がある。新開地といふ輪廓もあるが、矢張りコロニーである。年々模倣に模倣を重ねて、店頭の裝飾抔も、北海東岸の東京式である。滊瀾の修築成れば、將來は橫濱といふ格だが、今は何も彼も開拓殖民、教育宗教も、趣味嗜好も移植時代だ。商業工業は勿論農業は眞のコロニアルファームで、漁業は二百年以來のコロニゼーションの最要素であつた。若し夫れ大隈伯の戲語を藉りて、美人は都市發達の要素なりとすれば愈にコロニーゲーシャであらう之もマップ、釧路の文である。

○昔時、希臘の民は地球から飛び出て、橿實を食し、野獸の皮を被て……とバーレーがいつてる、アイヌは、まさか地球から飛び出たのではあるまいが、穴居の跡

はある。天産の食物衣服であたらしい。金色の羊毛を探つたといふ様な史話は昔に、永久的の橋梁道路、輪奐の美を極めた維馬の様な文明も、年々加はり、新しくされてゐる。高低山凸、下駄で歩けない、車の廻らぬ道路は釧路の道ではない。小樽の眞似をして、より以上に成巧したものは道路であるが、二万一千人誰一人賞めない所を見るとどうしても近々に垣々たる道路が築かれるに違いない。

○釧路は土地から發達せずして、室中から發達しつゝある様に斗り見ゑては居るが、實際はさうでもない様だ。七十哩帶廣に約三百哩小樽に、四百五十七哩函館に通ずる鐵道と、根室厚岸に、阿寒鐵道に、築港にと決して地上は疎忽にして居らぬ。唯電話の如き四十一年一月開通當時は二百内外であつたものが、將に四百に倍加し、全町八分一に達せんとするは殆んど全國に其比を見ずといつてよからう。是は偖に釧路の色であるが「色」の中に書くのを忘れて、「味」にして置いた。是が是も矢張りコロニーテレフオンで、發展の鋒芒を通信に表はしてゐるから、「電話の釧路」といひたい位である。

○夜の釧路は、最近に到つて「如何なる輪奐の美があるかと、驚かされる。厚岸、帶廣と違つて、電燈の爲に大に夜景を美化し、活動を想像せしめる事は電話と共に一異彩である。入船町の郵便局は釧路の最高の棟で、又一大不夜城を爲してゐる。此處から眞砂町に出る小路は狹いが、丸天店の建築で聊か美觀を保つ。眞砂町を西に見渡すと、人の往來も多いが電柱が肩摩轂擊を逞してゐる。尾根看板の甚は俗惡極まるが、夜の眞砂町は電燈に美化される。警鐘梯子のある根室銀行横の廣い火防線の横丁、（場所の指示が困難だが）此横丁と眞砂町の四辻は現今釧路の目拔場所である。

○警鐘梯子の下に立つて觀てゐると、丸秀の側に水汲女の忙がしさ、丹前掛のお客さん、小間物屋に入る婦人小兒、帶鉾を買ふ人。所謂新かまどの夫婦連か、山文の店頭に世帶道具の撰擇が始まる。隆盛堂といふチツポケな店に素見をしてると婦人界の妻君、實業日本茶文房具店、又一ッ文房具店、郵便函に寄つて又々文具教科書店。四ッ角の又十呉服店は眞砂町での建築である。角の小間物本屋の横丁には又水汲み女。

○又〇の表には錨があつて、隣が電燈屋、夜の電燈は中々明いとは少々恐れ入るお手前。其隣の二十銀行だの、お向の明治商會と來るとコロニークシロでない様だが、小路の水汲女は矢張り釧路だ。之れから向合せの小借と雜誌の賣れ行き、お向は〇上といふハイカラの洋食品店。洋服店、呉服店が一軒置きに二ッ並ぶ。お隣は藥とダイナマイト煙火店、村上支店と其支店の

書籍と雜誌、文具學校用品一式

隆盛堂書房は、御入用品にして品切の節は迅速御取寄せ致し升
隆盛堂書房は、書籍雜誌の外何品でも御入用品御取次致し升
隆盛堂書房は、各都市のデパートメントアーの代理店です
隆盛堂書房は、各都市の大商店と何れも特約販賣の契約があり升
隆盛堂書房は、御取次品は至極御便利に且つ郵稅等皆負擔致し升

隆盛堂書房は釧路眞砂町中央チツポケナ商店印は小

北海道釧路眞砂町十八番地
㊤西洋酒食料品商
安藤常藏
デンワ六七番

南三軒は相談をしたのかどうだか時計屋、靴屋、洋服店と一枚硝子の表戸。素麺屋と續いて呉服店、小間物店、菓子、呉服店と少々相撚比して、崖の方は前田本店印刻、果物滝圀農と聊かお商賣柄特色がハッキリ出なくて、オーセアニック、レスタラントとは飛び抜けた名の洋食屋だ。

◎小間物類　▽遠近多少に拘はら△
◎れもちや　▽ず荷造り小包にて△
◎其他袋物　▽迅速御届可申候△

釧路眞砂町中央
㊟豊田小間物店

高窓の中央に三万圓の足利時代式だといふ建築で下町に背を向けてゐる。前の第一學校は周圍に樹を植えれば小公園として眺望も好い。春採道を米町に出る途中は燐寸箱式建築が無暗に眼を乱して横はつて居るが第三學校は大きく、中西君の宅は瓦だ。米町は寺と遊廓が大威張り兩半面の人生觀の對照。軌道に沿ふて、大黒座、一寸上つて啞雲、嚴島神社、下に崖を降れば知人の字。返る漁船、襟裳夕照、阿寒暮雪と釧路の景勝は此處に集るといつてもよい。海霧に閃めく燈臺の十五秒回轉光も一奇觀也。

◎釧路病院から眞砂町に出ると興業會社、銀行、武富私道といふ振つた名の小路仮に小休坂と僕が命名する。五年前から、玉突臺のある旅亭喜望樓。向ひの水産、漁業組合、輪島屋旅館、小休坂を眞砂町に戻ると山ヲ、山ノ、星一、三日月、三日月は盛談だが米穀雑貨、呉服店、安田鐵業、豊島郵船、川一、前田の前あたりは眞泥町と謂はねばなるまい。丸二、丸三呉服店丸四丸五當りも眞泥町で、山正紙店の前は山岳丘陵起伏してゐる。夜は電燈も少いので眞暗町だ。町役場に曲る處へ來ると呉服店が二軒あるから明るく、洋燈屋、時計屋、提灯屋だから大に明いとは謂はれまい町が廣いのだ。

◎町役場前から海岸に出て、蘇鉄流の調でいへば「海上より來る清風を滿襟に快享して雌阿寒山の雄姿を望む」といふ所。洲崎町に入ると、金煙管の水口君の建築が目に付く。玉屋がある、消防番屋、寄席、四辻の空地、玉屋、鐵工所。輪島のものとは如何なるものか知らん。笠井病院と四角の火防線、向ひ角の根室銀行日報社の向ひは郵便局丈けで空地が廣い。河に入る帆、河向の汽車も見ゑる。

◎不鮮明なる寫眞版と同じく、碌でもない西半部のマップは以上だが入舟町一名埋立河岸に出ると、漁船から雑魚を放げてゐる。石炭の積込み、枕木角材の人夫も澤山、小蒸汽も三四隻ある艀も多く、煉瓦倉庫も彼處此處に四五棟、三十三年以來の開港地たるとは一寸肯かれる。半日も居やうものなら仲仕の俗謡も随分面黒く聞ける。幣舞橋上の人馬來往は此處から大阪炭山貯炭場の邊までが最もよく見ゑ、最も喧しい。阪炭事務所入〆新築の隣からは幣舞町のあらが見ゑる。

◎赤煉瓦の釧路新聞社の四ッ角は、幣舞、入舟、眞砂町の三接点。新築中の吉村病院の前を一寸出れば眞砂町と幣舞の境の大通り四辻、將來は目抜となる場所だ

が今はまださうでもない。角大旅館の前に井戸がある。幣舞の非凡抔は思もよらぬ。唯停車場は西幣舞の生命山田醫院の廣告立札、鳥澤病院の電柱廣告、吉村醫院といふ醫者さんのパノラマだ。少し上つた所に縦に赤白塗分の棒杭、石川測量事務所たア唱歌君の浮世趣味が出てゐる。

○支廳坂の登りつめが即ち北海廳道釧路支廳、郡役所から支廳となつたは開港前二年の三十一年。警察は直ぐ隣、釧路營林區署はもう一ッ右手。臼井硝子工場の前を一段登れば測候所。東南春採丘上に安田竪坑の煙筒と蒸氣が見える。測候所の三階から河向といふ、西幣舞を俯瞰すれば、所謂鳥瞰圖其儘である。橋通眞直に貫き通れば、競馬場、鳥取村。電話線に伴ふて曲れば停車場、頓化に出る。

○鳥瞰圖的に見る西幣舞は、平凡にして之といふ目立つものは無い。非凡を見出す者は非凡だといふが、平凡忠實を旨とする釧路マップも大分疎雜に流れて西

でありこの生命に依つて雜穀屋もあれば、倉庫もあり運送店もあり、旅館もある。勞働者が多いから蕎麥屋も多い。魚菜市場と其魚河岸とは停車場より少々遠くて河岸に沿ふて川上に發達する。漁業は素より釧路全般の生命であつたのだから旋網實際圍などいふ圍があつた位だ、今後の西幣舞は、魚の蠅よりも十勝農產の虫が多くなるといふものだ

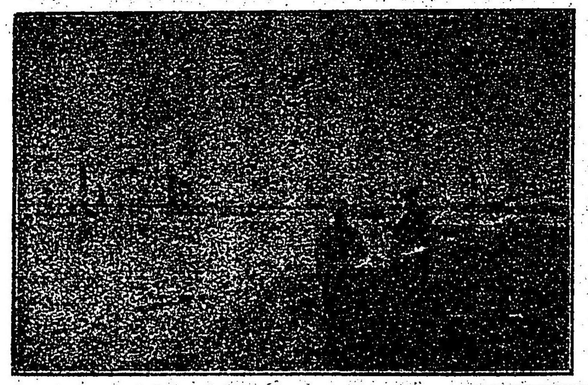
○もう一つは之も矢張り交通關係だが、築港と河身切換問題は西幣舞の發展に大に交渉がある。見給へ停車場の北鳥取に連る空地は、將來果して何の要に供せらるゝかを。殖民から殖產一方の時代となれば、鳥取村に續く空地は大工場が並ぶ、であらう。煙筒の豫定地である。

○寄席趣味の多いのも、發展々々といふのも、雜誌も新聞も、小兒が活動寫眞の樂隊の譜を眞似るのも、殖民地の輪廓で包まれてゐるから除計に目立のではあるまいか。殖民地の發展を急ぐは甚だ結構である、乍併俗惡や淺薄に流れる樣な事があつても不滿ぬ。衛生建築に就いて書く可き事はあるが略す。

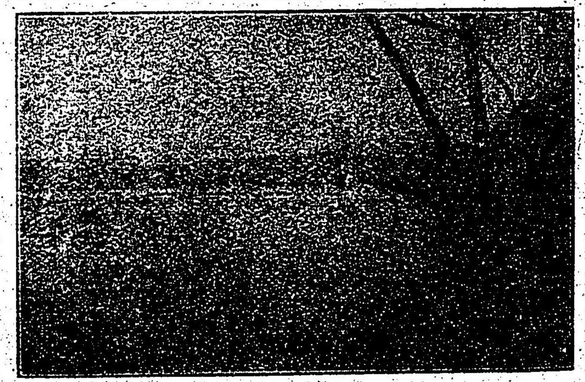
○豆の帶廣

釧路の人が、ヤマへ行くといへば、十勝行き帶廣行きの事である。釧路と帶廣との關係は豆である。六七十萬俵、二百萬圓內外の豆は大半以上釧路を經由して輸出される。雜穀肥料商組合は此の豆と釧路十勝の水產物が目的である。釧路の漁季が終つてから一ヶ月も經てば日々二十臺車、三十臺車、多い時は六七十臺車の多きに達して、之が爲に五六百人以上の活動を見るのである。

米穀商も、酒醬油屋も、猫も杓子も稅金の滯納迄豆



釧路　河口の歸帆



川上郡　摩周湖

川上郡　屈斜呂湖

釧路河水源

◎詩文雜錄

古くより此地に遊べる文墨の士少なからず、其遺汁亦多からんも、之を尋ぬると困難なり。此稿阿寒太會の句大部を占めたるは故あり。予が釧路操觚界の末席を汚し、編輯局裡の筐底に句稿を發見し、河東碧梧桐氏來釧の際發起されたる「幣舞會」のあるとを知りて以來高嶺大澤君、無花果菊地君、夢樓赤坂君等と屢々會吟せり。然るに三君去りて「幣舞會」振はず、偶々菩是子淺利君ありて、熱心に句會の再興を促す。「北鷗吟社」なる一會も同君等の發起に係るものなりしが、四十二年九月十九日の子規忌の當日、「阿寒太會」の發會式を擧げ、大に同好の士を索む。而して一時は十二三名の多きに達したるも、轉任其他の事情の爲め、本年五月には菩是子の所謂氣抜けしたるビールのホップの如く五名を殘し居たるも、是亦遂に解散せんとするに至れり。予は「はいから忘年會」「はさごめ記」「俳諧世迷言」を草し菩是子亦「俳肋カタル」等の奇文を記して新聞に、雜誌に其聲を大にせんとしたる阿寒會亦僅に一年にして聲名地に落つ。菩是子の如きは「短命」の句は辭世の句なりなど稱して遂に短歌に向つて去る予は紀念として此書の末葉に句を掲載するとゝせり、

掲載する所の句は「はとふきす」及「日本及日本人」の地方俳句界に掲載せられたるもののみ、松濱、東洋城、碧童、六花の諸氏撰句したる所也。（八月十八日記）

※　※　※　※　※　※

五月十八日雨雪渡々　春湖山人

無情冷徹單林礎　春已雌砲花未殘
田圃朝來鋤又龍　一簑雨雪滿天寒

庚戌初夏　於釧路　佐々木船山

海天七月暑威微　不見街頭乳燕飛
却疑風寒秋早到　清罷低地製綿衣

※　※　※　※　※　※

春

下萌や行事暦の古人の句　（根室）泉露人

砂掻けば玖瑰の牙も下萌ゑて　田淵黃山洞
鉛付けと網吊る竿や風光る　三好鐵嶺
淺草も素通りしたり春の月　新保春喬

夏

跳梁を許さめや蛾に燭奴あり　大澤高嶺

秋

露こゞりしつゝ船曳く堤哉　中島連重

甘干と火棚に釣たる物忘れ　淺利菩是子
柿の帯燃いて脚痛うましけり　石川啷雲
石門の邊の庵や秋の聲　鐵嶺子

冬

親船の子船なだらに冬搏　啷夢子
海馬風といふに斜や冬搏　同
冬搏灰捨つる溝淡へけり　鐵嶺子
漁夫の割れは氷筏や行く鷗　連童
北風や泥打ち祭る神の顔　菩是子
短命を豫期す遺句あり返り花　同
詣る度紙捻す枯すゝきに返り花　啷雲
乾鮭や孤劍菱も古き銘　同
熊に橋犬に乾鮭貯へし　黄山洞

四十二年十一月二十日、春探古澤の丘上に熊祭あり偶來釧中なりし金澤の俳人松井皓雪君を促し、阿寒會同人等共に行いて之を見る

前憂後婚熊を祭りし一日哉　熊井一毫
熊祭夜宍を小舍に總もあらん　黄山洞
言傳へ雲曉謎も熊祭　啷夢
熊祭り神居と蝦夷名振りの式　鐵子
放言も許さしめ楫に解く草莊　皓雪
臺はぐせば去る機神に燈火して　同
火を吹けば客が來るとよ濕り楫　一老
楫の炉や山番人の鮭のケリ　下宮臥去來
狂女唄ふ籔が米になるならば　菩是子
炭をつぐ手の骨々や母の老　無花果
梁に火伏せの神も園城哀哉　高嶺
灰被る褶尻に奇しき泡の湧く　鐵子

以上の句は所謂中央俳壇に認められたるもの、尚慧星吟なぞ名けて投稿したるあり本年夏季の句未發表のものあり予の製作左に二三句を記し亦記念とす。

放牧の馬夏草に隠れたり　（別保山中にて）
風坑口撰る奥澤や殘る雪
鰊場の砂踏む硬き余寒哉
一樹傘せば枝目拾ひに落花哉
朧夜の潮に浮くなる空瓶や

最近釧路國案內前篇終

目次

○總說
地勢（附山岳、河川、島嶼）……一
沿革……三
面積廣袤……一二
氣象……一二
行政區域……一四
○戶口
戶數及ヒ人口……一五
舊土人戶口……一六
○敎育
敎育狀況……一七
學事表……一八
○兵事
徵兵及志願兵……二〇
現役及在鄉軍人……二二
在鄉軍人團……二二
○社寺宗敎
神社寺院ノ狀況……二三
社寺及宗敎……二三
○衛生……二三

醫師藥劑師其他……二四
鑛泉……二五
○町村經濟
町村費……二六
町村基本財產……二七
○農業
農業狀況……二七
町村農會……二九
耕地反別及農家戶數……三〇
農產物……三五
○蠶業
蠶業狀況……三五
蠶業……三六
○林業
林業狀況……三六
林產物……三八
樹苗圃……三九
○畜產
畜產狀況……三九
馬匹數……四〇
牛畜數……四一
鷄數……四一
鴛數……四二
農牧場……四二
○鑛業
鑛業狀況……四八
礦產物……四九
○水產
水產狀況……四九
免許漁業數……五〇
許可漁業數……五一
自由漁業數……五二
水產物生賣……五三
水產物製造……五四
水產業家……五五
漁業入出稼……五六
漁船……五六
漁網及從業者……五七
水產養殖……五七
○工業
工業狀況……五八
工產物……五八

工場……六一
○商業並金融
商工業家……六二
質屋……六四
營業倉庫……六五
外國輸出品價格……六六
厚岸港內國輸出入貨物價格……六六
務多布港內國輸出入貨物價格……六八
釧路港輸出入貨物價格……七四
聖成畑地賣買價格……七九
勞働者賃銀……八〇
○諸會社
諸會社……八二
各種銀行諸預金及諸貸金……八五
各銀行ノ平均金利……八五
○交通
道路橋梁(仮定縣道ノ部)……八六
渡船場……八七
國費支辨ノ部……八七
地方費支辨ノ部……八七
官設驛遞……八八

燈臺……八八
○拓殖
拓殖狀況……八九
殖民區劃地收容戶數……九三
官林地郡別……九四
賣拂貸付スヘキ未開地……九四
貸付地地目別……九五
民有地地目別……九六
移住者……九六
○財政
國稅……九六
地方稅……九七
滯納處分……九八
水產稅區會議員選舉權者……九八
所得稅決定及納人數……九八
租稅外收入……九九
國費豫算配付額……一〇〇
地方費豫算配付額……一〇一
官有財產……一〇二
地方費財產……一〇四
○雜件……一〇四

支廳吏員……一〇五
町村及戸長役場吏員……一〇五
議員總代人並選被選舉有權者……一〇五
賑恤救濟……一〇六
赤十字社員……一〇七
愛國婦人會員……一〇八
勸業諸會……一〇八
風敎上ニ關スル諸會……一一〇
官公署……一一三
舊土人共有財産……一一六

◉總說

◉地勢

北海道廳釧路支廳ハ釧路國一圓總面積四百五十七方里其廣袤（東西六十一里、南北八十四里）周圍三百五十二里厚岸、川上、釧路、阿寒、白糠、足寄ノ六郡ヲ管轄ス

釧路國ハ東經百四十三度二十七分強（足寄郡ノ西端）ニ起リ東經百四十五度四十三分弱（川上郡北端）ニ終ル東ハ根室國、西緯四十二度五十分（白糠郡直別川口）ニ起リ北緯四十三度四十八分（白糠郡ノ西端）ニ終ル東北ハ山脈逶迤南東ハ海際廣ク展キ釧路嶽及西別嶽ハ十勝國、北ハ北見國ニ界シ南ハ太平洋ニ瀕ス地勢西北ハ山脈斜路湖ヨリ發シ國ノ中央ヲ南流シテ川上、北方ニ雌雄ノ阿寒山ハ西方ニ對立ス釧路川ハ其源ヲ北方屈斜路湖ニ注ク其延長三十四里十四町北海道五大川ノ一ニ居リ流勢緩漫舟楫ノ便アリ國內鐵山鑛泉湖沼多ク釧路郡阿寒郡ヨリハ石炭ヲ川上郡ヨリハ硫黃ヲ産出ス阿寒湖ハ雄阿寒岳ノ西麓ニ在リ夙ニカバチエップ魚ノ産地ト風景ノ幽奇トヲ以テ知ラル屈斜路湖ハ湖中ニ島アリ風光掬スヘク遊獵ニ適ス温泉ハ弟子屈川ノ二ケ所ニ在リテ共ニ藥効著シ物産ハ魚介、海藻及木材、石炭、馬匹等ニテ就中魚介ハ鰊海藻ハ昆布ヲ以テ主要産物トシ牡蠣ハ厚岸鹹湖ノ特産トシテ往古ヨリ著名ナリ厚岸及霧多布ノ二港ハ釧路港ト相聯絡シ貨物ヲ集散ス釧路港ハ港口正南ニ開ラキ港內水深カク巨船ヲ泊スルニ足ル明治四十年鐵道貫通シ同四十二年築港工事ニ着手セラレ爾來港勢駸々トシテ發展セリ

山岳ノ大ナルモノハ

名稱	所在郡名	海拔	備考
雌阿寒岳	阿寒、足寄兩郡	四千七百九十尺	火山
雄阿寒岳	阿寒、川上兩郡	四千九百五十尺	火山

藻琴山川	上川郡	三千三百六十九尺
西別山	仝	二千七百尺
オコタク登二峰	足寄郡	二千七百八十尺
ユーグラン登	白糠郡	二千七百五十尺
稲牛山	仝	二千五百尺
直別山	仝	八百尺

河川ノ大ナルモノハ

名稱	水源地	流末地名	流水里程	川口ノ幅
釧路川	釧路國上川郡屈斜路	釧路町	三十四里十四丁	百二十間
釧路川支流セツチリ川	仝國阿寒郡雄阿寒岳	釧路川、	二十里十四丁	三十間
釧路川支流クツチヤロ川	仝	セツチリ川ノ上流	二十二里十六丁	六間
釧路川支流ホロロ川	仝	仝	十六里〇八丁	十間
阿寒川	仝國阿寒郡阿寒湖	釧路郡鳥取村内釧路川	二十五里十丁	四十間
庶路川	仝國阿寒郡雌阿寒岳	白糠郡庶路村	十五里三十五丁	二十間
茶路川	仝國白糠郡オコタク登	仝郡白糠村	十八里十五丁	二十間
音別川	仝國白糠足寄二郡界ユーグラン登	仝郡尺別村	十三里九丁	二十間

湖沼ノ大ナルモノハ

名稱	所屬地名	周圍	面積	廣	深	面積
厚岸湖	厚岸郡厚岸	七、〇五里	三、四三五町	二、〇三丁	一、三三	(方里)〇、〇七八
厚岸周囘湖	川上郡屈斜路村	六、〇九	一、八七二	一、三三	一、三三	〇、〇四七
阿寒湖	阿寒郡足寄村	六、二三	一、三五八	一、二四	一、一三	〇、〇二五七
塘路湖	川上郡塘路	四、三〇	五九四九	一、一五	〇、二五	
屈斜路湖	釧路郡クツチヤロ	三、一五	八、八四五六	三、〇九	三、三	
春採沼	仝郡釧路村	一、二五	五九六	〇、一〇	〇、一一	
タブコブ沼	釧路、川上二郡界	一、〇八	二七二	〇、一三	〇、一七	
白柳沼	川上郡塘路村	二、一三	六八二	〇、一三	〇、一四	

島嶼ハ

名稱	所屬地名	周圍	面積	廣	深	面積
大黒島	厚岸郡厚岸	一、二七丁	一九	一、一	一、一	(方里)〇、〇〇四七
ケヲポク島	仝郡濱中村	一、一九	三、一〇	〇、二五	〇、二五	〇、〇〇四七
霧多布島	仝 上	三、一〇				〇、〇二五七

◉沿革

厚岸郡ハ厚岸町、濱中村、太田村ノ一町二村ヨリ成リ東西十五里二十九丁南北十里二十四丁面積九十三方里弱地勢丘陵高原ニ屬シ傾斜緩カナルヲ以テ牧畜ニ適スルモ地味瘠薄底地ハ概ネ卑濕而シテ氣候亦一般ニ寒冷ナルヲ以テ農耕ニ適スル土地尠ナシ寛政年間松前藩ニ於テ漁業支配ノ爲メ厚岸場所及霧多布場所ヲ設ク安政六年仙臺藩領トナリ明治二年佐賀藩領ニ移リ同五年根室支廳ノ所轄トナル翌六年厚岸町字湾月町ニ根室支廳出張所ヲ置キ同九年厚岸分署トナシ仝十二年厚岸郡役所ヲ置ク仝二十三年屯田兵四百

四十戸ヲ移シテ太田兵村二個中隊ヲ置キ屯田兵第四大隊ニ屬セシム仝二十四年厚岸郡役所ヲ廢シテ釧路郡役所ニ併合ス

厚岸町

寛政年間松前藩厚岸場所ヲ開キ運上屋ヲ置ク外國船間々入港シタルコトアリ文政二年露人擇捉ニ寇スルヤ南部藩ノ兵百卅人來リ戍ル天保十五年松前藩運場ヲ築キ頭役以下五十餘名及醫師ヲ在勤セシメ鐵鉄三門ヲ備ヘタリ後又背面丘上ニ新營場ヲ設ク後仙臺藩領トナルヤ陣屋ヲ置ク後佐賀藩領トナリ大屬以下ノ官吏ヲ在勤セシム明治十二年郡役所ノ設置ト同時ニ戸長役場ヲ置ク又厚岸鹹湖ハ古來牡蠣ノ蕃殖スル處ニシテ仝十二年國費ヲ以テ雛詰製造所ヲ設ク其後牡蠣ノ輸出ヲ爲スニ及ヒテ漸ク其周圍ニ移在者ヲ見ルニ至レリ尾幌原野ハ地味良好ナルモ水害頻繁ナリシヲ以テ數年前國費事業トシテ尾幌川分水工事ヲ起シ爾來移住民漸ク增加シ厚岸郡隨一ノ農村トナレリ明治三十三年七月一級町村制實施セラル

太田村

明治二十三年山口、和歌山、福井、兵庫、石川、新潟、宮城、山形八縣ヨリ屯田兵トシテ募集シタル士族四百四十戸移住シテ本村ヲ作ス仝二十六年豫備役ニ入リ三十年四月後備役ニ入ル本村ハアイヌ太田紋助曾テ此地ニ住シ屯田兵村ヲ置カルヽニ當リ土地ノ撰定等ニ盡力シタルヲ以テ其姓ヲ取リ村名ト爲ス明治二十三年戸長役場ヲ設置ス同二十四年郵便局ヲ置ク地味痩薄濃霧多ク農業振ハズ

濱中村

松前藩ノ霧多布場所ヲ開キシニ始マリタルモ後場所閉鎖ト共ニ住民霧多布ヲ去リ明治十二年頃ハ僅ニ三戸ニ過キサリシモ霧多布ノ東方ナル榊富右衛門番屋所在地ハ明治三年陸奥、福山、函館等ヨリ二十九戸八十一人ヲ移シ其姓ヲ取リテ榊町ト稱ス仝六年根室支廳濱中出張所ヲ設ク次テ戸長役場トナリ明治十七年電信局ヲ置ク然ルニ此地漁船ノ碇泊ニ便ナラサルヲ以テ商業中心ハ再ヒ霧多布ニ移リ厚岸郡役所出張所ヲ置キ明治十八年郵便受取所ヲ設ク二十年出張所ヲ廢シテ戸長役場ヲ置キ後ヲ電信局、警察署、病院等漸次榊町ヨリ移轉セリ天保二年外國船後濱村ニ來リ建物ヲ燒キタルコトアリ本村ハ漁業ト牧畜トヲ以テ主ナル產業トセリ明治三十九年四月二級町村制實施セラル

川上郡

川上郡ハ熊牛、塘路、虹別、弟子屈、屈斜路ノ五村ヨリ成リ東西九里二十丁南北十九里二十丁面積百六方里弱郡内ニアトサヌプリノ火山及當國第一ノ大湖水屈斜路湖ヲ包容シ又塘路湖摩周湖等アリ昔時久壽里場所ニ屬シ標茶二番屋及倉庫ヲ置ク明治二年佐賀藩ノ支配トナリ同五年根室支廳ノ管轄ニ屬シ多年只アイヌノ部落數所ニ散在スルニ過キサリシカ明治十八年釧路集治監ヲ標茶ニ置カルヽヤ茲ニ始メテ商人ノ來住スルモノアリ同二十年安田善次郎アトサヌプリノ硫黄ヲ採掘スルニ及ヒ標茶、硫黄山間ニ軌道ヲ布設シ標茶、釧路間ハ釧路川ニ小蒸汽船ヲ浮ヘテ其間ノ交通ヲ便ニセリ爾來工夫商人等ノ來住スルモノ夥シク同二十二年川上郡役所ヲ標茶ニ置キ又警察署、測候所等ヲ設ケ同二十三、四年ノ交ハ最モ盛況ヲ呈セリ同二十四年郡役所ヲ廢シテ釧路ニ合シ仝郡各村戸長役場ヲ標茶ニ置キ警察署モ亦同時ニ廢シテ分署ト爲シ同二十九年硫黄採掘ヲ停止シ且製煉ヲ止メ仝三十四年北海道集治監釧路分監ノ廢止セラルヽニ至リ漸次衰退ニ傾ムキシモ最近ニ於テ分監跡ニ陸軍省軍馬補充部川上支部ヲ設置セラレ幾分其衰退ヲ恢復セリ同四十二年潮候所ヲ釧路町ニ移轉ス

熊牛村

郡ノ部ニ於テ詳述シタルヲ以テ略ス熊牛村、塘路村、虹別村戸長役場ハ現ニ本村字標茶ニ在リ

塘路村

古來塘路湖畔ニアイヌ部落アリ明治十八年標茶ニ分監建築ノ擧アルヤ其用材ハ多ク湖畔附近ヨリ伐採シタルヲ爲メ一時相夫其他ノ勞働者多數入込ミ大ニ繁榮シタルモ該工事竣ルト共ニ皆離散シ再ヒ寂寥トナレリ同十六年熊牛村ニ設置スヘキ戸長役場ヲ一時此地ニ仮設シテ事務ヲ取扱ヒタルヨリ二三ノ和人寄留スルニ至ル同二十三年道路開通シ驛遞ヲ設ケタルモ農耕適地多カラサルヲ爲メ移住スルモノ少ナク今尚ホ煙稀少ナリ

虹別村

古來アイヌノ小部落ニシテ明治二十三年根室國根室水產組合カ同村虹別川ニ鮭鱒人工孵化場ヲ設置シ鮭鱒人工孵化事業ヲ經營スルニ至リ之レニ從事スル職員及人夫等居住スル外和人トシテ來住セルモノナク只タ一村ノ名アルニ過キサリシノミ明治四十年度ヨリ該孵化事業ハ北海道地方費ノ經營ニ移リ同時ニ北海道水產試驗場西別分場ヲ設置セラル次テ明治四十三年度ヨリ國費支辨ノ事業トナリ規模擴張セラル現時人馬ノ交通漸ク頻繁ニ趨キ將ニ開發ノ緒ニ就カントス

弟子屈村

昔時ヨリアイヌ部落アリ石川縣平民本山七右衛門ナル者曾テ鹿獵ヲナシタルトキ此地ニ溫泉ノ湧出スルヲ知リ明治十六年獵業ト溫泉宿ヲ兼ヲ夏期中居住セシカ同十八年家族ヲ率ヒテ移住シ家屋ヲ新築シテ常住セリ仝十八年標茶ニ分監建築工事アリ工夫等ノ往來スルモノ多ク同二十年安田善次郎ノ硫黃山開坑ト共ニ輕便鐵道ヲ布設シ交通ノ便開クルニ至リ移住者ヲ增加シタリ明治二十三年本村ヨリ北見國境迄道路ヲ開鑿セラレ明治二十四年驛遞ヲ設ケラレシモ同二十九年硫黃採掘事業中止ト共ニ人口漸ク各所ニ離散セリ明治三十年本村地積二千餘萬坪ヲ御料地ニ編入セラレ御料局出張所及派出所ヲ置キ移住民ヲ募集シ農耕ヲ奬メラルヽニ至リ農業大ニ進運ニ向ヘリ明治三十七年熊牛外四村戶長役場ヨリ分離シ本村ニ戶長役場ヲ設置セリ

屈斜路村

往昔ヨリアイヌ部落アリアトサヌプリ硫黃山ハ其面積數萬坪ノ廣キニ亘リ礦層平均三尺アリシト本礦ハ夙ニアイヌ人ノ知リシ處ニシテ其發見頗フル古ク今其起原ヲ審ニスル能ハスト雖モ慶應年間幕府吏某採掘ニ着手シタリトノ說アリ明治五年佐野孫右衛門其手代ヲシテ探驗セシメ同九年試掘シタルニ頗ル有望ナリシヲ以テ仝十年五萬餘坪ノ借區許可ヲ受ケ採掘ニ從事セルモ然ルニ當時運搬不便加フルニ本邦在來ノ製煉法ニ依リシヲ以テ多量ノ製品ヲ得ル能ハズ同十八年之ヲ山田朔郎ニ讓渡シ二十年同人亦之ヲ安田善次郎ニ讓渡セリ同人ハ鋭意該業ノ擴張ヲ圖リ十七萬六千餘圓ヲ投シテ山麓ヨリ標茶迄二十四哩餘ノ鐵道ヲ布設シ又標茶ニ蒸汽精煉場ヲ設ケ小蒸瀛船ヲ釧路川ニ浮ヘテ釧路標茶間ノ運搬ニ便シ爾來年ヲ追テ營業隆盛トナリ元山ノミニテモ役員坑夫其他合セテ三百名以上在留セシカ其后漸次礦量減セルニ及ヒ仝二十九年七月終ニ廢礦セリ爲メニ村況俄ニ衰頽ス最近ニ於テハ漸ヲ利用シテ流送スル等木材業稍々好況ヲ呈シ幾分頽勢ヲ挽回セリ

釧路町

釧路郡ハ釧路町、鳥取村、昆布森村、跡永賀村、仙鳳趾村ノ數町村ヨリ成リ東西十四里二十二丁南北五里十七丁面積二十八方里餘ニシテ地勢釧路川ニ依テ二分セラルヽモ過半泥炭性ノ濕地ニシテ開墾容易ナラス海岸線ハ一帶ノ砂濱ナリ

本郡ハ往昔松前藩ノ支配地ナリシカ寛政十一年幕府ノ所轄トナリ釧路、昆布森、仙鳳趾ノ三ケ所ニ驛遞ヲ設ケテ交通ニ便ス安政二年函館奉行ノ管轄トナリ同四年請負人佐野孫右衛門自費ヲ以テ南部地方ヨリ移民五戶ヲ募リ來住セシムルヲ和人移住土着ノ嚆矢トナリ明治二年佐賀藩ノ支配トナル同三年又孫右衛門ハ自費ヲ以テ奥羽及函館ヨリ百七十戶六百三十人ヲ移シ家屋漁具ヲ給ス其費額凡八千圓ニ達ス同四年開拓使ノ直轄トナリ同五年根室支廳ノ管轄ニ歸ス同十三年釧路米町及昆布森ノ二ケ所ニ戶長役場ヲ置ク同十八年釧路ニ郡役所ヲ置キ同二十年安田善次郎屈斜路村アトサヌプリノ硫黃ヲ採掘スルヤ釧路ハ其貨物出入ノ要衝トナリシヲ以テ函館方面ヨリノ移住者大ニ加ハリ商業漁業共ニ發達ス明治三十年郡役所ヲ廢シテ支廳ト爲ス

釧路町

寛永年間松前藩釧路川上流クッチャロノアイヌヲ當地ニ移シ漁場ヲ開設シ久壽里場所運上屋（寛政十年運上屋ヲ會所ト稱ス）ヲ置ク寛政以後幕府及松藩共各其支配中官吏ヲ當地ニ勤番セシメ又砲臺ヲ設ケテ砲數門ヲ備ヘタリ安政四年嚴嶋神社鎭座ヲ祠リ安政四年及明治三年請負人佐野孫右衛門自費ヲ以テ移

民ヲ募リ來住セシムルヤ卒先シテ籍ヲ移セリ同四年市區ノ体裁ヲナス同八年郵便局ヲ置ク仝十年頃ヨリ行商人ノ留ツテ營業スル者アリ同十三年戸長役場ヲ置キ同十七年之レヲ廢シ釧路出張所ヲ置ク同十八年改メテ郡役所ヲ設ク仝二十三年七月釧路港ヲ以テ特別輸出港トセラル爾來内外國船ノ出入漸ク多キニ至レルモ古來ヨリノ漁業地ナルヲ以テ今尚商漁相半スルノ狀況ナリ明治三十三年七月一級町村制實施セラレ仝ク自治体トナル

鳥取村

明治十七、十八兩年ニ於テ鳥取縣士族百五戸移住シ本村ヲ開クノ家屋農具種子竝ニ二ケ年間ノ食料ヲ貸給シテ開墾ニ從事セシメ仝十七年六月勸業派出所ヲ置キ農事ヲ督勵ス仝二十年同派出所ヲ廢シテ戸長役場ヲ置ク然ルニ移民農事ニ熟セス且ツ連年阿寒川氾濫ノ害ヲ被リ收穫意ノ如クナラス人心爲メニ萎靡離散セントスル者アルニ到リシカ同十九年官ニ於テ排水ノ工ヲ起シ移民ヲシテ之ヲ請負ハシムル次テ住民ハ釧路、標茶間ノ道路開鑿ニ從事シ傍ラ開墾ヲ爲シ以テ糊口ヲ凌キタリ同二十三年官貸與金三萬八百十三圓ヲ棄權シテ辨償ノ義務ヲ免レシメ又士族授産費トシテ貸與シタル金額ヲ五十ケ年賦利引法ニヨリ一時返納ヲ許可シテ四千七十二圓餘ヲ所得セシメ又移住費ノ殘金千五十圓ヲ備荒貯蓄金トシテ分與シ又廳作奬勵ノ爲メ同殘金ノ内ヲ以テ廳莖搥搾器四個ヲ下付シ且阿寒川分水工事ヲ起シテ村民ニ便ヲ與ヘ以テ今日ニ及ベリ

昆布森村

往時ヨリ昆布ノ産地ニシテアイヌノ部落及番屋アリ寛政十一年驛遞ヲ置ク明治三年佐野孫右衛門ノ募集ニ應シ移住シタルモノ二十戸同十三年郵便局ヲ設ケ後一度之ヲ廢シ最近ニ至リ再ビ之ヲ置ク昆布森村戸長役場ノ管轄ナリ

仙鳳趾村

昔時アイヌ部落及番屋アリ寛政十一年驛遞ヲ置キ通行屋ヲ設ク文化五年嶮峻ヲ鑿リ厚岸ニ至ルノ道路ヲ通ス明治三年佐野孫右衛門ノ募集ニ應シ移住シタルモノ二十戸同十三年郵便局ヲ設ケ後一度之ヲ廢シ最近ニ至リ再ビ之ヲ置ク昆布森村戸長役場ノ管轄ナリ

跡永賀村

寛政十一年小休所ヲ設ク明治三年佐野孫右衛門ノ募集ニ應シ移住シタルモノ凡十數戸是レ和人來住ノ嚆矢トス明治十一年以後漸次移住者ヲ增加ス昆布森村戸長役場ノ管轄ナリ

仙鳳趾村

昔時アイヌ部落及番屋アリ寛政十一年驛遞ヲ置キ通行屋ヲ設ク文化五年嶮峻ヲ鑿リ厚岸ニ至ルノ道路ヲ通ス明治三年佐野孫右衛門ノ募集ニ應シ移住シタルモノ二十戸同十三年郵便局ヲ設ケ後一度之ヲ廢シ最近ニ至リ再ビ之ヲ置ク昆布森村戸長役場ノ管轄ナリ

阿寒郡ハ舌辛村、徹別村、蘇牛村、他別村ノ四村ヨリ成ル東西十里十六丁南北十二里十五丁面積八十七方里ヲ有ス高サ五千三百三十尺ヲ有スル雌阿寒岳及周圍六里廿二丁ヲ有スル阿寒湖ヲ包容シ廣大ナル沃野ヲ控フ氣候溫和地味良好ニシテ農耕牧畜ニ適ス昔時ハ釧路場所ニ屬セシカ明治四年以後釧路ト同一管轄ヲ以テ支配セラレ今日ニ至ル明治十五年雪裡ニ戸長役場ヲ置キ全郡ヲ管轄シ明治三十一年十一月舌辛村ニ移セリ

舌辛村

古來土人(アイヌ)小部落ナリシ明治十八年他ヨリアイヌヲ移殖シ明治十九年ニハ戸數五十餘戸ニ達シ稍土人部落ヲ形成シタリト雖モ當時和人ノ移住者ハ各所ニ散在シ實ニ微々タル狀況ナリシ明治二十八年ニ至リ殖民區劃地ヲ設定セラレ仝廿九年始メテ福岡、富山兩縣ノ移民三十餘戸來住舌辛村十線ヨリ拾五線ノ間ニ於テ農耕ニ從事スルニ後各縣ヨリ毎年來住者アリ明治三十一年頃一村落ヲ形成シ村政上不便勘ナカラサルノ故ヲ以テ同年十一月從來同村字雪裡ニ設置シアリシ戸長役場ヲ同村殖民區劃地十五線ニ移轉シ以テ今日ニ及ヘリ

徹別村

徹別村、蘇牛村、他別村モ往古土人ノ小部落ニ過キスシテ明治二十八年以降殖民區劃地ヲ設ケ又道路ノ開通驛遞所ノ設置等交通機關ノ設備成ルニ從ヒ漸次開發今日ニ至リタルモノナリ

白糠郡ハ尺別村、白糠村、庶路村ノ三村ヨリ成ル東西十一里南北十五里十二丁面積七十七方里海岸線ノ長サ八里三十一丁沙濱連續弓狀ヲナス平地ハ泉濕ノ部分アルモ概ネ地味豊沃ニシテ農耕ニ適シ丘陵高原ハ薄キ火山灰ヲ覆ヒ地味劣レルモ牧畜ニ適ス昔時白糠場所ト稱スル頃ハ松前藩士飛内某ノ給地ニシテ山猟ヲ主トセリ寛政十一年幕府ノ支配トナリシモ鹿ノ減少ニヨリ場所ヲ廢シテ釧路場所ノ附屬ト爲ス寛政十二年八王子同心五十餘名移住シ開墾ニ從事シタルモ數年ニシテ轉退シ文政四年再ヒ松前領トナリ安政元年幕府ノ支配ニ歸シ明治二年兵部省ニ屬シ同三年松前藩ニ屬ス同四年根室支廳（開拓使）ニ移リ同十七年根室縣ノ管轄トナリ此年白糠村ニ戸長役場ヲ置ク仝三十四年鐵道開業以來沿道人口漸ク增加シ各原野ニモ亦農民移住シ來レリ

尺別村

本村ハ尺別、音別、直別、三原野ヲ以テ成リ地勢農牧ニ適ス古來アイヌ部落ナリ寛政十一年尺別驛舍ヲ設ケ交通ニ便セリ明治三十一年殖民地貸付ト共ニ移住者著シク增殖シ同三十四年尺別教育所ヲ設ク同三十六年音別停車場開業シ交通ノ便ヲ得ルヤ人口益增加シ學校ノ增設、郵便局ノ設置等アリ次テ明治四十二年陸軍省軍馬補充部音別派出所ヲ設ケラルヽニ至リ街衢ヲ形成スルニ至レリ

白糠村

寛政十一年前ヨリ白糠場所ノ運上屋アリシモ其起因今ニ審カナラズ同年幕府ノ支配トナリ場所運上屋ヲ廢シ釧路場所附屬トナシ同十二年八王子同心五十余名移住田ニ屯シ開墾ニ從事シタルモノ數年ニシテ轉退シ自後少數ノ漁業者トアイヌノミトナリ開拓使置廳後根室支廳ニ於テアイヌ及和人ノ移住ヲ奬ム明治八年郵便局ヲ置カル仝十七年戸長役場ヲ置キ白糠足寄ノ二郡各村ヲ管轄セシメ同時ニアイヌニ農業ヲ敎授ス同十九年頃ヨリ年々戸口ヲ增シ同三十三年ニ至リ石炭山開掘セラルヽニ至リ大ニ景氣ヲ添ヘ農民ノ各原野ニ移住開墾スルモノ漸ク增加セリ仝三十四年釧路、白糠間鐵道ノ完成ニ依リ一時終起点トシテ繁榮ヲ來シタルモ鐵道ノ延長ト共ニ衰退ノ傾向ヲ生セシガ其後陸軍省軍馬補充部白糠支部設置セラレ幾分

市街地ノ衰退ヲ挽回セリ

庶路村

昔時アイヌ居住シ明治十八年頃ヨリ移住民來住明治二十七八年頃迄ハ其戸數僅カ五六戸ニ過キザリシニ明治三十一年殖民區畫地貸付ト共ニ單獨移住者來住シ次テ同三十二年大野勘逸農場ヲ開キ小作人三十余戸ヲ移セリ明治三十三年小學校ヲ設置ス同三十四年庶路停車場ヲ置キ交通ノ設備成ルニ從ヒ漸次開ケテ小部落ヲ形成シタルモノナリ

足寄郡ハ湿別村、足寄村、利別村、螺湾村ノ四村ヨリ成ル東西十一里十七丁南北十二里六丁面積六十八方里ヲ有スル山間ノ一區域ニシテ殖民地積約三千二百萬坪ヲ包藏セリ氣候、地味共ニ良好ニシテ釧路國隨一ノ農耕適地タリ

本郡ハ昔時松前藩士ノ給地タリ寛政十一年幕府ノ支配トナルヤ釧路場所ノ所屬トナレリ文政四年再ヒ松前領トナリ安政元年再ヒ幕府ノ支配ニ歸シ明治二年九月兵部省ニ屬ス次テ松前藩ノ支配ニ移サレ仝五年一月根室支廳ノ管轄トナリ仝十七年白糠、足寄兩郡各村戸長役場ヲ白糠村ニ設置サレ同役場ノ管轄トナル明治四十一年四月白糠、足寄各村戸長役場ヲ足寄村ニ置ク抑モ本郡ノ往昔ニ於ケル居住者ハアイヌ人種ノミニテ各所ニ散在シテ小部落ヲ成シ夏期ハ釧路、白糠ノ海濱ニ漁リ或ハ漁場ノ漁夫ニ雇ハレ冬季ハ獸猟ニ從事シ主トシテ鹿ヲ獵シ生活セリ（其捕獲頭數ノ如キ年々數千ニ達セシモ濫獲ノ余種族大ニ減少シ近年ハ年內僅ニ十數頭ヲ捕獲スルニ過ギズト）爲メニ數里ノ沃野モ徒ニ草木ノ繁茂ニ委シタリ明治十二年初メテ細川繁太郎ナルモノ本郡足寄村字足寄太原野ニ移住シ鍛冶ヲ開始シ傍ラ牧馬ノ蕃殖ニ努メタリ是レ本郡ニ於ケル和人ノ移住及牧畜經營ノ嚆矢ナリトス

足寄村

明治十八年帶土人ニ農業ヲ敎授スル爲メ足寄村ニ釧路場所ノ出張所ヲ設ケ官吏ヲ派遣シ各村ノ蕃土人ヲ本所ニ集メ農事ヲ奬勵シテ開墾ニ從事セシメタルヲ以テ稍村落ノ形狀ヲ爲シ農業モ亦稍其緒ニ就クニ至

リシガ二十二年出張所ヲ廢セラレタルト共ト監督保護ノ任ニ當ルモノナキ爲メ漸ク離散シ耕地ノ大部分ハ荒廢ニ屬セリ明治二十一年栃木縣人高氣松本村ニ移住シ農業ヲ營ミ傍ラ官設渡船場ノ取扱ヲ爲シタリ續テ菅野周助、齋藤繁三等來住農業ニ從事セリ當時和人ハ合セテ四人ナリシト云フ明治三十年足寄原野ニ殖民區劃地ノ測定成リ仝三十一年ヨリ貸付セラレ漸次移住民ノ來住ヲ見ルニ至ル明治四十一年四月白糠足寄郡各村戸長役場ノ管轄ヲ割キ本村ニ戸長役場ヲ設ク

利別村、螺灣村、塗別村ハ何レモ往時松前藩ノ支配ニ屬シ僅少ノ土人居住シタルノミナリシガ明治三十年各村原野ニ殖民區劃地ヲ測定セラレ始メテ移住者ヲ見ルニ至レリ又十勝ヨリ北見ニ通スル仮定縣道ハ明治三十六年竣工シ同三十九年北見ニ聯絡全通スルニ至レルト明治四十年池田網走間ノ官設鐵道工事ノ起工セラルルト共ニ足寄村ヨリ上足寄原野及螺灣村ニ通ズル殖民道路明治三十九年起工同四十一年十二月竣工シタル等交通上ノ便ヲ得ルニ從ヒ移民來住人口漸次增加シ四隣開發ノ緒ニ就キシモ開村僅カニ二三年ニ過ギズ沿革トシテ記述スベキモノナシ

◉面積廣袤周圍沿海表

郡別	釧路郡		阿寒郡		白糠郡		足寄郡		川上郡		厚岸郡		計	
面積(方里)	二七	五	八七	一〇	七七	二	六九	二	一〇六	九	九一	一五	四七七	六
廣袤(里)	三	三	三	三	一五	一五	二	三	一〇	一〇	一二	一二	八四	八四
周圍(里)	四四	二	五六	一	五四	三	六九	一	六六	一	九九	三五	三五二	四九

◉氣象

（明治四十二年）

測候所　所在地名　英國綠威偏東　北緯

釧路二等測候所　川上郡熊牛村字標茶　一四度　二六分　四

空氣ノ溫度（攝氏）　豐度　三分

年／月　一月　二月　三月　四月　五月　六月　七月　八月　九月　十月　十一月　十二月　年

四十二年　(一)一三、三　一〇、二　五、七　四、五　七、四　一三、〇　一六、五　一八、二　一五、二　七、〇　二、五(一)　五、八　四、一

最高　(一)〇、六　三、四　七、七　一八、二　一九、六　二一、八　三一、七　三〇、二　二五、八　一〇、五　一六、三　六、三

最底　(一)三一、〇　三、六(一)　二九、〇(一)　一五、〇(一)　二、六(一)　一、二　一、六　二、〇　一、六(一)　五、七(一)　二、二(一)　三、二(一)　三、六(一)

最高　二日　二〇　二九　三　三〇　二三　二六　二八　二二　一六　二　二九　七月二六日

最底　二三日　七、六　二、〇　一、二　七、六　一、六　二、〇　一、六　二、〇　二、二　一、六　二、六　二月七日

（海面上晴雨計ノ位置　三米七）　（測候所創立年月　明治廿二年十一月）

(一)印ハ零度以下ヲ示ス

（攝氏）

一年中空氣ノ最高溫度及最低溫度

年次　最高　同上起日　最低　同上起日

四十二年　三一、七　七月十六日　(一)三、六　二月七日

各月中空氣ノ最高及最低溫度　（明治四十二年）　（攝氏）

高低／月　一月　二月　三月　四月　五月　六月　七月　八月　九月　十月　十一月　十二月　年

最高　(一)〇、六　三、四　七、七　一八、二　一九、六　二一、八　三一、七　三〇、二　二五、八　一〇、五　一六、三　六、三

最底　(一)三一、〇　三、六(一)　二九、〇(一)　一五、〇(一)　二、六(一)　一、二　一、六　二、〇　一、六(一)　五、七(一)　二、二(一)　三、二(一)　三、六(一)

最高　二日　二〇　二九　三　三〇　二三　二六　二八　二二　一六　二　二九　七月二六日

最底　二三日　七、六　二、〇　一、二　七、六　一、六　二、〇　一、六　二、〇　二、二　一、六　二、六　二月七日

（單位ミリメートル）

雨雪量

年次　一ヶ年中ノ全量　月中最多量　同上起月　一日中最多量　同上起日

四十二年　二九六、四　二三六、〇　九月　九月二十八日

霜及雪ノ初終期

年次　四十二年

霜

	初日	終日
最多風位	六月十七日	九月二十日

雪

	初日	終日
	十月廿八日	五月十八日

積雪

	初日	終日
	十一月十日	四月廿九日

月別	風位
一月	北
二月	北
三月	北東
四月	西南西
五月	南西
六月	南西
七月	南西
八月	南西
九月	南西
十月	北西
十一月	南西
十二月	北西

各月中空氣ノ最高及ヒ最低温度

（但シ平均）　明治四十二年分

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
平均最高	(一)五、六(一)	二、二	一、七	一〇、三	一三、〇	一九、〇	二三、九	二三、三	三三、五	二三、六	一三、四	八、六	一〇、四
平均最低	(一)三、三(一)	(一)六、六(一)	一四、八	(一)二、〇	二、二	七、三	一二、三	一三、七	一〇、三	〇、六(一)	(一)四、〇(一)	(一)二、七(一)	二、三

◉行政區域

制度別	町村名	區域		役場位置	町村制實施年月
		郡	大字（村名）		
二級	釧路町	釧路郡	大字濕月町	大字濕月町	明治三十二三年七月
			(濕月町、松葉町、梅香町、若竹町、奔度村、眞龍村、古多村、床潭村、末廣村、瑠璃澗村、別寒邊牛村)		
			大字霧多布村	大字霧多布村	明治三十九年四月
			(霧多布村、柳町、濱中村、後靜村、琶瑠瀬村、散分村)		
			白糠村、庶路村、尺別村	(白糠村字マルカ)	明治十七年設置
			足寄別村、足寄村、利別村、螺灣村	足寄村	明治四十一年設置
			熊牛村、塘路村、虹別村	熊牛字標茶	明治二十四年設置
			弟子屈村、屈斜路村	弟子屈村	明治三十七年設置
			舌辛村、徹別村、蘇牛村、雄別村	舌辛村	明治十五年設置
			鳥取村	鳥取村	明治二十年設置
			昆布森村、跡永賀村、仙鳳趾村	昆布森村	明治十三年設置
			太田村	太田村	明治二十三年設置
二級	厚岸町	厚岸郡	(湊町、松葉町、梅香町、若竹町、奔度村、眞龍村、古多村、床潭村、末廣村、瑠璃澗村、別寒邊牛村)		
二級	濱中村	厚岸郡	(霧多布村、柳町、濱中村、後靜村、琶瑠瀬村、散分村)		
戸長役場	白糠外二村	白糠郡	白糠村、庶路村、尺別村	(白糠村字マルカ)	明治十七年設置
戸長役場	足寄外三村	足寄郡	足寄別村、足寄村、利別村、螺灣村	足寄村	明治四十一年設置
戸長役場	熊牛外二村	川上郡	熊牛村、塘路村、虹別村	熊牛字標茶	明治二十四年設置
戸長役場	弟子屈外一村	仝	弟子屈村、屈斜路村	弟子屈村	明治三十七年設置
戸長役場	舌辛外三村	阿寒郡	舌辛村、徹別村、蘇牛村、雄別村	舌辛村	明治十五年設置
戸長役場	鳥取村	釧路郡	鳥取村	鳥取村	明治二十年設置
戸長役場	昆布森外二村	仝	昆布森村、跡永賀村、仙鳳趾村	昆布森村	明治十三年設置
戸長役場	太田村	仝	太田村	太田村	明治二十三年設置

◉戸數及人口　（明治四十二年末日現在）

種別 / 役場名	戸數	人口 男	人口 女	人口 計
釧路町	四、四九三	二、四九三	九、五九八	三、〇七一
厚岸町	一、六三七	五、三八八	四、五七二	九、九五九
濱中村	七六八	二、一三九	一、六三〇	三、七六九
白糠外二村	一、三四四	二、八六三	二、四一〇	五、二七三

| | | |

町村教育費ハ町村費百圓ニ對シ二十三圓弱ニシテ一戸當リ負担額五圓六十四錢兒童一人當リ八圓七錢五厘ナリ

◉學事表 一、兒童（明治四十三年五月末日現在）

町村別	種別	學齡兒										就學歩合	在學兒童										
		尋常小學校卒業		尋常小學校在學		不就學		合計					尋常科		高等科		合計					
		男	女	男	女	男	女	男	女	計			男	女	男	女	男	女	計			
釧路町		二八四	二五一、一三	八五五	六	二一、七〇二	三五二	九九、六五二	八五二、四三一	九七、三三、五四六三	九五、三三	一〇九一、六六二一、三〇八	七五〇	六二四	一三六	一〇七	八八六	七三九	一六二五	一〇九一、六六二一、三〇八		
厚岸町		六〇	三九	五七一	四七九	一	七四六	六三〇	一〇〇、〇〇	九九、六四	六七六	七二一	五三	七四	五	三	七三九	二四〇	六三四			
滚中村		四五	四	二三〇	一七九	二	一	三八	二七四	九九、三七	二七五	三三	三四	七	三四	七	三〇九	二四〇	七三三			
白糠外二村		八二	六二	二九八	二〇七	九	三	五七〇	四四九	九八、四二	九七、三三	四七一	三五九	一八	一四	四	四八九	二七三	一〇七			
足寄外三村		二	一	一三七	一〇七	一	一	一四	一一	一二、〇〇〇	一二、〇〇〇	一三六	一〇七	一	一	一	一三六	一〇七	一			
熊牛外二村		三	一	四一	四一	八	一五	五六	六八	八六、一二	八六、三二	六五	五五	五	五五	五	五五	五五	五五			
弟子屈外一村		二五	二九	五三	五五	二	五	九五	一〇三	九七、八九	九五、一五	六五	六五	六五	六五	六五	六五	六五	六五			
舌辛外三村		五二	四四	一〇二	一〇二	四	五	一〇二	一〇五	九七、五五	九五、六五	一四五	一四五	一四五	一四五	一四五	一四五	一四五	一四五			
鳥取村		三	〇	三四	三二	二	二	三九	三四	九六、六一	九五、六五	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四			
昆布森外二村		七	四	一二四	八五	二	二	一三五	一一四	九八、一八	九八、一八	一三三	一〇三	一三	一三	一三	一三三	一〇三	一三			
太田村		一四	九	五九	五九	一	一	七五	七二	九七、三三	九七、一九	七〇	七一	一〇	一八	九〇	九〇	九一	一〇三			
合計		五四六	四〇三、八四〇三、九二	九五	四九五、一四八、四三	九八、一九																

◉學事表 二、學校、教員（明治四十三年五月末日現在）

町村別	種別	學校數					教員數				學級數					教員數			
		分教場	教育所	特別教授	尋常、高等小學校	合計	代用教員	准教員	正教員	合計	尋常科	高等科	合計	代用教員	准教員	正教員	合計		
釧路町		一	一	三	四	九	一六	八	三三	五七	四三	一六	五九	一六	八	三三	五七		
厚岸町			三		三	七	一二	四	一三	二九	二〇	一〇	三〇	一二	四	一三	二九		
滚中村			一		三	五	一〇	二	一五	二七	一八	一〇	二八	一〇	二	一五	二七		
白糠外二村		一	六		二	九	一五	四	一五	三四	二四	一〇	三四	一五	四	一五	三四		
足寄外三村			一		一	二	五	一	五	一一	七	四	一一	五	一	五	一一		
熊牛外二村			二		一	三	六	一	五	一二	八	四	一二	六	一	五	一二		
弟子屈外一村			二		一	三	六	一	五	一二	八	四	一二	六	一	五	一二		
舌辛外三村			二		一	三	六	一	五	一二	八	四	一二	六	一	五	一二		
鳥取村			一		一	二	四	一	四	九	六	三	九	四	一	四	九		
昆布森外二村			二		一	三	六	一	五	一二	八	四	一二	六	一	五	一二		
太田村			一		一	二	四	一	四	九	六	三	九	四	一	四	九		
合計		一	一九	三	二六	四九	一〇七	二九	一〇九	二四五	一三五	五六	一九一	一〇七	二九	一〇九	二四五		

◉學事表 三、教育費（明治四十三年五月末日現在）

町村別	種別	町村費總計	教育費	町村費ニ對スル教育費歩合	教育費一戸當	教育費兒童一人當
釧路町		一〇八、九〇七	二五、九四九	〇、二三八	五、七五	八、七四〇
厚岸町		二元、三七	九、六五八	〇、三九	五、九二六	七、〇三九

◉兵事

◉徴兵及志願兵（明治四十二年）

町村	檢査人員						本籍寄留			前年假決者		志願者	
	本籍			寄留									
	合格	不合格	計	合格	不合格	計	計	徴集猶豫	徴集延期	計	陸軍	海軍	計
釧路町	九九	五	一〇四	一三七	二	一三九	一四八	一〇	三二	四二	一	九	一〇
昆布森外二村	六一	一一	六二	五一	一	五二	一一三	一	一五	一六			
鳥取村	六	一	七	五		五	一二		一	一			
熊牛外二村	一一	二	一三	一〇	一	一一	二四		一	一			
合計	一七三	一九	一九二	一五六	四	一六〇	三五二	一一	五一	六二	一	九	一〇

町村	檢査人員						本籍寄留			前年假決者		志願者	
	本籍			寄留									
	合格	不合格	計	合格	不合格	計	計	徴集猶豫	徴集延期	計	陸軍	海軍	計
釧路町	八一七	二九六	一、一一三	四、六三一	七五九	五、三九〇	六、五〇三	一、〇五八	一、〇三五	二、〇九三	七、三五九	一〇、五三二	一七、八八一
昆布森外二村	二、九〇六	一、九〇五	三、九一一	四、九七七	一、八五五	六、八三二	一〇、七四三	一、九〇〇	一、八五六	三、七五六	四、六三二	七、五四二	一四、二九八
鳥取村	一、八六二	一、五二	三、三九四	三、三九六	九四四	四、三四〇	七、七三四	一、四九八	一、四四〇	二、九三八	四、六四四	七、一六三	一四、八九七
昆布森外二村	二、七四一	二、三六二	五、一〇三	四、九六二	二、〇四〇	七、〇〇二	一二、一〇五	一、七九四	一、七四九	三、五四三	四、二六六	六、三九五	一〇、八七四
太田村	一、三五六	一、五四	二、九〇	二、三六二	一、五四四	三、九〇六	六、九九六	一、四一九	一、三〇二	二、七二一	四、七六六	七、四七四	一四、四七〇
合計	一七、三五六	六、九六二	二四、三一八	三〇、一七七	八、一七	三八、三九四	六三、二一二	一五、一二	一三、五九六	二八、七二八	三四、九六三	八、八三三	一〇、五三二

◉現役並在郷軍人（明治四十三年四月一日現在）

區分	等級	現役						豫備役						後備役						補充						計					
	役別	將校		下士		兵卒		將校		下士		兵卒		將校		下士		兵卒		兵役		將校		下士		兵役		計			
		陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	計	
釧路町						三		二		四		七五		四		一九		六三		二三四		六		一〇		二七三		四〇三		四六六	
厚岸町						一		一				三〇				三		一四五		一三〇		一		三		一三五		二一二		二六三	
濱中村						一		三		三		三		一		二		五六		五六		一		一五		七六		一四九		一五八	
白糠外二村						一		三		三		三		一		三		一四		一〇		一		一五		七五		一四〇		一五四	
足寄外二村						二		一		三		一		一		一		五		二		一		一		三		一四		一五	
舌辛外三村						一		二		四		二七		一		一九		六三		二四		二		二		三七		一〇〇		一〇二	
合計						九		一二		一七		一四五		七		四七		一六三		一四三		一一		五二		一六六		四〇三		四一四	

| | | |

◉衛生

◉醫師藥劑師其他

（明治四十三年五月末日現在）

種別 / 町村別	醫師	藥劑師	製藥者	藥種商	賣藥者	産婆 本免許者	産婆 限地開業者	獸醫	蹄工
厚岸町	一	一		一	一	一			
濱中村	一	一		一	一	一			
白糠外二村	一	一		一	一	一			
足寄外三村	一	一		一	一	一			
熊牛外二村	一	一		一	一	一			
弟子屈外一村	一	一		一	一	一			
舌辛外三村	一	一		一	一	一			
鳥取村	一	一		一	一	一			
昆布森外二村	一	一		一	一	一			
太田村	一	一		一	一	一			
合計	一	一		一	一	一			
釧路町	三	三	一	二	八	四	一	一	三
厚岸町	三	二	一	二	一	二		一	

種別 / 町村別	醫師	藥劑師	製藥者	藥種商	賣藥者	産婆 本免許者	産婆 限地開業者	獸醫	蹄工
濱中村	四	一		一	一	一			
白糠外二村	四	一		一	一	一			
足寄外三村	一	一		一	一	一			
熊牛外二村	二	一		一	一	一			
弟子屈外一村	一	一		一	一	一			
舌辛外三村	二	一		一	一	一			
鳥取村	一	一		一	一	一			
昆布森外二村	一	一		一	一	一			
太田村	一	一		一	一	一			
合計	四三	六	一	一六	九	一五	四	七	五

◉鑛泉

（明治四十三年五月末日現在）

泉名	所在地	泉質	温度
浴用鑛泉	川上郡屈斜路村字跡佐登小字湯川	不詳	不詳
仝	阿寒郡舌辛村字オトンベツ	鹽類	不詳
仝	仝郡俗別村字オクルシユベ	冷鑛泉	攝氏一五度
仝	仝郡仝村字シアンヌ	仝	華氏五〇度
仝		仝	華氏一〇〇度

◉町村經濟

◉町村費

（明治四十三年五月調）

町村名	種別	歳入				歳出								一戸平均賦課額
		賦課額	其他	計		經常部				臨時部	計			
						役場費	教育費	土木費	勸業費					
釧路町		五三、三九一	五二、六四八	一〇五、八七七	円	一二、六八一	三五、九四八	三、七〇六	一、〇〇〇	円	一二、三九一	六、七四一	円	一、八七三
厚岸町		一五、七四四	一三、六〇八	二九、二八二		六、六〇七	九、六五九	六一三	三五〇		一七、二七九	八一三		一、八三
濱中村		八、六三一	一、四五五	一〇、一五六		一、八五五	五、七八一	三三〇	三六一		一〇、一五六	一、一七四		一、一三
白糠外二村		六、五九六	一、五八一	八、一七七			三、五六一	三五〇	三五		八、一七七	五、四一三		一、一三
足寄外三村		二、〇八一	八二五	二、九〇六			二、九〇六		二九		二、九〇六	五、二〇三		一、一三
熊牛外二村		一、六七八	三三七	一、九〇五			一、九〇五	三〇	三〇		一、九〇五	六、三六九		一、一三
弟子屈外一村		一、三三〇	二九一	一、五二一			九四三				九四三	二、三六		一、一三
舌辛外三村		三、一九三	四四五	三、六三八										
鳥取村		一、五一三	三四九	一、八六二			二、〇三九	四〇〇	一四		二、〇三九	四、〇七八		一、一三
昆布森外二村		二、四七七	二、七四	二、七四八			九六八	二七〇	三		一、八六二	六、三六八		一、一三
太田村		一、〇九八	一、二六三	二、三六一			一、四八八	三六	一〇		二、七四八	七、二七四		一、一三
計		九七、三九七、〇七九	四六、八四〇	一四三、二三七		一、七五五	二、三六一	三五〇	八		二、三六一	七、二七		一、一三
四十二年		八四、四六六、九三四	一五三、八一〇	一四三、二三七		一、七五五	二、三六一	三五〇	八		二、三六一	七、二七		一、一三
四十一年		八五、四五三、六五、七〇四	一五一、一五七	一四三、二三七		一、七五五	二、三六一	三五〇	八		二、三六一	七、二七		一、一三

備考　勸業費以外勸業補助費ハ四十一年ニ三九三圓四十二年ニ七六八圓四十三年ニ二一九圓アリ

町村別	種別	土地		建物		有價證券株券		預金貸金現金		漁場		價格計	財産ノ出スル收入
		反別	價格	坪數	價額	額面	價格	反別	價格	反別	價格		
釧路町		五六二、七四七、〇八一	円	二、八〇一	四三、六三四	円 一、〇〇〇	円 九五〇	三六	円 一二、九七二	四九	円 一四、五八三	七九、一四一	円 一、八七三
厚岸町		二五三	三九、〇六三	一、六五一	二〇、〇〇三	一、一五〇	三、九三五	一四	三、九六七	一	一、九七八	八一三	
濱中村		一五三	二、七九	九〇七	九、四〇〇	三、三五	一、二九六	一	一、五二	一	一、九七八	一〇、一五六	
白糠外二村		二〇七	二、〇五八	四三五	六、〇六九	一、四二五	一、二九六	一	一、五二	一	一、九七八	一〇、一五六	
足寄外三村		六	一〇〇	四八	九八	三五	二九三	一	一、五二	一	一、九七八	一〇、一五六	
熊牛外二村		二四四	五五七	一、四三〇	一、九三	五四五	五三	一	一、五二	一	一、九七八	一〇、一五六	
弟子屈外一村		六	四八	一、四三〇	一、九三	五四五	九七	一	一、五二	一	一、九七八	一〇、一五六	
舌辛外三村		二八	一五三	三、〇四	一二三	八五五	一、二九六	一	一、五二	一	一、九七八	一〇、一五六	
鳥取村		四〇六	三、六七七	一六一	一、五八五	三五五	四、八七	一	一、五二	一	一、九七八	一〇、一五六	
昆布森外二村		二三	五八三	三〇三	二、八六六	三五五	九九一	一	一、五二	一	一、九七八	一〇、一五六	
太田村		二八一	五九八	二六二	一、〇五〇	五、七二五	四、六九〇	一	一、五二	一	一、九七八	一〇、一五六	
計		二、六九七、九六一、六三一		七、一二	九一、二六〇	一六、八〇三	一四、八三	五一、〇八六		九三	二六、〇五九	一、八〇九、六四七	

◉町村基本財産

（四十三年三月末日現在）

國内面積ハ四百五十七方里ニシテ其段別七十二萬七百三十五町歩ナリトス内民有畑地八千八百九十一町四反歩國有未開地ニシテ畑目的ヲ以テ貸付シアルモノ一万一千八百四十七町九反歩計二萬七百三十九町

◉農業

◉農業狀況

三反歩ハ農耕目的地ト稱スベク其總面積ニ對スル割合ハ二割八歩ニシテ四十二年末迄ニ墾成セラレタルモノ畑九千三百十四町二反歩即チ農耕目的地ノ四割四分ヲ耕作セシニ過ギズ其開拓ノ起源ハ遠ク元祿年間ニ係レルモノヽ如キモ農業目的ノ爲メ圍休ノ來住ヲ見タルハ實ニ明治十七年ニシテ現時ノ鳥取村ナリトス而シテ本業ノ進運猶斯ル現況ニ在ルハ地味概シテ肥沃ナラサルト例年四月以降九月ニ亘リテコツク海ヨリ起ル海霧ノ襲來常ニ絶ヘザルカ爲メ農業ノ經營容易ナラザルニ基因ス

農業家ハ二千四百二十三戸ニシテ總戸數一萬百八戸ニ對シ僅ニ二割三分強ニ當レリ墾成地段別ハ農家一戸平均三町八段四畝歩ニシテ作付段別ハ二町二反三畝歩ナリトス其反當收得金額ハ五圓乃至十五圓ニシテ專業家ノ平年收得金額ハ四百圓內外ヲ往來セリ

主要農產物ハ馬鈴薯、大豆、燕麥、菜豆黍、蘿蔔等ニシテ其產額順位ヲ示セバ左ノ如シ

收穫高	價額	收穫高	價額	收穫高	價額
馬鈴薯 三、二四一、二一〇貫	一八、一八二圓	南瓜 一八、一三五貫	一、七八五圓	玉蜀黍 三、〇七一石	二、七五圓
大豆 九、五四六石	一四、七三〇	甘藍 三九、六一〇	一、九〇八	午蒡 一〇三、八一四貫	九、四九九
燕麥 三〇、八六三	一四、三七九	胡蘿蔔 二九、三〇八	九、三三	葱 六五、二四〇	九、三三
菜豆 六、四九六	三、四五	牧草 一、三七二	—	其他 —	四三、五五三
黍 九、六四四	二、五六二	蕎麥 三、〇七五	一、四五	合計	昭七五、〇三六
蘿蔔 一、四四一、八二	三七、六二	黍 三四、七〇	一、六〇		

農事ノ奬勵振作ニ關シテハ郡農會及町農村會ノ設置アリ茲ニ其概況ヲ記センニ釧路外五郡農會ハ明治三十四年國內八箇所町村農會ヲ以テ組織セリ三十八年十月ニ至リ農會令改正ノ結果會則其他ノ改正ヲ行ヒ常ニ國內農業改良發達ニ勉ム其事業ノ主ナルモノハ技術員ヲ置キ常ニ國內ヲ巡回セシメ直接農家ニ實地指導ヲ行ヒ又ハ農事講習講話ヲ開催シテ斯業ノ改良發達ヲ促シ或ハ優良種子ヲ配布シテ種子ノ改善ヲ謀リ試作場ヲ設置シテ耕作ノ範ヲ示シ或ハ害虫驅除豫防ヲ督勵セリ四十三年度ニ於ケル郡農會ノ經費ハ歲出總額千三十六圓四十九錢ニシテ事務所費百四十五圓事業費七百二十四圓ナリ

町村農會事業ノ概要ハ種苗配付、病虫害驅除、試作、種苗圃設置、種牡馬常置等ナリ

（明治四十二年末日現在）

◎町村農會

役場別	釧路町	厚岸町	白糠外二村	足寄外三村	弟子屈外一村	舌辛外三村	鳥取村	太田村	計
調査事項									
支出經費總額	二八四	一七九	一七八	八八	八	一九	一〇九	七五三	一、七九一
會費徵收額	一四七	八〇	八八	—	六七	三	三	四六	四八一
上級農會ニ對スル負擔	六三	四六	八二	三三	三七	六五	三八	三七	三九〇
會費賦課率	一名四十錢	一等九十五錢 七等十五錢	一名十四錢七厘	—	一反歩一錢四厘	一名十錢	一等二十六錢 二等二十錢 三等十四錢 四等八錢	一名二十五錢	—

△備考　濱中村、熊牛外二村、昆布森外二村取調事項ナシ

◎耕地段別及農家戸數

（明治四十一年末日現在）

町村名	耕作地反別						農業戸數		一戸平均耕作反別	
	白作		小作		計		專業	兼業		
	田	畑	田	畑	田	畑				
釧路町	一	五九二六反	一	八五四反	一	六七〇反	五〇	三二	二町九反	二町五反
厚岸町	一五二〇		二〇八三		三五八二		一三〇	一四七	二三九	
濱中村	一四五一		三一〇		一七二一		一五	五	八五	
白糠外二村	一、一四五六		七二五		一、九九一		三八三	一八七	三四三	
足寄外三村	三四六五		三四六三		六九九		一七八	三三	二六八	

町村名	大麦 作付反別	大麦 収穫高 石	大麦 価額 円	大麦 一反歩収量 合	裸麦 作付反別 反	裸麦 収穫高 石	裸麦 価額 円	裸麦 一反歩収量 合	小麦 作付反別 反	小麦 収穫高 石	小麦 価額 円	小麦 一反歩収量 合	豆 作付反別 反	豆 収穫高 石	豆 価額 円	豆 一反歩収量 合
釧路町	一七	一五	一五	一、〇〇	一五	一八	一八	一、二〇	五	四	四	八〇	一	一	一	一〇
厚岸町	一	一	一	一、〇〇	一	一	一	一、〇〇	一	一	一	一〇〇	一	一	一	一〇〇
浜中村																
白糠外二村	一五	一二	一二	八〇〇	一	一	一	一、〇〇	一九	一五	一三	七九〇	三	二	二	六六〇
足寄外三村	六	四	四	八〇〇	五	三	三	六〇〇	一四	一一	一〇	七八六	一	一	一	一〇〇
熊牛外二村	九	五	五	九〇〇	八	五	五	一、〇〇	一五	一一	一一	七三三	一	一	一	一〇〇
弟子屈外一村	一四	一三	七九〇	九〇〇	一二	一一	七〇〇	九〇〇	一五	一三	八〇〇	八六六	一	一	六〇〇	一〇〇
舌辛外三村	九	九	五三〇	一、〇〇〇	八	七	四三〇	八七五	一四	一二	七三三	八五七	一	一	六〇〇	一〇〇
鳥取村	一	一	五〇〇	一、〇〇〇	一	一	五〇〇	一、〇〇〇	一	一	五〇〇	一、〇〇〇	一	一	五〇〇	一、〇〇〇
昆布森外二村																
太田村	三	一八	一、五〇〇	一	一	一	一、〇〇〇	一	一	一	一、〇〇〇	一	一	一	一、〇〇〇	一
計	五四	四一	四、〇〇〇	一、〇〇〇	四	三	二、四〇〇	一、〇〇〇	四	三	二、四〇〇	一、〇〇〇	四	三	二、四〇〇	一、〇〇〇
四十一年	五四	四一	四、〇〇〇	一、〇〇〇	四	三	二、四〇〇	一、〇〇〇	四	三	二、四〇〇	一、〇〇〇	四	三	二、四〇〇	一、〇〇〇

◉農産物

其一　（明治四十二年）

町村名	大麦 作付反別 反	大麦 収穫高 石	大麦 価額 円	大麦 一反歩収量 合	裸麦 作付反別 反	裸麦 収穫高 石	裸麦 価額 円	裸麦 一反歩収量 合	小麦 作付反別 反	小麦 収穫高 石	小麦 価額 円	小麦 一反歩収量 合	豆 作付反別 反	豆 収穫高 石	豆 価額 円	豆 一反歩収量 合
釧路町	一七	一五	一五	一、〇〇	一五	一八	一八	一、二〇	五	四	四	八〇	一	一	一	一〇
厚岸町	一	一	一	一、〇〇	一	一	一	一、〇〇	一	一	一	一〇〇	一	一	一	一〇〇
浜中村																
白糠外二村	一五	一二	一二	八〇〇	一	一	一	一、〇〇	一九	一五	一三	七九〇	三	二	二	六六〇
足寄外三村	六	四	四	八〇〇	五	三	三	六〇〇	一四	一一	一〇	七八六	一	一	一	一〇〇
熊牛外二村	九	五	五	九〇〇	八	五	五	一、〇〇	一五	一一	一一	七三三	一	一	一	一〇〇
弟子屈外一村	一四	一三	七九〇	九〇〇	一二	一一	七〇〇	九〇〇	一五	一三	八〇〇	八六六	一	一	六〇〇	一〇〇
舌辛外三村	九	九	五三〇	一、〇〇〇	八	七	四三〇	八七五	一四	一二	七三三	八五七	一	一	六〇〇	一〇〇
鳥取村	一	一	五〇〇	一、〇〇〇	一	一	五〇〇	一、〇〇〇	一	一	五〇〇	一、〇〇〇	一	一	五〇〇	一、〇〇〇
昆布森外二村																
太田村	三	一八	一、五〇〇	一	一	一	一、〇〇〇	一	一	一	一、〇〇〇	一	一	一	一、〇〇〇	一
計	五四	四一	四、〇〇〇	一、〇〇〇	四	三	二、四〇〇	一、〇〇〇	四	三	二、四〇〇	一、〇〇〇	四	三	二、四〇〇	一、〇〇〇
四十一年	五四	四一	四、〇〇〇	一、〇〇〇	四	三	二、四〇〇	一、〇〇〇	四	三	二、四〇〇	一、〇〇〇	四	三	二、四〇〇	一、〇〇〇

◉農産物

其二　（明治四十二年）

町村名	燕麦 作付反別 反	燕麦 収穫高 石	燕麦 価額 円	燕麦 一反歩収量 合	大豆 作付反別 反	大豆 収穫高 石	大豆 価額 円	大豆 一反歩収量 合	小豆 作付反別 反	小豆 収穫高 石	小豆 価額 円	小豆 一反歩収量 合
釧路町	一〇	一四	一四	一四〇	一五	一八	一八	一二〇	一	一	一	一〇〇
厚岸町	三五	二、七〇〇	六、七五〇	一、九二	一五	一、一〇〇	二、七五〇	一、七六	一	一	二五〇	一、七六
浜中村												
白糠外二村	五五四	四、三七三	一〇、九三二	一、九五七	九〇	一、一〇三	二、七五二	一、二五六	一五	一一	二七五	一、二五六
足寄外三村	一四〇	一四〇	四八〇	一、〇〇〇	一四〇	一、六〇〇	五、四八〇	一、一四二	三四九	三九二	一、三四五	一、一四二
熊牛外二村	一二五	一七三	六三八	一、三八四	五九	六六〇	二、四三〇	一、一一七	一五	一六	五九〇	一、一一七
弟子屈外一村	二六八	五三三	一、五九九	一、九八〇	二六一七	四、九四四	一五、〇三四	一、八九二	三九三	四六三	一、四〇五	一、一七五
舌辛外三村	二、九六	七、二九〇	三、〇〇〇	一、九七	一、二〇三	二、九六一	一二、一九五	一、九七四	四一三	一、〇一六	四、一四〇	一、六五六
鳥取村	一四五	一四五	四四五	一、〇〇〇	一〇五	九九	三一五	九四三	一	一	三〇〇	九一八
昆布森外二村												
太田村	五〇〇	一、一〇〇	四、四〇〇	二、二〇〇	三〇	六六	二六四	一三二	九	二	八四	四二
計	一、八二七	一〇、六四二	三五、三三	一、九五七	四六〇	一、一九五	三、九五五	一、七〇六	三九三	四六三	一、四〇五	一、一七五
四十一年	一、八二七	一〇、六四二	三五、三三	一、九五七	四六〇	一、一九五	三、九五五	一、七〇六	三九三	四六三	一、四〇五	一、一七五

◉農産物

其一　（明治四十二年）

町村名	燕麦 作付反別 反	燕麦 収穫高 石	燕麦 価額 円	燕麦 一反歩収量 合	大豆 作付反別 反	大豆 収穫高 石	大豆 価額 円	大豆 一反歩収量 合	小豆 作付反別 反	小豆 収穫高 石	小豆 価額 円	小豆 一反歩収量 合
釧路町	一〇	一四	一四	一四〇	一五	一八	一八	一二〇	一	一	一	一〇〇
厚岸町	三五	二、七〇〇	六、七五〇	一、九二	一五	一、一〇〇	二、七五〇	一、七六	一	一	二五〇	一、七六
浜中村												
白糠外二村	五五四	四、三七三	一〇、九三二	一、九五七	九〇	一、一〇三	二、七五二	一、二五六	一五	一一	二七五	一、二五六
足寄外三村	一四〇	一四〇	四八〇	一、〇〇〇	一四〇	一、六〇〇	五、四八〇	一、一四二	三四九	三九二	一、三四五	一、一四二
熊牛外二村	一二五	一七三	六三八	一、三八四	五九	六六〇	二、四三〇	一、一一七	一五	一六	五九〇	一、一一七
弟子屈外一村	二六八	五三三	一、五九九	一、九八〇	二六一七	四、九四四	一五、〇三四	一、八九二	三九三	四六三	一、四〇五	一、一七五
舌辛外三村	二、九六	七、二九〇	三、〇〇〇	一、九七	一、二〇三	二、九六一	一二、一九五	一、九七四	四一三	一、〇一六	四、一四〇	一、六五六
鳥取村	一四五	一四五	四四五	一、〇〇〇	一〇五	九九	三一五	九四三	一	一	三〇〇	九一八
昆布森外二村												
太田村	五〇〇	一、一〇〇	四、四〇〇	二、二〇〇	三〇	六六	二六四	一三二	九	二	八四	四二
計	一、八二七	一〇、六四二	三五、三三	一、九五七	四六〇	一、一九五	三、九五五	一、七〇六	三九三	四六三	一、四〇五	一、一七五
四十一年	一、八二七	一〇、六四二	三五、三三	一、九五七	四六〇	一、一九五	三、九五五	一、七〇六	三九三	四六三	一、四〇五	一、一七五

◉農産物

其二　（明治四十二年）

◎農産物其四（明治四十二年）

町村名	蕎麥 作付反別	蕎麥 收穫高	蕎麥 價額	蕎麥 一反歩收量	玉蜀黍 作付反別	玉蜀黍 收穫高	玉蜀黍 價額	玉蜀黍 一反歩收量	豆 作付反別	豆 收穫高	豆 價額	豆 一反歩收量	薯 作付反別	薯 收穫高	薯 價額	薯 一反歩收量	馬鈴 作付反別	馬鈴 收穫高	馬鈴 價額	馬鈴 一反歩收量	菜 作付反別	菜 收穫高	菜 價額	菜 一反歩收量
	反	石	圓	合	反	石	圓	合	反	石	圓	合	反	石	圓	合	反	石	圓	合	反	石	圓	合
釧路町	一	一	一	一	一五	九〇	一、〇八〇	六〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
厚岸町	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
濱中村	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
白糠外二村	一五	九〇	一、〇八〇	六〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
足寄外三村	三〇	五四	三四〇	一、八〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
熊牛外二村	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
弟子屈外一村	一三	七	一、四〇	一、〇〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
舌辛外三村	九五	一二	一、七三〇	一、二〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
鳥取村	一八	九	一、二六〇	七〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昆布森外二村	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
太田村	二〇	一〇	一、四〇〇	七〇〇	一五	六〇	一、〇八〇	四〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	三二三	一七二	二、三五二	一、〇一八	一五〇	九〇	一、〇八〇	六〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四十一年	三三七	一七二	二、三五二	一、〇一八	一五〇	九〇	一、〇八〇	六〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

◎農産物其五（明治四十一年）

町村名	蕎麥 作付反別	蕎麥 收穫高	蕎麥 價額	蕎麥 一反歩收量	玉蜀黍 作付反別	玉蜀黍 收穫高	玉蜀黍 價額	玉蜀黍 一反歩收量	豆 作付反別	豆 收穫高	豆 價額	豆 一反歩收量	薯 作付反別	薯 收穫高	薯 價額	薯 一反歩收量	馬鈴 作付反別	馬鈴 收穫高	馬鈴 價額	馬鈴 一反歩收量	菜 作付反別	菜 收穫高	菜 價額	菜 一反歩收量
	反	石	圓	合	反	石	圓	合	反	石	圓	合	反	石	圓	合	反	石	圓	合	反	石	圓	合
釧路町	一	一	一	一	一五	九〇	一、〇八〇	六〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
厚岸町	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
濱中村	一六	一四	一、六九〇	一、〇〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
白糠外二村	一七四	二、三三三	二、四〇三	一、三〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
足寄外三村	八七〇	一、二九二	一、五七一	一、二〇〇	三	四	一八	一、五〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
熊牛外二村	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
弟子屈外一村	二	三	四五	一、五〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
舌辛外三村	一九九	二、五二二	二、五二一	一、二六〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
鳥取村	一五九	九九	一、二五三	六〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昆布森外二村	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
太田村	九五	三八	四九四、三一〇	五二〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	三五〇四	二、七五〇	二、三五、三〇五	一、一四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四十一年	三五〇四	二、七五〇	二、三五、三〇五	一、一四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

◎農産物其六（明治四十二年）

町村名	蕎麥 作付反別	蕎麥 收穫高	蕎麥 價額	蕎麥 一反歩收量	玉蜀黍 作付反別	玉蜀黍 收穫高	玉蜀黍 價額	玉蜀黍 一反歩收量	豆 作付反別	豆 收穫高	豆 價額	豆 一反歩收量	薯 作付反別	薯 收穫高	薯 價額	薯 一反歩收量	馬鈴 作付反別	馬鈴 收穫高	馬鈴 價額	馬鈴 一反歩收量	菜 作付反別	菜 收穫高	菜 價額	菜 一反歩收量
	反	石	圓	合	反	石	圓	合	反	石	圓	合	反	石	圓	合	反	石	圓	合	反	石	圓	合
釧路町	一	一	一	一	一五	九〇	一、〇八〇	六〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
厚岸町	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
濱中村	一六	一四	一、六九〇	一、〇〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
白糠外二村	一七四	二、三三三	二、四〇三	一、三〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
足寄外三村	八七〇	一、二九二	一、五七一	一、二〇〇	三	四	一八	一、五〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
熊牛外二村	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
弟子屈外一村	三	九	六一	二〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
舌辛外三村	一九八九	二、五二二	二、五二一	一、二六〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
鳥取村	一五九	九九	一、二五三	六〇〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昆布森外二村	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
太田村	九五	三八	四九四、三一〇	五二〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	三五〇四	二、七五〇	二、三五、三〇五	一、一四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四十一年	三五〇四	二、七五〇	二、三五、三〇五	一、一四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

◎牧畜及其他トモ計（明治四十二年）

町村名	作付反別	收穫高	價額	一反歩收量	作付反別	價額
	反	頭	圓	貫		圓
釧路町	一〇〇	八〇	八〇〇	一、〇〇〇	一〇、一〇	一〇、九〇七
厚岸町	一	一	一	一	一	一
濱中村	八〇〇	五六〇	五、六七〇	一、〇〇〇	六一、九	七六、六三〇
白糠外二村	四三五	二五六	二、一八	一、〇〇〇	四〇、〇	九一、七四一
足寄外三村	一五五	一三〇	一、三〇〇	一、〇〇〇	一一、九	一三六、八九二
熊牛外二村	一五五	一五〇	一、五〇〇	一、〇〇〇	一五、五	一九一、一四三
計	一、六四四	一、一四〇	一、四〇三、一〇〇	一、二三	一、三五、八	一、六九、九三三
四十一年	一、六四四	一、一四〇	一、四〇三、一〇〇	一、二三	一、三五、八	一、六七、九三三

弟子屈外一村	二三	四一	二三	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一
舌辛外三村	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
鳥取村	五五〇	二七五	三、一〇〇	三一〇	一二〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇
昆布森外二村	八〇	三五	三六〇	一〇八	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七
太田村	三一三	一、三七一	三、一四五	三一〇	一二	四二、九〇〇	一、三五	一八九、七五〇	二九五、七〇〇	三一〇	一〇八	一七	一七
計	三二四	一、五一九	三六〇	一一〇	一三	四二、九〇〇	一三五	一八九、七五〇	二九五、七〇〇	三一〇	一〇八	一七	一七
四十一年													

◉農産物其六（明治四十二年）

町村名	作付反別合計	價額合計	平均一反歩ノ収穫	價額	墾成耕地	墾成耕地拾町歩ニ付作付反別	價額	收穫高	桑園反別	掃立高	收繭高	價額
	反	円	円	円	反	反	円	石	反	枚	貫	圓
釧路町	一〇一〇	六二、九九〇	一〇、八九	六七、九〇〇	六七九〇	一、四七	一〇、四三五	二〇、〇四五	二七〇	四二、九〇〇	一三、一三〇	二〇、〇九三
厚岸町	六二九	三九、八七〇	一二、六二	七七、三〇〇	三九八二	一〇、〇〇〇	一、三二四三	二八八五	三八五	一三五、〇〇〇	四、六〇四	七、〇九三
中村	一一〇九	七〇、四三五	一七二	一〇五、〇〇〇	一、九五九一	六、二五二	七、九三〇	一九七四	一九〇	六六、五〇〇	一八、九九	二七、五八〇
白糠外二村	一五三四	一〇、四三五	八一六八	一二、五二五	八九三九	七、九三〇	九、〇三三	二八五九	二七〇	九五、〇〇〇	二六、六四	三八、五〇〇
足寄外三村	八〇七五	五、一三〇	六六二八	七、九〇〇	一五二三	一、八七	一、五二五	五三五	一九〇	六六、五〇〇	一八、九九	二七、五八〇
熊牛外二村	七三四	四、六〇四	六六二八	七、九〇〇	一五二三	一、八七	一、五二五	五三五	一九〇	六六、五〇〇	一八、九九	二七、五八〇
弟子屈外一村	二八五	一、九〇四	六六二八	七、九〇〇	一五二三	一、八七	一、五二五	五三五	一九〇	六六、五〇〇	一八、九九	二七、五八〇
舌辛外三村	二八五	一、九〇四	六六二八	七、九〇〇	一五二三	一、八七	一、五二五	五三五	一九〇	六六、五〇〇	一八、九九	二七、五八〇
鳥取村	二八五	一、九〇四	六六二八	七、九〇〇	一五二三	一、八七	一、五二五	五三五	一九〇	六六、五〇〇	一八、九九	二七、五八〇
昆布森外二村	二八五	一、九〇四	六六二八	七、九〇〇	一五二三	一、八七	一、五二五	五三五	一九〇	六六、五〇〇	一八、九九	二七、五八〇
太田村	一九四	一二、八〇〇	四七、〇〇〇	九五七九	一五二三	一、四七	一、三二四三	二八八五	二七〇	九五、〇〇〇	二六、六四	三八、五〇〇
計	一九四	一二、八〇〇	四七、〇〇〇	九五七九	一五二三	一、四七	一、三二四三	二八八五	二七〇	九五、〇〇〇	二六、六四	三八、五〇〇

◉蠶業狀況

國内ニ於ケル蠶業ハ甚ダ微々タルモノニシテ逐年減退ノ傾向ニアリ是レ本業ノ適セサルニアラスシテ野桑少ク桑園未タ設ケラレサルニアリ目下桑樹栽培ヲ奨勵中ナリ

◉蠶業（明治四十二年末日現在）

春蠶

町村名	種別	飼養戸數	掃立高	收繭高	價額
		戸	枚	貫	圓
釧路町		一八、九〇九	四七五、〇三六	一一八、九三五	二〇、〇四五
厚岸町		九五七九	二四〇、〇〇〇	六〇、九四三	一〇、三二四
中村		一	二、五〇〇	六三	一〇八
白糠外二村		四九二五	一二三、五〇〇	三一、〇九三	五二、六〇四
足寄外三村		一、一六七	二九、一七五	七、三四二	一二、四三五
熊牛外二村		二〇、四三五	五一〇、八七五	一二九、〇三三	二一九、五二五
弟子屈外一村		四、六〇四	一一五、一〇〇	二九、一六二	四九、五八〇
舌辛外三村		一、九六	四九、〇〇〇	一二、四〇五	二一、〇八五
鳥取村		一、九六	四九、〇〇〇	一二、四〇五	二一、〇八五
昆布森外二村		一、九六	四九、〇〇〇	一二、四〇五	二一、〇八五

町村名	種別	数量	価額
太田村			
四十一年			
四十二年			

◉林業

◉林業状況

國内ニ於ケル森林ハ豊富ニシテ木材ノ生産逐年増加シ殊ニ枕木ハ近來海外ニ輸出セラルヽモノ多キニ至レリ殖林トシテハ見ルヘキモノ拂ク僅ニ風防風致ノ必要上個人若クハ町村ニ於テ落葉松ヲ植栽セルモノアルニ過キス農家副業トシテ製炭ヲ爲スノ外椎茸培養ヲナスモノ漸次増加ノ趨勢ナリ

◉林産物

其一　（明治四十二年）

町村名	種別	丸及角材	挽材	船材	樺丸太	白楊丸太	銃床	早切本	柾	鐵道枕木	葦及莖	樹實
釧路町	数量	二〇、一〇〇	七、八〇〇									
	価額	三〇、二〇〇	五、二〇〇									
厚岸町	数量	四五、〇〇〇	三、三〇〇	七〇〇								
	価額	四〇、〇〇〇	一七、七五〇	一、七五〇								
濱中村	数量	一、六〇五	一、〇〇〇	九〇								
	価額	一、六〇五	一、〇〇〇	九〇								
白糠外二村	数量	五、一三三	六、九二五		七、四一六	二、六〇〇	二〇〇	一六	二、〇〇〇	一〇、六二六	五、〇〇〇	二四、〇〇〇
	価額	六、八〇〇	三、九二六		六、七二三	二、五五五	二〇〇	一六	二、〇〇〇	一〇、六二六	五、〇〇〇	二三、七五五

町村名	種別	笹	自然生蔬菜	下草	椎茸	諸菌類	石類	下駄材	獣皮	薪材	木炭	價額計
釧路町	数量		二〇〇					二五八		五五〇	六〇、〇〇〇	
	価額		二〇〇					一、三五七		七一五	三一、八五八	一〇七、一二八
厚岸町	数量							一、〇〇〇		四、五〇〇	二七、六〇〇	
	価額							一、五〇〇		七、二〇〇	二、三五二	一〇一、五七四
足寄外三村	数量	一、〇五三				七、六五二	四九、三〇〇					
	価額	八四二				五、三五二	一四、七〇〇					
熊牛外二村	数量	五〇〇										
	価額	六〇〇										
弟子屈外一村	数量	五〇、〇〇〇										
	価額	四〇、〇〇〇										
舌辛外三村	数量	五三、六〇〇	三、六〇〇	五〇〇	四〇〇	九〇〇	七五〇					
	価額	四二、六〇八	二、六〇〇	七五〇	四〇〇	七〇〇	七五〇					
鳥取村	数量											
	価額											
昆布森外二村	数量	八、〇〇〇	三、〇〇〇	二八〇								
	価額	五、六〇〇	一、〇〇〇	二五二								
太田村	数量	六〇〇		五〇								
	価額	七二〇		二〇								
計	数量	二三一、五一二	四五、九二〇	一、六一〇	八〇一六	二、一〇六	五〇、〇五〇	一、五七〇	五三、七六〇	二〇、二六二	一五〇	五〇
	価額	三二八、〇九五	三一、五五七	一、〇三二	七、一五二	一四、七九〇	一五、一六五	一、五五〇	三、五〇〇	二一、四二八	一五	四〇

町村名	所有者	樹苗圃箇所数	樹苗圃坪数	樹苗圃代価	備考
濱中村	公	一	三、〇〇〇	三、〇〇〇	
白糠村	公	二	三、〇〇〇	三、〇〇〇	
外二村	公	一	二、八〇〇	二、八〇〇	
足寄村	公	一	一、九一〇	一、九一〇	
外三村	公	一	一、九一〇	一、九一〇	
熊牛村	公	一	一、九一〇	一、九一〇	
外二村	公	一	一、九一〇	一、九一〇	
弟子屈村	公	一	一、九一〇	一、九一〇	
外一村	公	一	一、九一〇	一、九一〇	
舌辛村	公	一	一、九一〇	一、九一〇	
外三村	公	一	一、九一〇	一、九一〇	
鳥取村	公	一	一、九一〇	一、九一〇	
昆布森村	公	一	一、九一〇	一、九一〇	
外二村	公	一	一、九一〇	一、九一〇	
太田村	公	一	一、九一〇	一、九一〇	
計	公	一五	二八、七一〇	二八、七一〇	

（明治四十二年末日現在）

三八

◉畜産

◉畜産狀況

國內山野ノ狀態ハ到ル處牧畜ニ好適シ之カ經營ヲ爲ス者多ク加フルニ農業經營ノ要素トシテ飼畜ノ必要ハ一般ノ認ムル所トナリ農家トシテ蕃殖用牝馬ヲ飼養セサルモノ稀ナルノミナラス主ナル畜産家ハ不良家畜ノ淘汰改良ニ努メ年々純血種畜ヲ移入シ來リ又ハ北海道廳ヨリ優良種ノ貸付ヲ受ケ以テ優良家畜ノ蕃殖ヲ謀ルニ至リ近來優良家畜ノ數漸次增加シ國外ノ需用ニ應スルモノ其數少ナシトセス就中豊嶋牧場三田牧場藤野牧場等ハ其規模大ニシテ事業ノ成績見ルヘキモノ多シトス

釧路產牛馬組合ハ三十九年八月ヲ以テ創設ス其事業ノ主ナルモノハ種牡牛馬ヲ各町村ニ配置シ組合員ノ牝牛馬ニ交配セシメ或ハ每歲競場ヲ開催シテ賣買ノ仲介ヲナシ又ハ放牧場ヲ設ケ組合員ノ牛馬ヲ自由ニ放牧セシメ亦ハ馬匹畜產競馬等ノ諸會ヲ開催スル等畜產改良上ニ勉ムル所アリ爲メニ創設年淺キモ斯業ノ發展ニ資セシ所ノモノ少ナカラス各組合ハ現今種牡馬十八頭種牡牛七頭ヲ有セリ

◉馬匹數

（明治四十二年末日現在）

町村名	種別	洋種			雜種			內國種			合計		
		牝	牡	計	牝	牡	計	牝	牡	計	牝	牡	計
釧路町		一六	五	二一	二六五	一四	二七九	一、〇九八	七一五	一、七九三	一、三九九	八九五	二、二四
厚岸町		六	三	九	一四〇	八二	二二二	四七九	二三三	七二	六二九	三二七	九四六
濱中村		六	三	九	一八八	五〇四	一、七二	一、七二	一、四九三	一、七五	一、四九三	七五五	二、二四八
計		二八	一一	三九	六一四	二四四	八五八	三、二五一	一、一二八	四、三七九	四、〇四三	一、三八三	五、四二六

二〇、六二〇
二〇、八三五

◉牛畜數（明治四十二年末日現在）

町村名	洋種牡	雜種牡	計	內國種牡	合計牡
釧路町	九	三	一二		一二
厚岸町	二	九	一一		一一
濱中村		四	四		四
白糠外二村		一三	一三		一三
足寄外三村		一一	一一		一一
熊牛外二村		六	六		六
弟子屈外一村		一	一		一
舌辛外三村		三	三		三
鳥取村		一	一		一
昆布森外二村		三	三		三
太田村		一	一		一
計	一一	四五	五六		五六
釧路町	一	一	二		二
厚岸町	一	一	二		二
濱中村		一	一		一
白糠外二村		一	一		一
足寄外三村		一	一		一
熊牛外二村		一	一		一
弟子屈外一村		一	一		一
舌辛外三村		一	一		一
鳥取村		一	一		一
昆布森外二村		一	一		一
太田村		一	一		一
計	二	一一	一三		一三
釧路町	一一	一一	二二		二二
厚岸町	一	一一	二二		二二
濱中村		一	一		一
白糠外二村		一	一		一
足寄外三村		一	一		一
熊牛外二村		一	一		一
弟子屈外一村		一	一		一
舌辛外三村		一	一		一
鳥取村		一	一		一
昆布森外二村		一	一		一
太田村		一	一		一
計	二	一一	一三		一三
釧路町	一一	一一	二二		二二
厚岸町	一	一一	二二		二二
濱中村		一	一		一
白糠外二村		一	一		一
足寄外三村		一	一		一
熊牛外二村		一	一		一
弟子屈外一村		一	一		一
舌辛外三村		一	一		一
鳥取村		一	一		一
昆布森外二村		一	一		一
太田村		一	一		一
計	二	一一	一三		一三
釧路町	一一	一一	二二		二二
厚岸町	一	一一	二二		二二
濱中村		一	一		一
白糠外二村		一	一		一
足寄外三村		一	一		一
熊牛外二村		一	一		一
弟子屈外一村		一	一		一
舌辛外三村		一	一		一
鳥取村		一	一		一
昆布森外二村		一	一		一
太田村		一	一		一
計	二	一一	一三		一三
釧路町	一一	一一	二二		二二
厚岸町	一	一一	二二		二二
濱中村		一	一		一
白糠外二村		一	一		一
足寄外三村		一	一		一
熊牛外二村		一	一		一
弟子屈外一村		一	一		一
舌辛外三村		一	一		一
鳥取村		一	一		一
昆布森外二村		一	一		一
太田村		一	一		一
計	二	一一	一三		一三

◉鷄數（明治四十二年分）

調查事項 / 役場別	飼養家數					產卵數		
	十羽未滿	五十羽未滿	百羽未滿	百羽以上	計	成禽	雛	計
釧路町	二五五	一二五	一四		三九四	一、八五五	四、九四九	二、六二九
厚岸町	一二五	一三	四		一四二	八九五	一、七四五	九四〇
濱中村	三四〇	一四七			四八七	一、三〇三	二、八四八	一、三九二
白糠外二村	二〇一	一五五	一〇		二六六	一、〇五三	二、三七九	一、三二六
足寄外三村	三六	一〇	二		五八	二〇五	三八一	二四一
熊牛外二村	四五	一〇	四		六九	三八〇	七四八	四六二
弟子屈外一村	一〇一	七	二		一一〇	五一〇	一、三五〇	一、八六〇
舌辛外三村	三六	五			四一	二〇五	四〇〇	二四五
鳥取村	九一	七			一六	七四	一七一	二四五
昆布森外二村	一三一	一四	二		一四七	七四九	一、四三二	二、一八一
太田村	四四	三			四七	二四〇	四六〇	六八〇
計	一、一五五	三四〇	四一		一、五三六	五、八五五	一〇、〇〇〇	一五、八五五
釧路町	一二五	一四	一		一四〇	六三九	一、二九一	一、九三〇
厚岸町	一一五	一三	一		一二九	五九〇	一、一八三	一、七七三
濱中村	三一四	一七	一		三三二	一、五一九	三、〇五一	四、五七〇
白糠外二村	一九八	一四	一		二一三	九七五	二、〇〇二	二、九七七
足寄外三村	八六	一一			九七	四四五	九一〇	一、三五五
熊牛外二村	一四〇	一三			一五三	七〇〇	一、四三五	二、一三五
弟子屈外一村	一九八	一四	一		二一三	九七五	二、〇〇二	二、九七七
舌辛外三村	八六	一一			九七	四四五	九一〇	一、三五五
鳥取村	一四〇	一三			一五三	七〇〇	一、四三五	二、一三五
昆布森外二村	一九八	一四	一		二一三	九七五	二、〇〇二	二、九七七
太田村	八六	一一			九七	四四五	九一〇	一、三五五
計	一、一五五	三四〇	四一		一、五三六	五、八五五	一〇、〇〇〇	一五、八五五
釧路町	一二五	一四	一		一四〇	六三九	一、二九一	一、九三〇
厚岸町	一一五	一三	一		一二九	五九〇	一、一八三	一、七七三
濱中村	三一四	一七	一		三三二	一、五一九	三、〇五一	四、五七〇
白糠外二村	一九八	一四	一		二一三	九七五	二、〇〇二	二、九七七
足寄外三村	八六	一一			九七	四四五	九一〇	一、三五五
熊牛外二村	一四〇	一三			一五三	七〇〇	一、四三五	二、一三五
弟子屈外一村	一九八	一四	一		二一三	九七五	二、〇〇二	二、九七七
舌辛外三村	八六	一一			九七	四四五	九一〇	一、三五五
鳥取村	一四〇	一三			一五三	七〇〇	一、四三五	二、一三五
昆布森外二村	一九八	一四	一		二一三	九七五	二、〇〇二	二、九七七
太田村	八六	一一			九七	四四五	九一〇	一、三五五
計	一、一五五	三四〇	四一		一、五三六	五、八五五	一〇、〇〇〇	一五、八五五

◉鷲牧場數

（明治四十二年分）

調査事項 / 役場別	飼養家數 十羽未満	五十羽未満	百羽未満	百羽以上	計	成禽家數	雛家數	計	産卵個數	産卵價額	成禽價額
釧路町	八	六	二	一	一四	一〇	三	五	一、九一〇	五	九六
厚岸町	六	二	一	一	一〇	三	一	三	七五〇	一九	一九
濱中村	二	一	一	一	五	二	一	三	一一〇	六	四
白糠外二村	六	二	一	一	一〇	二	一	三	一一〇	六	四
足寄外三村	一	四	五	一	一一	二	一	三	一一〇	六	四
熊牛外二村	一	四	五	一	一一	二	一	三	一一〇	六	四
弟子屈外一村	一	四	五	一	一一	二	一	三	一一〇	六	四
舌辛外三村	一	四	五	一	一一	二	一	三	一一〇	六	四
鳥取村	一	四	五	一	一一	二	一	三	一一〇	六	四
昆布森外二村	一	四	五	一	一一	二	一	三	一一〇	六	四
太田村	一	四	五	一	一一	二	一	三	一一〇	六	四
計	三六	二六	一	一	六九	二四	三	三〇	五、三〇	一三九	九六
四十二年	三六	二六	一	一	六九	二四	三	三〇	五、三〇	一三九	九六

（明治四十二年末日現在）

◉農牧場

名稱	所在地	反別	牧畜場主氏名 牛	馬
鳥取共同牧場	釧路郡鳥取村字ピラトマナイ	二七二、町 四二	津村外二十六名共同 一八〇	
釧勝興業株式會社釧路牧場	釧路郡釧路町大字釧路村字別保トリトウシ、床丹	六二一、〇七〇一	釧勝興業株式會社 四六	
木村牧場	釧路郡釧路町大字釧路村字セチリ太	二〇四、四二八	木村新之助 四	
三友牧場	全郡全町大字釧路村字ムサ	六三八、二七〇四	富村茂三郎 九〇	
神牧場	全郡全町大字全字天寧	一〇〇、〇〇〇	神八三郎 二六	
山口牧場	全郡全町大字全字タッコプ	二〇〇、六二〇三	山口和吉 五	
坂本牧場	全郡全町大字全字遠野	三三六、〇七〇〇	坂本彌太郎 一〇	
村田牧場	全郡全町大字全字トリトウシ	三三、七四〇八	村田清太郎 一六	
東京牧場	全郡全町大字全字タッコプ全郡全町大字全字トリトウシ原野	七八〇、〇七二七	杉田休太郎外二名共同 四四	
前田牧場	全上	四七二、七三三	前田榮次郎 二〇	
豊島牧場	釧路郡仙鳳趾村	二四四、二一〇七	豊島庄作 一〇〇	
柳田牧場	厚岸郡太田村	二、八〇二、一〇一二	柳田豊 九四	
宮川牧場	全郡厚岸町大字古多村字ライベツ	六三、五二〇三	宮川太郎外一名共同 四五	
中野米藏外三名組合牧場		七九九、〇二〇八	中野米藏外三名共同 一〇	

小松牧場	全郡全町大字眞龍村	一九四、四六二三	一	一〇	小松鉄次郎	
山田牧場	全郡全町大字斉渡村字イクイラウシ	二四一、六二三	一五	一五	本多千之助外二名共同	
藤永牧場	全郡全町大字眞龍村	一三、四六二八	一三	一七	藤永仁助	
菊池牧場	全郡全町大字別寒邊牛村	二、四五六、四五〇四	四〇	一五	横尾忠右衛門外三名共同	
長谷川牧場	全郡太田村字サッテベツ	三三七、〇九三	六八	一八	長谷川末吉	
全	全郡別寒邊牛村字チライカリベツ	三三、一六二〇	一〇	一一	長谷川キク	
久我牧場	全郡全村字大別	六三一、三六二〇	一	二〇	久我省三外一名共同	
後藤牧場	全郡全村	一七、四五六	一二	四四	後藤徳太郎	
上野牧場	全郡全町大字苫多村字尾幌	一八一、七九一五	一五	一六	上野初太郎	
山崎牧場	全郡全町大字苫多村字オポロマップ	六八五、六六二五	三四	一〇	山崎兵次郎	
高橋牧場	全郡全町大字苫多村字オポロマップ全	三七〇、〇六二〇	五	三三	高橋彌太郎	
苫多村共同牧場	全郡全町大字奔渡村字イクイラウシ	二〇一、七八二一	一	四〇	糀谷七左衛門外二十名共同	
中島牧場	全郡全町大字苫多村字尾幌	一九、四〇〇九	二五	一一	中島作二郎	
小川牧場	全郡濱中村大字濱中村字熊牛原野	一六八、七〇〇三	一	六八	小川善三郎	
山田牧場	全郡全村大字苫多村字尾幌牛原	一四五、〇八一七	七	八	山田岩松	
柴田牧場	全郡全村大字琶琵瀬村字茶内	三二、八〇三	一	三五	柴田伊勢松	

松村牧場	全郡全村熊牛原野	六九、四三一〇	一	四〇	松村留次郎	
田鎖牧場	全郡全村大字後静村	一三、四四一、九	三	一	田鎖倉治	
大竹牧場	全郡全村大津浴澤	一六一、八三一八	三六	一〇	大竹勘兵衛外一名共同	
山田牧場	全郡全村六番澤	二六四、三三〇四	四六	四一	山田定次郎	
吉田牧場	全郡全村熊牛原野	二〇、〇〇〇	二	二	吉田毎太郎	
五味牧場	全郡全村全原野	二九、六六一〇	二	四	五味兼吉	
若山牧場	全郡全村大字濱中村字走古潭	四六、〇六一四	三	一四	若山嘉北	
細越牧場	全郡全村熊牛原野	三〇、〇〇〇	二	一七	細越長次郎	
加藝牧場	全郡全村大字後静村	六一、八五四	二	六	加藝長吉	
岩谷牧場	全郡全村大字散布村字火散布	三七、五二五	一九	四六	岩谷倉治	
向井牧場	全郡全村大字琶琵瀬村字ポン三番澤	三五、三六一九	二	一〇	向井藤四郎	
出口牧場	全郡全村大字後静村熊牛原野	一〇五、九二六	二	八七	出口兵五郎	
三田牧場	全郡全村大字全字惠茶人	三三、三三一	二	一三	三田道治郎	
中田牧場	全郡全村大字全熊牛原野	二九、四八一〇	二	一九	中田亜太郎	
共有牧場	白糠郡庶路村字大樂毛	一五五、九〇二	一	一六	大内松次郎外十四名共同	
辻牧場	全郡全村字マサルカ	四一〇、〇〇〇〇	一	八二	辻万次郎外一名共同	

中戸川牧場	全郡全村字大楽毛	四〇二、四五〇四	一〇六	三八	中戸川吉二	
佐々木牧場	全郡全村字マサルカオマプ	一三五、八四三	一〇七	一〇	佐々木與兵衛	
藤野牧場	全郡全村字鹿路	四一〇、六一三	一九	三	藤野四郎兵衛	
高谷牧場	全郡全村字ヤムワッカナイ	三三一、六一九	三	六	高谷長次郎	
三上牧場	全郡全村字チプタナイ	三一、八九一六	一	五	三上喜作	
山口牧場	全郡全村字全	二九、九二一七	一	七	山口半右衛門	
鹿路豊島牧場	全郡全村字鹿路	三三三、三三〇〇	一	一七	豊嶋庄作	
内藤牧場	全郡全村字コイトイ	一二九、四八〇三	一	三五	内藤東吉	
鹿島牧場	全郡尺別村字尺別	八〇四、七六一四	一	七毛	鹿島外一名共同	
三富牧場	全郡全村尺別原野	一四、五〇〇五	一	八	三富也一郎	
吉村牧場	全郡全村全	二七三、一三二五	一	三	吉村重九郎	
日下牧場	全郡全村字音別	三一四、四〇〇九	一	一〇	日下豊吉	
大井牧場	全郡全村字全	九五五、〇六〇九	一	九	柴原外二名共同	
岡田牧場	全郡全村字尺別	七七七、五九一三	三	一六	岡田外二名共同制	
今泉牧場	全郡全村字直別	二六六、八〇一六	五	五	今泉源一郎	
今音別泉牧場	全郡全村字音別	三六六、四〇〇〇	一	三	今泉条吉	

大塚牧場	全郡全村	三〇〇、二六〇八	一	二九	加藤新治外四名共同	
佐藤牧場	白糠郡尺別村字音別	一〇三、一〇一五	二	五四	佐藤石太郎	
山野川牧場	全 全	三三一、五七一九	二〇	一	宮田直次郎	
若木牧場	川上郡熊牛村字オソツベツ原野	三一一、一五〇九	六	一三	若木忠八	
登オンド牧場	全 郡弟子屈村字ピルワ原野	三一三、二九〇〇	一七	六	福井清一	
清水牧場	足寄郡陸別村字トマム	三三八、八九〇九	八〇	一	清水役藏	
細川牧場	全郡足寄村字カカルスナイ	三三八、〇五二九	一	四五	細川エン	
三木牧場	全郡陸別村字トマム	三三七、八四一五	一	一〇九	三木與吉郎	
柳澤牧場	全郡足寄村字オサルンナイ	二〇〇、三八一九	一	二六	柳澤治作	
大久保牧場	全郡陸別村字トマム	三三三、九五〇〇	一	一五	大久保溪平	
谷崎牧場	全郡全村字陸別	三三七、八四一五	一	三	谷崎寛一	
神河牧場	全郡利別村字上利別	三三三、二八一〇	一	三	神河庚藏	
田中牧場	全郡陸別村字トマム原野	二四八、八〇〇三	一	三六	田中與兵衛	
大野牧場	全郡足寄村字足寄太	九三、八六二〇	一	一四	大野小三郎	
澁田牧場	全郡全村字足寄	三三、〇一二	一	一〇	澁田榮次郎	
村木牧場	全郡全村字全	一〇三、七五一四	一	三五	村木善太	

前田牧場	阿寒郡舌辛村字舌辛	三五、六八〇	〃	元	前田十彦
佐々木牧場	仝	三三、一五〇〇	〃	宅	佐々木松三郎
武隈牧場	仝	三〇、六二九	〃	三三	武隈豊次郎
小泉牧場	仝	二五四、三〇五	〃	四五	小泉軍右衛門
田中牧場	仝	三三、二五〇	〃	三九	田中作二郎
赤根牧場	仝	一三五、〇〇〇	〃	三七	赤根龜吉
一歩園牧場	仝	二、〇一一、七三五	〃	三三	前田正名
尾幌農場	厚岸郡尾幌原野	五〇三、八七八	〃	〃	村外一名 林謙吉共同
百戸農場	白糠郡茶路原野	三五、三一三	〃	〃	岡田小三次
大野農場	仝 郡庶路村庶路原野	二四三、六四三五	〃	〃	大野勘逸
青山農場	阿寒郡舌辛村ツチヨロ原野	九一、六八八	〃	〃	青山與右衛門

◉鑛業

◉鑛業狀況

國內ニ於ケル鑛產物ハ石炭硫黃トス四十二年ニ於ケル總產出價額ハ二十万六千三百二十四圓ニシテ石炭ハ府縣ニ輸出スルノ外滊車滊船ノ需要ニ應セリ硫黃ハ兵庫ニ輸出ヲ試掘ニ係ル鑛物ノ種類鑛區坪數ヲ掲クレバ金銅一鑛區四十二万坪石油一鑛區五十一万一千七百九十坪石炭二十二鑛區一千二百五十六万二千八百四十七坪ニシテ採掘ニ係ル石炭ハ二十個所八百六十三万九千四百三十四坪硫黃四個所二十三万五千二十二坪ニシテ總坪數二千二百三十六万九千九十二坪ノ多キニ及ヘルヲ以テ漸次良礦ノ發掘ヲ見ルニ至ラン

◉鑛產物

（明治四十二年）

種別	町村	數量	價額
石炭	釧路町舌辛村	四〇、一六三噸	一九、五七四圓
	熊牛村	二、五〇〇	八、七五〇
	計		一九、五七四圓
硫黃	熊牛村	一〇〇、〇〇〇斤	四二、六六二圓
	計	一〇〇、〇〇〇	二〇五、三三圓
仝	熊牛村	一、〇〇〇	一〇〇
仝	計	一、〇〇〇	二〇五、三三圓

◉水產

◉水產狀況

國內ニ於ケル主ナル漁業地ハ釧路、白糠、厚岸、霧多布ニシテ漁獲物ハ鰊、昆布、鱈、鮭、鱒、鮪、目拔鯛其他雜魚等ナリ漁業場所ハ孰レモ地先ノ沿海ニシテ二半船、明海船、持符船、川崎船、磯舟等ノ漁船ニヨリ建網曳網、刺網、延繩類ヲ使用シ漁業ヲ營メリ近時勃興セシ漁業ハ鰊ノ揚繰網ニシテ其漁法ハ進取的ニテ魚群ヲ瞰所ニ驅ルノ便アリ其收益多キヲ見ルニ至ルヤ當業者ハ之レカ經營ヲ競ヒ四十二年中同漁業ノ許可ヲ

請フモノ頗ニ數百件ノ多キニ及ヒタリシモ公益保持漁類蕃殖ノ爲メ九十統ニ制限許可セル其一統ニ對スル漁獲ハ最多七百石最少百五十石ニシテ平均三百石内外ナリシ其他沖合ニ發展セシモノハ鮪鰊ノ流網鰯目拔鯛ノ延繩漁業ニシテ從業者ハ孰レモ釧路川尻ノ沿岸ヲ根據地トシ風力ヲ利用シ沖合十四五里ノケ所ニ出漁セリ其成績ハ極メテ良好ニシテ漸次從業者增加ノ趨勢ニアリ製造品ノ重ナルモノハ食料品トシテ鮭鱒ノ塩藏鰛鰊鰊ノ乾製、蟹鱒ノ罐詰、昆布肥料品トシテハ鰊、鰈、雜魚等ノ搾粕トス生鮮ハ鮪、目拔鯛藻魚等ニシテ靑森函館ニハ漁船札幌以東鐵道沿線ノ各部ヘハ漁車ヲ以テ輸送セリ其荷造ハ冬季ヲ除クノ外概ネ氷藏トセリ

四十二年水產總價額ハ六十五萬弐千五百四十七圓ニシテ之ヲ魚種ニ大別スレハ鰊四十五萬二千四十九圓昆布四萬七千五十八圓其他十五萬三千四百四十圓ナリトス

◉免許漁業數

（明治四十二年末日現在）

漁業名稱	本年免許數	更新數	消滅			休業數	十二月末日現在
			權利拋棄	取消			
鮭定置網							
鰊刺網	四						四
鰊大謀網							
鰮刺網		一					一
鰯地曳網							
鮭地曳網							
鱒地曳網							
鰈地曳網							
白魚地曳網							
旋網							
建網							
牡蠣養殖							
介類養殖							
計	四	一					五

◉許可漁業數

（明治四十二年末日現在）

漁業名稱	本年許可數	廢業數	失效數	取消數	十二月末日現在
鰊刺網	三七〇	三七	一、二三六	三	二九一、四六六
鰊長刺網	三七〇	二	五四〇	一	二〇三、五三三
鰊旋網	二二	二	一	一	四四
鰊引揚場ヲ有セサル地曳網	四四	四			四四

◉自由漁業數

（明治四十三年五月調）

漁業名稱	營業網數	營業者	從業者
鰊手操網	三三	一九	一九
鰊手操網	五五	五	一〇〇
氷下待網	三五	一	一〇〇
鮭空釣	一	一	一
蟹採取	四〇〇	四〇	四〇
牡蠣養殖	一一	一一	一一
雜魚手操網	三三	一九	一九
計	三、二六六	一、四三〇	一、三二〇

漁業名稱營業網數營業者從業者

（明治四十三年五月調）

漁業名稱	營業網數	營業者	從業者
鰊手操網	一二	一二	一二
鰊手操網	一三	一三	一三
鮭刺網	一八	一八	一八
鱒延縄	三三	三三	三三
北寄八尺網	一八	一八	一八
扇八尺網	一	一	一
海鰊刺網	一	一	一
計	八二四	八二四	八二四

◉水産物生賣

（明治四十二年）

町村別	鮭 生賣高	鮭 價額	鮭鱒 生賣高	鮭鱒 價額	鱒 生賣高	鱒 價額	鮪 生賣高	鮪 價額	鰷 生賣高	鰷 價額	鰈 生賣高	鰈 價額	比目魚 生賣高	比目魚 價額	目抜鮹大鮃其他 生賣高	目抜鮹大鮃其他 價額	合計 生賣高	合計 價額
釧路町	二五石	二二〇	一五〇五、二五〇	七八八	四六四三、九三	一、四五〇	四〇〇五、六五〇	二五〇	二五〇	一、五〇〇	二三	七八八	四六四三、九三	一、四五〇	一七、八五四	二七、八五四		
厚岸町	三〇〇	九〇〇	九	一〇〇	一五	一五〇	一	一五〇	一五〇	六〇〇	七〇	二四五	七五三、三八二	一、二九〇	四、三七七	一〇、七一〇		
濱中村	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三〇	三七五	一〇〇	二五〇	六三五	一、〇〇〇		
昆布森村	一〇	五〇	七	九〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一〇、七	一四〇		
白糠村	一〇	六〇	八	三〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	四九、八	二八一		
明治四十一年	三三一、七三	一〇五三、〇七一	一三五、二五〇	五〇	四六四三、九三	一、四五〇	四〇〇五、六五〇	二五〇	二五〇	一、五〇〇	二三	七八八	四六四三、九三	一、四五〇	一七、八五四	二七、八五四		
明治四十年	三六七、五三、〇七三	一二三、四四七	五〇	四六四	九七三、八三五	一、八三七、五一三、五九四												

◉水産物製造其一（明治四十二年）

町村別	數量	食製品 乾鮑	節鰹	鰤	鱒	其他	鹽藏品 鮭	鱒	其他	肥料 採柏鰊	雜類	其他	海藻類	魚油	鰮油
釧路町	數量														
	價額														
厚岸町	數量														
	價額														
濱中村	數量														
	價額														
昆布森村	數量														
	價額														
白糠村	數量														
	價額														
合計	數量														
	價額														
明治四十一年	數量														
	價額														
明治四十二年	數量														
	價額														

其二

◉水産業家（明治四十二年末日現在）

種別 / 年次業別	主業 戸數	人口	兼業 戸數	人口	計 戸數	人口
漁業						
採藻業						
製造業						
計						

◉漁業入出稼

年次	入稼漁夫	出稼漁夫	備考
四十一年	一、六五二	一、三五〇	
四十年	一、六六一	七、三九	

（明治四十二年）

種別	入稼漁船	入稼漁業	入稼漁夫	出稼漁船	出稼漁業	出稼漁夫
鰊	三〇	七五	六、四八一	一	一	五〇
鮭	一	一	四六九	一	一	二五
昆布	一	一	一、三〇	一	一	二五
鰹	一〇	一五	三八九	一	一	一五
鮪	一三〇	九五	九、一一五	一	一	一五
計	一三〇	九五	九、七三五	四	四	一〇
四十一年	一三〇	九五	一〇、七五	四	四	一〇
四十二年	一三三	九五	九、七三五	四	四	一〇

（明治四十二年）

種別	三半船形	川崎船形	磯船形	計
漁船	一三三	四八	一、八五九	二、一四〇
漁業	五七	二五	二、三七二	二、四五四
漁夫	四三五	二三五	一、九四〇	二、六七〇

◉漁網及從業者

（明治四十二年）

町村別	鰊建網	鰊旋網	鰊地曳	鰊長刺	鰊從業者	鮭建網	鮭地曳	鮭從業者	鱒建網	鱒地曳	鱒從業者	雜魚雜魚建網	雜魚雜魚地曳	雜魚昆布採取具	雜魚其他	雜魚從業者	手繰網
釧路町	三三	三三	一五	五七八	一、四五〇	一三	一〇	九五	一	一	一	二〇	一	二九	一、二〇五	二〇五	一
厚岸町	一七	二	五〇	一、一〇五	一、六五〇	二	一	二〇	一	一	一	四〇	三	六三	二、〇八二	一五〇	一
浜中村	三	二九	四〇	四五六	二、〇一〇	一五	一	一五	一	一	一	一三	三	九四三	一、〇八一	一五〇	一
昆布森村	八	一	二	二九四	七〇〇	六	一	六五	一	一	一	七二	四	一〇	一、四九五	八九	一
白糠村	二六	三	一	一	一、〇二五	七	一	六〇	一	一	一	一四	四	一	二、〇八二	一、〇九	一
合計	六六	九四	二七	二、五三三	六、八三五	四三	一〇	三四五	一	一	一	一四	一四	一	二、〇八二	一、〇九	一
四十一年	一〇四	一	二六	二、八四七	七、七五〇	五〇	一	一、〇五八	一	一	一	一五	一四	一	二、〇八二	一、〇九	一
四十年	一〇四	四	二六	三、六四五	六、一〇五	五七	一	一、〇八三	一	一	一	一五	一四	一	二、〇八二	一、〇九	一

◉水產養殖

（明治四十二年）

種別	數量	價額
牡蠣	五五、〇〇〇貫	八四円
蛎	五〇、〇〇〇	四〇〇
計	一	一、二四

◉工業

◉工業狀況

國內ニ於ケル主ナル工產物ハ釀造物トス明治四十二年ニ於ケル產額ハ八万八百十六圓ニシテ人口ノ增殖ニ伴ヒ產額モ亦增加ノ趨勢ニアリ

富士製紙株式會社ハ釧路村ニ規模宏大ナル工場ヲ設置シ三十四年以降每歲多額ノ製紙原料ヲ製造セシガ經濟界ノ不況ニ遭遇シ四十一年六月ヨリ事業ヲ休止セリ

四十二年ニ於ケル工產物總價額ハ十八万六千二十三圓ニシテ其工場數十二職工總員五百十五人ナリ而シテ蒸汽機關數十四臺六百二十六馬力ヲ使用シツヽアリ

◉工產物

其一（明治四十二年）

事項 / 役場別	釧路町	厚岸町	濱中村	昆布森村	計
普通煉瓦	一五〇、〇〇〇個				一五〇、〇〇〇
硬質煉瓦	二、〇〇〇円				二、〇〇〇
玻璃製品	一、三九〇				一、三九〇
ラムネ	四、〇〇〇打				四、〇〇〇
ラムネ	一、〇〇〇円				一、〇〇〇
沃度	一五〇瓩	二、三四六瓩			二、四九六
計	四五〇	六、八〇三	三九、〇三〇	三、四一〇	四九、八九三

其二（明治四十二年）

區別 / 役場別	釧路町	厚岸町	濱中村	計
製造戶數	三戶	四	一	八
清酒數量	六七石	七九	一、三三	一、六四
清酒價額	二六、九一〇	三〇、三六八	九、二六〇	六六、五八八
其他酒類	一六二	一二六	一九九	一、一九
醬油	一、九三二	三六六	一、四〇〇	四、九六
味噌	二貫	二	一瓩	五
計	四三、六〇〇	三八〇	二、三三二	四、二三二
	一〇、九〇〇	一二六	九〇〇	一二、〇一六
	三九、七五二	三一、一四四	九、八五〇	八〇、八一六

其三（明治四十二年）

區別 / 役場別	釧路町	厚岸町	濱中村	計
鹽化加里	一瓩			一
海藻	四、八四〇	六、八〇三	三九、〇三〇	五〇、七七三
計	四、八四〇	六、八〇三	三九、〇三〇	五〇、七七三

其三

釧路町

（明治四十二年）

區分 / 役場別	製造家數	數量	價額
蕎麥粉	一	三、七〇〇斤	三七〇
馬鈴薯澱粉	一	一、三〇〇貫	一、三〇〇
計	一		一、六七〇

其四

厚岸町

（明治四十二年）

區分 / 役場別	製造家數	數量	價額
海苔	一	一、九二〇帖	四五〇
鮪	一	二、三〇〇貫	四六〇
鮭	一	一、九二〇尾	四五〇
雜			
雜			
雜		

朝日ラムネ製造所	釧路町大字昆布森村	大正六年	全
釧路炭礦株式會社第一鑛業所	阿寒郡阿寒村字幸舌	大正十年	全
淺井硫黄製煉所	上川郡東川村字熊牛	大正十五年	全

◎商業並金融

◎商工業家

（明治四十二年末日現在）

區分 / 役場別	釧路町	厚岸町	濱中村	白糠外二村	足寄外三村	熊牛外二村	弟子屈外一村	阿寒外三村	鳥取村	昆布森外二村	太田村	計
物品販賣業	六〇	二五	二三	九七	一四	三四	七	二六	三	四九	九	一、二八二
委托販賣業	一											一
銀行業	三	一										四
保險業	八											八
金錢貸付業	二											二
物品貸付業	八	一										九
製造業	一五	八	四四	四三	一	六	四	五		七	四	一五一
運送業	七	一〇	四三			二				二		三八
水上運送業	五	二				一						八
代辦業	二	一四										一六
新聞業	四											四
屋根職	一〇	八		五								二三
提灯張業	四	一										五
時計商	四	二		七								一三
飲食店業	一七	三	一四			五						三九
仲買業	三五	二	二	八		二四	一	一		一四		一〇四
公ナル周旋業	一											一
湯屋業	一六	九	三五	二	二	一						六四
理髪業	四三	一三										五六
人力車業	三											三
劇場業	二	一										三
貸座敷業	一六	六	四四	一三								八六
料理店業	一六	五	一四									三三
旅人宿業	三	一五		一二								四六
席貸業	一	一三										一四
寫眞業	四	一										五
印刷業	三											三
勞力請負業	一〇	五		八		一三						三六
土木請負業	三〇	一五										四五
電燈業	一											一
倉庫業	三	一		一								五
質屋業	一五	二										一七

ラムネ	四、八五〇打	一、三三	四
石炭	二、五〇〇噸	八、七五〇	三
硫黄	一〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇	二

◎質屋

（明治四十二年末日現在）

役場別 / 調査事項	店數	一年間貸高		月上受戻高		同上流レ高		一年末現在	
		口數	金額	口數	金額	口數	金額	口數	金額
釧路町	一五	一四、七五六	三六、二一五	二、九五三	二九、〇六一	一、〇五七	二、三七	二、七九九	九、七四八
厚岸町	二	三、八三	六、九四	三、四〇六	七、三四	四一〇	八二四	九八八	二、四一六
浜中村	一								
白糠外二村	一	一、九六六	五、七三	一、四五	四、二九二	一三七	二六七	三六四	一、〇五五
足寄外三村									
熊牛外二村									
弟子屈外一村									
舌辛外三村									
鳥取村									
昆布森外二村	一	三四	一、三九	二七	九五	八〇	二、七	四一	一、四三
太田村									
計	一九	二〇、八九八	五〇、一一三	七、一一三	四一、七四三	一、六三三	三、八二七	四、一六三	一三、四一三

（明治四十二年末日現在）

◎營業倉庫

倉庫名	煉瓦造 棟數	坪數	石造 棟數	坪數	土藏造 棟數	坪數	木造 棟數	坪數	計 棟數	坪數
釧路町 合資會社日勝倉庫	一	九〇							一	九〇
釧路町 日野倉庫	二	九〇							二	九〇
釧路町 合資會社中川倉庫	二	五六〇							二	五六〇
釧路町 武富倉庫	二	一八三							二	一八三
釧勝與業株式會社倉庫	二	二三〇							二	二三〇

區分	種別	品目	數量	金額
釧路町	木材及枕木		二〇八、五六三石	四四、一〇七
		計		四四、一〇七
厚岸町（村）上倉庫			一	二三
濱中村（回）漕店附屬倉庫			一	六〇
濱中村（合）資會社松村倉庫			二	四三
合計			二一、二九六	七二、二三

◉外國輸出品價格

（明治四十二年）

種別	金額	仕向地
木材及枕木	四四、一〇七	白耳義、北米、清、韓、墨

◉厚岸港內國輸出入貨物價格

（明治四十二年）

種別	輸出 金額	輸出 仕向地	輸入 金額	輸入 仕出地
農產物			三五、二四四	新潟、伏木、土崎、青森、函館
米			一、〇四〇	函館、釧路、
麥			八一〇	仝
豆			一、三二	仝
其他農產物			二八、四二五	
計				
水產物				
搾粕	三一、四二五	四日市、伏木、橫濱、函館		
魚油	一八、八二六	橫濱、函館、	二五〇	函館
昆布	二五、六〇一	仝	二七、五〇〇	仝
鰹	一八、九〇〇	仝	二七、七五〇	
燒魚	七、五〇〇	青森、函館、釧路		
墟魚	一、五一〇	函館、		
生魚	九三	函館、釧路		
乾牡蠣蝋	一、〇四〇	橫濱		
牡蠣灰	一、二六〇	函館、釧路		
乾魚				
食墟				
計	二六八、〇〇五			
工產物				
清酒	四、四〇〇	根室、雜多布、釧路	二五〇	函館
沃度	六、八〇三	橫濱	二、二九〇	函館
刻昆布	四〇〇	仝		
吳服太物類				
其他工產物				
計	二、六〇三		三三、五二五	橫濱、大坂、函館、東京
鑛產物			一〇八、一四〇	橫濱、大坂、新潟、東京、函館、釧路
石油			一六三、九五五	
滿俺			一三、四四〇	函館
			五五〇	橫濱

◉霧多布港內國輸出入貨物價格

種別	輸出 金額	輸出 仕向地	輸入 金額	輸入 仕向地
石炭			一、二一〇	鐵路
計			一五、二〇〇	
林產物				
木材	四五、四一〇	大坂、函館、	一四、三五	新潟、伏木、土崎、青森、函館
板	二、〇〇〇	函館	一三、一〇〇	横濱、大坂、函館、釧路
計	四五、四一〇		二六、四二五	
雜			四五、一六五	
藥製品				
雜貨				
計				
合計	三五六、〇一八			

種別	輸出 金額	輸出 仕向地	輸入 金額	輸入 仕向地
農產物			八五、五二一	函館、釧路、根室、厚岸、青森、土崎
米	四		一、七二八	函館、釧路、厚岸、土崎、網走
麥	五		五六	青森、釧路
燕麥			一七三	青森、函館、釧路、根室
玉蜀黍			六七	青森、釧路
豆				
蔬菜				
果實				

種別	輸出 金額	輸出 仕向地	輸入 金額	輸入 仕向地
芋			一三五	横濱、函館
栗			七	函館
麥			一、四四五	函館、釧路
玉蜀黍			二〇九	仝
豆			二〇	仝
根			八	函館
蔬菜			三八	仝
胡瓜			八	根室
牧草			二〇	釧路
米			六	仝
糠			八	厚岸
ソバ			九〇、一六三	
馬鈴薯				
計			四〇	青森
水產物				
干魚	一三六		二	函館
生北寄	七五	青森		
鰯	三六	仝		
鹽鮭				
魚油	一、二六六	横濱、四日市、東京、函館		
鰯粕	五、五〇	名古屋、四日市、東京、函館		
鮭	一五	大坂、函館		
塩鮭	三〇二	四日市、函館		
生魚	七二	函館		

品目	数量	単位	移出先
コマイ粕	一六	仝	
昆布	五二、一五六	仝	
布海苔	五	仝	
銀杏草	五五	仝	
干北寄	八〇	仝	
食塩			
鰯			
計	二三、二五		
工産物			
味噌			
漁網	二〇	函館	
陶器			
清酒			
木綿類			
梅干			
乾物			
薬品	三〇	函館	
茶			
綿類			
紙			
時計			
毛織物	一、三四六	函館	
乳呑器	二四	仝	
麻ロープ	一、四二		
交具			
機械	二、八一七	青森、函館、厚岸、釧路	
ボンブ	二、三〇〇	四日市、伏木、横濱、函館、厚岸	
釜	三五〇	横濱、大坂、釧路	
帽子	六、二四六	伏木、函館、根室、釧路、厚岸	
足袋	四、九五〇	伏木、函館	
莫子	一五	名古屋	
菓子	六〇四	名古屋、函館、釧路	
醤油	一、三二七	大坂、函館、東京、根室	
麦粉	五二五	大坂、函館	
ミルク	一、五二七	仝	
玉砂糖	四七五	東京、函館	
セメント	七〇	東京	
書籍			
金物			
合羽			
家具			

品目	数量	単位	移出先
毛織物	三〇〇	仝	函館
乳呑器	二八	仝	
麻ロープ	三〇	仝	
交具			
機械	八六〇	函館	厚岸
ボンブ	五〇	仝	
釜	九〇	仝	
帽子	六五	仝	
足袋	六四九	仝	根室 厚岸
莫子	三五	東京	
菓子	二〇〇	仝	
醤油	一三、〇〇〇	函館	釧路 厚岸
麦粉	二八三	函館	釧路
ミルク	四、二六六	函館	釧路 厚岸 小樽
玉砂糖	二〇五	仝	
セメント	五〇	仝	
書籍	七、八一〇	仝	
金物	一四	函館	釧路
合羽	六五	函館	厚岸
家具	一、三九六	函館	釧路 厚岸
	一七〇	仝	
	一、二九五	函館	農室 釧路 厚岸

硝子	一	東京	一七九
銀貨			函館釧路
戸棚			一三四
衣類			函館厚岸
馬具			一、四四四
酢			函館釧路
種油			一、六八四
ロープ			全
和洋小間物			一五〇
赤砂糖			全
下駄			一三
マッチ			函館
煙草			六〇〇
洋酒			全
ビール			一〇三
鍮			全
空鍮			三〇
鍮詰	七三	東京	函館根室
ソーメン			三〇
ウドン			全
漁具			五〇
麺類	一		函館厚岸
			一七〇
			函館厚岸
			八八三
			全
			六八〇
			全
			六五
			全
			三〇〇
			全
			釧路
			三〇
			全
			六〇
			全
			七七
			根室釧路小樽
			五
			全
			一、三五〇
			全
			釧路

大工道具	八〇	函館	三〇
船釘	一	全	厚岸
沃度	三、九〇〇	東京	三〇
鹽化加里	三、三六〇	全	全
計	四、五八〇		一
鐵產物			一
俺			六〇、一五三
滿			三六
硫酸			東京函館
石油			三五三
計			全
雜			一、七五二
鞋			函館
繩			二、三三
干			一
楚			一
楚			一
建			三〇三
雜品	一六五	函館	青森士崎函館
實子繩			一、〇〇〇
毛皮	三	函館	全
計	一九二		九〇二
總計	一、九〇三		函館
			五五五
			全
			四〇〇
			全
			四〇
			全
			一
			三、一二九
			一、七八八

◉釧路港輸出入貨物價格（明治四十二年）

種別	輸出 金額	仕向地
農產物		
燕麥	一〇、一三六	東京、函館
大豆	一四六、一〇六	東京、四日市、神戸、半田、名古屋、函館
小豆	一五、三六一	東京、大坂、函館
菜豆	一〇、四五二	東京、神戸、函館其他各地
雜穀	七、三八一	東京、大坂、名古屋、厚岸、霧多布、函館
藁	四、〇九五	神戸、函館
合計	一四六三、六三一	
畜產物		
馬	八〇〇	京都
水產物		
生鮭	三、六六〇	東京、函館
生鱒	一、四〇〇	仝
鮪	八五〇	函館、其他

種別	輸入 金額	仕出地
農產物		
白米	九四三、五一	新潟、土崎、青森、伏木、函館
糯米	二八、一二〇	新潟、土崎、函館
大麥	一九、五〇三	神戸、函館
小麥	三、九二四	東京、其他
蔬菜	一一、三七三	東京、函館、其他
果實	八、八四四	東京、青森、函館
種子類	二、〇四三	青森、函館
合計	一〇一七、三八七	
畜產物		
鷄卵	一四八	青森
家禽	一五〇	東京
合計	二九八	
水產物		
鰹節	九、四八〇	横濱、函館
身欠鰊	一、一〇〇	函館
其他乾魚	二、六一七	仝

目拔鯛	八七五	仝
其他鮮魚	五、三三五	青森、函館
開鱈	三四、一二八	東京、横濱、函館、其他
鮫鰾	八八九	横濱、函館
乾鮑	七六〇	函館、其他
其他乾魚	一、七六四	東京、横濱、函館、其他
鮫節	四、八五七	仝
鮪節	九三九	仝
鹽鮭	三三、六八〇	東京、函館
鹽鱒	七、五〇〇	仝
鹽鱒	三三	函館
鮭筋子	一、三五〇	東京、函館
其他鹽魚	六、三五〇	東京、青森、函館
鰊搾粕	八三七、五三三	東京、名古屋、四日市、函館、其他
鰮搾粕	八四、五八一	東京、名古屋、函館其他
雜魚粕	一九、一一四	大坂、函館
昆布	三五、五〇〇	神戸、横濱、函館其他各地
銀杏草	三、六〇〇	大坂、函館
鰮油	五、〇五八	函館、神戸
鰊油	七九、二四九	東京、神戸、函館其他各地
雜魚油	六、四一四	神戸、函館、其他

生鰊	一〇五	厚岸
其他鮮魚	二三	仝
燒魚	九〇〇	仝
牡蠣灰	七五六	仝
生牡蠣	四五	仝
鰊餌	一、〇〇〇	函館

其他海産物	八、一〇二	東京、横濱、兵庫、函館、其他
合計	一二六、七七七	
工産物		
毛皮	一、三五	函館
沃度	四、五〇〇	東京
燐寸軸木	三〇四、六五〇	兵庫、神戸、大坂

合計	一六、一四	
工産物		
鏃詰類	三〇、七一六	東京、大坂、函館
漬物鏃詰	二、〇六〇	仝
刻昆布	一八四	大坂
小麥粉	七、五五〇	横濱、函館、其他各地
麵類	四、五七〇	大坂、函館
其他粉類	一、四八八	兵庫、其他各地
菓子類	三、八三四	東京、大坂、函館
白砂糖	三五、一八六	仝
玉砂糖	七、一〇九	大坂、兵庫、函館
茶	七、三四〇	大坂、横濱、函館
酢	二、四五〇	函館、半田
卷煙草	三、四九六	函館
刻煙草	六一、四九三	仝
清酒	三八、〇五三	大坂、神戸、堺、函館、其他各地
洋酒	三、四七七	東京、横濱、神戸、函館
其他酒類	三、三五	東京、横濱、大坂、新潟、土崎、函館
醬油	六八、八六八	東京、新潟、土崎、函館、其他
鹽	一五、一〇〇	函館

味噌	一八、〇〇〇	青森、函館
靴類	三、〇〇〇	東京
セメント	二〇、八〇一	東京、函館
燐寸	一、一〇八	東京、兵庫、神戸
呉服太物	二七八、四四八	東京、大坂、名古屋、堺、函館
綿類	二〇、八二九	大坂、函館
糸類	一、八七二	東京
毛布	四、八五五	仝
古着類	五三、一〇〇	東京、大坂
傘	二、七八四	大坂、伏木、函館
玩具	三、一〇〇	東京、大坂、函館
和洋小間物	四四、六四〇	東京、横濱、大坂、函館
柳行李	一、一六〇	大坂、堺、函館
鞄類	一、五四七	東京、大坂
履物類	二六、六八〇	東京、大坂、函館
文具類	七、五四〇	東京、大坂
疊表	五、一七二	新潟、敦賀、函館
漆器	四、三六二	釜石、尾ノ道、函館
陶磁器	三、九六八	東京、輪島、函館、其他
硝子板	三一、七九五	大坂、名古屋、函館、其他
	二、八〇八	横濱、大坂

合計	三一〇、三五	
鑛産物		
石炭	三八、三九	青森、函館、根室
合計	三八、三九	
林産物		
銃床	三、三三〇	東京
樹皮	四五、六三	東京、大坂
薪	三〇	横濱
下駄材	一、九三	大坂、名古屋、横濱、四日市
木材	三九、四六	東京、魚津、兵庫、大坂、四日市、名古屋、横濱、鳥羽、清水、牛田
枕木	三、六〇〇	横濱、大坂、兵庫
合計	三四、〇五二	
雜貨	三六、五二	東京、横濱、兵庫、青森、四日市、下關、厚岸、函館、根室
合計	三六、五二	
總計	三三六、三五	

紙類	二、三五八	東京、大坂、鹽瀨
度量衡器	一、七三	神戸、名古屋、東京、函館
藥品	七、五四	東京、大坂、函館
人造肥料	二、一二六	東京
漁網	六、八六〇	東京、函館
船具	三、六三一	東京、大坂、函館
金庫	五、八五〇	東京
鐵道用鐵材	一〇、六六〇	横濱
釘	一、七〇三	東京
綱	一七、三七七	仝
漆	七、五〇〇	横濱
金物類	四八、四一四	東京、横濱、神戸、大坂、函館
時計	三、三三八	東京、大坂、名古屋
農具	三、二〇六	東京、函館
醫療器械	一、八〇〇	東京
其他器械	二一、八六八	横濱、大坂
蠟燭	一五、七五	新潟、敦賀
種油	三、九二〇	大坂、兵庫
合計	二九五、八〇三	
鑛産物		
石油	六二、三六〇	横濱、大坂、神戸、函館
其他礦油	二、〇〇〇	横濱
合計	六四、三六〇	
林産物		
挽割材	一、〇五〇	東京
合計	一、〇五〇	
雜		
繩	一三、九五八	青森、佐渡、土崎、函館
莚	三九、〇〇五	青森、土崎、伏木、函館
叺	三三、三一七	青森、函館
藁靴	五四六	青森、佐渡
草鞋	三、八三	青森、佐渡、土崎
雜貨	八一、一〇三	內地各港及本道各港
合計	一七〇、二三	
總計	二五五、三四	

◉墾成畑地賣買價格（明治四十二年末日現在）

一反歩當り賣買價格

町村名	上	中	下
釧路町	九、〇〇〇円	三、〇〇〇円	三、〇〇〇円
厚岸町	一〇、〇〇〇	七、〇〇〇	四、〇〇〇
濱中村	六、〇〇〇	四、〇〇〇	三、〇〇〇
白糠外二村	一八、〇〇〇	九、〇〇〇	四、〇〇〇
足寄外三村	三、〇〇〇	九、〇〇〇	六、〇〇〇
熊牛外二村	一〇、〇〇〇	六、〇〇〇	三、〇〇〇
弟子屈外一村	一〇、〇〇〇	九、〇〇〇	六、〇〇〇
舌辛外三村	三、〇〇〇	一二、〇〇〇	四、五〇〇
鳥取村	三五、〇〇〇	九、〇〇〇	三、〇〇〇
昆布森外二村	一五、〇〇〇	四、〇〇〇	三、〇〇〇
太田村	六、〇〇〇		

◉勞働者賃銀

釧路町（明治四十二年）

業目	三月 最高	三月 普通	三月 最低	六月 最高	六月 普通	六月 最低	九月 最高	九月 普通	九月 最低	十二月 最高	十二月 普通	十二月 最低
農作男 日給	五〇錢	四〇錢	四〇錢	五〇錢	四〇錢	四〇錢	五〇錢	四〇錢	四〇錢	五〇錢	四〇錢	四〇錢
農作女 日給	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
屋塗職 日給	七五	六五	五五	七五	六五	五五	七五	六五	五五	七五	六五	五五
物職 月給	一五、〇〇	一〇、〇〇	八、〇〇	一五、〇〇	一〇、〇〇	八、〇〇	一五、〇〇	一〇、〇〇	八、〇〇	一五、〇〇	一〇、〇〇	八、〇〇
鍛冶職 日給	一、一〇	一、〇〇	九〇	一、一〇	一、〇〇	九〇	一、一〇	一、〇〇	九〇	一、一〇	一、〇〇	九〇
錺物職 日給	一、一〇	一、〇〇	九〇	一、一〇	一、〇〇	九〇	一、一〇	一、〇〇	九〇	一、一〇	一、〇〇	九〇
車製造職 日給	一、一〇	一、〇〇	九〇	一、一〇	一、〇〇	九〇	一、一〇	一、〇〇	九〇	一、一〇	一、〇〇	九〇
馬具職 日給	九〇	八〇	七〇	九〇	八〇	七〇	九〇	八〇	七〇	九〇	八〇	七〇
鞍職 日給	九〇	八〇	七〇	九〇	八〇	七〇	九〇	八〇	七〇	九〇	八〇	七〇
下駄職 日給	七〇	六〇	五五	七〇	六〇	五五	七〇	六〇	五五	七〇	六〇	五五
菓子製造職 月給	二三、〇〇	八、〇〇	三、〇〇	二三、〇〇	八、〇〇	三、〇〇	二三、〇〇	八、〇〇	三、〇〇	二三、〇〇	八、〇〇	三、〇〇
石工職 日給	二、〇〇	一、〇〇	八〇	二、〇〇	一、〇〇	八〇	二、〇〇	一、〇〇	八〇	二、〇〇	一、〇〇	八〇
建具職 日給	一、一〇	一、〇〇	八〇	一、一〇	一、〇〇	八〇	一、一〇	一、〇〇	八〇	一、一〇	一、〇〇	八〇
畳刺職 日給	一、〇〇	一、〇〇	七五	一、〇〇	一、〇〇	七五	一、〇〇	一、〇〇	七五	一、〇〇	一、〇〇	七五
經師職 日給	一、〇〇	八〇	四〇	一、〇〇	八〇	四〇	一、〇〇	八〇	四〇	一、〇〇	八〇	四〇
指物職 日給	一、一〇	一、〇〇	八〇	一、一〇	一、〇〇	八〇	一、一〇	一、〇〇	八〇	一、一〇	一、〇〇	八〇
煉瓦積職 日給	二、五〇	二、五〇	二、五〇	二、五〇	二、五〇	二、五〇	二、五〇	二、五〇	二、五〇	二、五〇	二、五〇	二、五〇
家根職 日給	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇
瓦葺職 日給	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、三〇
左官職 日給	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇
大工職 日給	一、三〇	一、三〇	一、〇〇	一、三〇	一、三〇	一、〇〇	一、三〇	一、三〇	一、〇〇	一、三〇	一、三〇	一、〇〇
木挽職 日給	一、一〇	一、〇〇	八〇	一、一〇	一、〇〇	八〇	一、一〇	一、〇〇	八〇	一、一〇	一、〇〇	八〇
洋服仕立職 日給	一、〇〇	八〇	六〇	一、〇〇	八〇	六〇	一、〇〇	八〇	六〇	一、〇〇	八〇	六〇
和服仕立職 月給	七五	五〇	三〇	七五	五〇	三〇	七五	五〇	三〇	七五	五〇	三〇
染物職 日給	一三、〇〇	八、〇〇	六、〇〇	一三、〇〇	八、〇〇	六、〇〇	一三、〇〇	八、〇〇	六、〇〇	一三、〇〇	八、〇〇	六、〇〇

活版植字職	仝	五〇	五〇	四〇	五〇	四〇	五〇	四〇	五〇	四〇	五〇	四〇	五〇	四〇	五〇	四〇	五〇	四〇
船大工職	仝	一、五〇	一、三〇	一、〇〇	一、三〇	一、〇〇	一、三〇	一、〇〇	一、三〇	一、〇〇	一、三〇	一、〇〇	一、三〇	一、〇〇	一、三〇	一、〇〇	一、三〇	一、〇〇
桶職	仝	一、〇〇	八〇	六〇	八〇	六〇	八〇	六〇	八〇	六〇	八〇	六〇	八〇	六〇	八〇	六〇	八〇	六〇
杜氏	年給	一四〇、〇〇	一二〇、〇〇	一一〇、〇〇	一二〇、〇〇	一一〇、〇〇	一二〇、〇〇	一一〇、〇〇	一二〇、〇〇	一一〇、〇〇	一二〇、〇〇	一一〇、〇〇	一二〇、〇〇	一一〇、〇〇	一二〇、〇〇	一一〇、〇〇	一二〇、〇〇	一一〇、〇〇
醬油造	月給	一三、〇〇	一二、〇〇	一〇、〇〇	一二、〇〇	一〇、〇〇	一二、〇〇	一〇、〇〇	一二、〇〇	一〇、〇〇	一二、〇〇	一〇、〇〇	一二、〇〇	一〇、〇〇	一二、〇〇	一〇、〇〇	一二、〇〇	一〇、〇〇
漁夫	仝	一三、〇〇	一二、〇〇	一〇、〇〇	一二、〇〇	一〇、〇〇	一二、〇〇	一〇、〇〇	一二、〇〇	一〇、〇〇	一二、〇〇	一〇、〇〇	一二、〇〇	一〇、〇〇	一二、〇〇	一〇、〇〇	一二、〇〇	一〇、〇〇
日雇人夫	日給	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇
下男	月給	八、〇〇	五、〇〇	三、〇〇	五、〇〇	三、〇〇	五、〇〇	三、〇〇	五、〇〇	三、〇〇	五、〇〇	三、〇〇	五、〇〇	三、〇〇	五、〇〇	三、〇〇	五、〇〇	三、〇〇
下女	仝	三、五〇	三、〇〇	二、〇〇	三、〇〇	二、〇〇	三、〇〇	二、〇〇	三、〇〇	二、〇〇	三、〇〇	二、〇〇	三、〇〇	二、〇〇	三、〇〇	二、〇〇	三、〇〇	二、〇〇

◉諸會社

◉諸會社其一（明治四十二年末日現在）

名稱	所在地名	設立年月	營業目的	資本金 總額	資本金 拂込金額	積立金	社債 現在額
				円	円	円	円
眞龍釀造合名會社	厚岸町大字眞龍村	四十二年十月	酒類釀造販賣	二、〇〇〇	二、〇〇〇	—	—
北海挽材合資會社	仝	三十八年五月	板類製造販賣	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	—	—
厚岸商船株式會社	厚岸町大字濱月町	三十九年四月	海運業	五〇、〇〇〇	一二、五〇〇	—	—
合名會社釧勝商會	釧路町大字釧路村	三十八年二月	漁業及水產物販賣	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	八五〇	—
合資會社三輪水產製造所	仝	四十一年五月	水產製造販賣	一〇、〇〇〇	五、七五〇	—	—
合資會社釧路洋服店	釧路町大字眞砂町	四十年三月	洋服裁縫業	六、〇〇〇	一、〇〇〇	—	—
釧勝與業株式會社	仝	四十年一月	礦物採掘牧畜造林製材電氣供給等	五〇〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇	一、一三〇	—
株式會社釧路銀行	仝	三十三年八月	銀行業	六〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇	四、八〇〇	—
合資會社日勝倉庫	仝町大字入舟	三十八年十月	倉庫業	六、〇〇〇	三、一五〇	—	—
三輪運送合資會社	仝町大字釧路村	四十一年六月	海陸貨物運送及船客運送	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇	—
釧路造船合資會社	仝	四十年十月	製材造船	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	—	—
中川倉庫合資會社	仝	三十九年八月	倉庫業	一六、〇〇〇	一六、〇〇〇	三〇、〇〇〇	—
合資會社明治商會	釧路町大字眞砂町	四十一年九月	米雜穀肥料雜貨販賣及問屋業	一三、〇〇〇	九、〇〇〇	—	—

名稱	所在地	支店設立年月	營業目的	資本金 總額	資本金 拂込總額	積立金	社債 現在額	
合資會社釧路精米所	大字入舟町	四十年八月	精米業	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	—	—	
株式會社釧路魚菜市場	釧路町大字釧路村	四十一年十月	魚鳥獸肉果實蔬菜委托販賣	二〇、〇〇〇	二三、五〇〇	四〇	—	
釧路石材合資會社	大字浦見町	四十年二月	石材製造販賣	一〇、〇〇〇	三、五〇〇	—	—	
釧路炭鑛株式會社	阿寒郡舌辛村	三十九年八月	石炭採掘販賣	二、〇〇〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇	一、二五〇	三、一七〇	

◉諸會社其二（全上）

名稱	所在地	支店設立年月	營業目的	資本金 總額	資本金 拂込總額	積立金	社債 現在額	
株式會社根室銀行厚岸支店	厚岸町大字若竹町	三十五年七月	銀行業	五〇〇、〇〇〇	三五〇、〇〇〇	一一〇、〇〇〇	二四七、九〇〇	
全上釧路支店	釧路町大字眞砂町	三十二年七月	全上	全上	全上	全上	全上	
株式會社釧路支店二十銀行	全上	三十七年八月	全上	二、〇〇〇、〇〇〇	五五〇、〇〇〇	二八〇、〇〇〇	全上	
安田商事合資會社釧路支店	全上	三十二年六月	石炭採掘販賣	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	—	—	
內地物產合資會社釧路支店	釧路町大字釧路村	三十一年七月	資機業及雜貨	二三、五〇〇	二三、五〇〇	八、五〇〇	—	

◉各種銀行諸預金及諸貸金（明治四十二年末日現在）

名稱	預金	貸金
株式會社根室銀行釧路支店	三、三八二、九五〇円	一、四一三、一四三円
株式會社二十銀行釧路支店	二一〇、八九五	一九二、六五〇
株式會社釧路銀行	三七二、一八九	三〇四、七九五
株式會社根室銀行厚岸支店	一、七二三、六一五	六〇六、二九三
計	五、五七八、六四九	二、五六、八五五

◉各銀行ノ平均金利（明治四十二年）

種別	定期預金	當座預金	貯蓄預金	貸付金	當座貸越	割引手形
最高	一七（北海道銀行）三三	一七	一四（北海道銀行）一四	三九（釧路銀行）三六	三九（釧路銀行）三六	四（釧路銀行）三四
最低	一七	一七	一四	三三	三六	三四
平均	一七	一七	一四	三六	三七	三七

◉交通

◉道路橋梁（仮定縣道之部）（明治四十三年五月末日現在）

區分	起点地名	終点地名	延長	経過地名	橋梁數
自釧路至直別仮定縣道南海岸線	釧路町	釧路郡大楽毛	三、四〇〇〇	釧路郡釧路町大字釧路村字別途前	六
全	釧路郡大楽毛	白糠郡庶路	二、一三〇〇		八
全	白糠郡白糠	白糠郡尺別	六、三三〇〇		六
全	白糠郡茨背牛内	十勝郡直別	四、二〇〇〇	遠野、阿歴内、片無内、太田、厚岸、風澗、霧多布、濱中	一五
自釧路至厚岸郡濱中村仮定縣道南海岸線	釧路町	厚岸郡濱中	二六、一〇〇〇		三三
仮定縣道釧路網走街道	釧路郡釧遠忽布	全	八、〇七〇〇	釧路郡釧路町大字釧路村字遠野	四
全	川上郡塘路	川上郡磯分内	二、〇〇〇〇		七
全	川上郡シラウトリ	川上郡ピルワ	六、三三六	川上郡標茶	一七
全	川上郡弟子屈村熊牛原野	全郡磯分内	一、一五〇〇		二
計	川上郡跡佐登	川上郡跡佐登	二、一〇〇		二
			三、三五〇六		

◉渡船場

國費支辨之部

（明治四十三年五月末日現在）

渡船場名	創設年月	渡船數		河川名
		人渡船	馬渡船	
川上郡塘路村字二股	明治十八年五月	一		釧路川
釧路郡鳥取村	全　十八年九月	一		阿寒川
全	全三十二年五月廿六日	一		阿寒川
全郡全　村オンチピラ	全三十二年七月十八日	一		阿寒川
阿寒郡舌辛村	全三十三年十月十六日	一		舌辛川
白糠郡庶路村字トマリベツ	全三十四年八月廿二日	一		阿寒川
足寄郡足寄村	全三十四年十一月十九日	一		阿寒川
白糠郡尺別村字チコタンベ	全三十五年十月四日	一		庶路川
全郡鳥取村字ユッパナイ	全三十九年九月四日	一		阿寒川
阿寒郡舌辛村	全年全月全日	一		音別川
白糠郡尺別村字ライムリ	全四十年三月卅一日	一		全
全	全年六月廿四日	一		阿寒川
白糠郡白糠村字茶路原野	全　年十一月五日	一		茶路川

地方費支辨之部

白糠郡白糠村　明治三十五年十二月一

◉官設驛遞

（明治四十二年十二月末日現在）

驛名	個所	驛名	個所
遠野驛	一	片無去驛	一
塘路驛	一	雷別驛	一
標茶驛	一	太田驛	一
磯分内驛	一	昆布森驛	一
弟子屈驛	一	風澗驛	一
硫黄山驛	一	貫人驛	一
阿歴内驛	一	オンネピラ驛	一
		計	二〇

◉燈台

釧路崎燈臺

明治廿四年九月釧路泊地知入鼻北緯四十二度五十八分東經百四十四度ノ位置ニ建設セラレ航海ノ便ヲ計レリ

厚岸燈臺

明治廿三年十一月厚岸灣口大黑島北緯四十二度五十六分東經百四十四度五十二分ノ位置ヲ建設セラル

燈臺名稱	等級及燈質	高サ	燭光數	光達距離
釧路崎	第六等 回轉白色	二丈五尺	九百燭	十四浬
厚岸	第五等 不動白色	一丈八尺	百燭	十浬

◉拓殖

◉拓殖ノ狀況

當管内釧路地方ノ開發ハ鑄ヲ佐野孫右衛門漁場請負人トシテ來リタルニ發ス孫右衛門安政四年中南部ヨリ五戸十五人ヲ釧路ニ移住セシムルニ嚆矢ナリ其後更ニ秋田、青森ヨリ二百三十戸ヲ募リ釧路、白糠ノ兩郡ニ移住セシム明治十七年鳥取縣ヨリ釧路郡鳥取村ヘ團体移住ス足寄郡阿寒郡ハ殖民區画設定後ノ開發ナリ厚岸地方ハ漁業ノ利アルヲ以テ古クヨリ開發シタルモ其部分ハ沿海ノ地方ノミニ止マレリ尾幌原野ノ開發ハ明治三十三年中室蘭ヨリ六十戸移住シタルニ始マレリ

管内ノ殖民區画ハ明治二十八年以後ノ設定ニ係リ釧路郡ニ保別、トリトウシ、原野アリ阿寒郡ニ舌辛、徹別、他別、ニニシベツ、ホロロ、雪裡、クチョロ原野アリ白糠郡ニ直別、尺別、音別、茶路、庶路、オタノシケ原野アリ足寄郡ニ足寄、上足寄、上利別、トマム、漆別、ノ原野アリ川上郡ニ塘路、コッタロ、オソツベツ、熊牛、ビルツ、跡佐登ノ原野アリ厚岸郡ニハ尾幌、別寒邊牛、熊牛、姉別、旧朱別、茶内ノ原野アリ釧路、足寄、白糠三郡ノ諸原野ノ大部分ハ已ニ開發シタルモ其他ノ諸原野ニアリテハ尚ホ大ニ移民ヲ入ルヽノ餘地アリ

◉殖民區劃地収容戸數

（明治四十二年末日現在）

殖民區畫地名	移住農民總面積 戸口	未處分地積	今後收容見込戸數	作付種類	居住者ノ概況
釧路郡別保	一、二〇〇 一、三五九、二〇	一、二五九、二〇		馬鈴薯、燕麥、大角豆、蔬菜	農業ノ傍ラ日雇夫トナル生計稍豊ナリ

全	トリトツシ	一三	六〇	二、六九五	四五一	元	一、〇一九	四〇五	一、六七〇	二四	一〇〇	全	稲黍、馬鈴薯、蕎麦、玉蜀黍、蔬菜						
全	大楽毛	二五	一三五	一、六四八	一三八		四九七	六七	一、一四三	七〇二	二二	全							
厚岸郡	熊牛	八	三	二、八五〇	五二九		一、〇四七	三九一〇	一、八〇三	一二九	一八〇	蕎麦、馬鈴薯、稲黍、蔬菜							
全	尾幌	一五九	七五	一、〇一七	九三五		九五九	五二七	五八三	九六	六〇	大小豆、玉蜀黍、蕎麦、大小麦							
全	茶内	五	二	二、八四六	八五四		四七六	八〇二	二、三七〇	〇五三	二〇〇	馬鈴薯、燕麦、蔬菜							
全	姉別	二	七	一、八五二	八三二		三三〇	三〇五	一、八一九	八〇六	一八〇	全							
全	朱円別	一	一	一、九三八	五一〇				一、九三八	五一〇	一〇〇	大小豆、稲黍、蕎麦、馬鈴薯、玉蜀黍							
全	別寒辺牛	一六	七六	一、一二九	七〇二		四三四	四	一、一七三	〇八	一〇〇	全	農業ノ傍ラ附近牧場ニ雇ハルヽモノ多シ生計豊ナラス						
全	下別寒辺牛	一	一	五二	九三三				五八二	九三三	五〇	全	全						
川上郡	熊牛	一四	七九	北一、三三九			三九六	六一三	六二七	二二	六二	全	全						
全	弟子屈	六九	三五四	一七九六	一〇														
全	オソツベツ	三	一四	一、五〇六	九一八		五〇九	七六三											
川上郡	コッタロ	一五	七九	一、五一三	一四八		二七七	四〇〇											
全	ビルツ	五九	三二	三七三	八〇二		一九四	八二											
全	アトサヌプリ	一	一	一、三七三	〇六一五														
阿寒郡	舌辛	三三二	一六五	三、五五二	一、三六二		一、九六二	一三三	一、五八五	〇一三	一〇〇	大小豆、大角豆、玉蜀黍、稲黍、馬鈴薯							
全	ニシベツ	七	一五	二、七五二	三三六		九〇〇	八二	一、八五四	二一九	一八〇	全上	生計豊ナリ						
全	雪裡	一〇	四五	三、九二三	一、五六二		四四六	二〇	二、三〇〇	七五	三〇	全	全						
全	ホロロ	九	四〇	三、四二四	七〇一		六〇八	二〇	二、八〇四	三五二	二六〇	全	全						
全	徹別	五〇	二〇二	二、八三三	六〇三		一、八〇五	〇〇	一、六四三	〇〇二	一六〇	全	専業ナリ適々鐵道枕木採取ニ従事スルモノアリ生計概シテ豊ナリ						
全	クチョロ	二六	一〇四	三、〇八五	五一五		五六一	九一九	二、五三六	五六	二五〇	全	全						

全	弟子屈	六九	三五四	一七九六	一〇														
全	オソツベツ	三	一四	一、五〇六	九一八		五〇九	七六三											
川上郡	コッタロ	一五	七九	一、五一三	一四八		二七七	四〇〇											
全	ビルツ	五九	三二	三七三	八〇二		一九四	八二											
全	アトサヌプリ	一	一	一、三七三	〇六一五														
阿寒郡	舌辛	三三二	一六五	三、五五二	一、三六二		一、九六二	一三三	一、五八五	〇一三	一〇〇	大小豆、大角豆、玉蜀黍、稲黍、馬鈴薯							
全	ニシベツ	七	一五	二、七五二	三三六		九〇〇	八二	一、八五四	二一九	一八〇	全上	生計豊ナリ						
全	雪裡	一〇	四五	三、九二三	一、五六二		四四六	二〇	二、三〇〇	七五	三〇	全	全						
全	ホロロ	九	四〇	三、四二四	七〇一		六〇八	二〇	二、八〇四	三五二	二六〇	全	全						
全	徹別	五〇	二〇二	二、八三三	六〇三		一、八〇五	〇〇	一、六四三	〇〇二	一六〇	全	専業ナリ適々鐵道枕木採取ニ従事スルモノアリ生計概シテ豊ナリ						
全	クチョロ	二六	一〇四	三、〇八五	五一五		五六一	九一九	二、五三六	五六	二五〇	全	全						

上利別	足寄	上足寄郡	直別	尺別	音別	上庶路	上茶路	茶路	白糠郡路	他別			
一〇〇	一四九	四九	三四	五四	一七二	—	八	一三三	一〇四	五	一七		
二七八	六〇一	一五八	一四六	二四三	七九五	—	三七	八四〇	四五	一七	一九二、三〇〇七		
五四一〇九	一、〇六四、六〇七	一、四六〇、五一六	四五、〇〇〇	五七、八九六	一、〇三〇、三〇一八	二九四、五一二	九四、五八一九	一、二六一、二四四	一、三五、〇〇〇	一、二四八、九四四	三一〇、七五		
四九五、八三〇四	一、〇三〇、七四一三	六五、九〇一〇六	二九、八一四	五六四、三八三	九三、三六八一六	—	四一、八四一六	一、七一、九六二					
一八二、七一五	四四一、二四	八〇、三〇	一二、七一六	九四、三〇五	二九四、五六一二	四〇、三七三三	九三、七一三						
一、八二七、四五五	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四		
三五、四〇一〇七	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五		

計	厚岸路上寒糠寄	釧川阿白足郡	計	全クチョロプト	全マムト	全利別川上	全上落別	全落別	全上利別	全足寄	上足寄郡	直別	尺別
三、〇七三、四三五、〇八九、〇五八、二四八、四三五、四〇一〇七	—	二、三八二、四四	二、三八二、四四	—	三	—	—	四九	二〇七	七九三、九〇〇〇	八七三、八一七	五〇五、二五八	一、三三三、〇八〇八
三四一五	二〇〇	三〇	一八	五二									

音別	上庶路	上茶路	茶路	白糠郡路	他別								
一七二	—	八	一三三	一〇四	五	一七							
七九五	—	三七	八四〇	四五	一七	一九二、三〇〇七							
一、〇三〇、三〇一八	二九四、五一二	九四、五八一九	一、二六一、二四四	一、三五、〇〇〇	一、二四八、九四四	三一〇、七五							
九三、三六八一六	—	四一、八四一六	一、七一、九六二										
四〇、三七三三	九三、七一三												
二九四、五六一二													

上利別	足寄	上足寄郡	直別	尺別	音別	上庶路	上茶路	茶路	白糠郡路	他別			
一〇〇	一四九	四九	三四	五四	一七二	—	八	一三三	一〇四	五	一七		
二七八	六〇一	一五八	一四六	二四三	七九五	—	三七	八四〇	四五	一七	一九二、三〇〇七		
五四一〇九	一、〇六四、六〇七	一、四六〇、五一六	四五、〇〇〇	五七、八九六	一、〇三〇、三〇一八	二九四、五一二	九四、五八一九	一、二六一、二四四	一、三五、〇〇〇	一、二四八、九四四	三一〇、七五		
四九五、八三〇四	一、〇三〇、七四一三	六五、九〇一〇六	二九、八一四	五六四、三八三	九三、三六八一六	—	四一、八四一六	一、七一、九六二					
一八二、七一五	四四一、二四	八〇、三〇	一二、七一六	九四、三〇五	二九四、五六一二	四〇、三七三三	九三、七一三						
一、八二七、四五五	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四	二、三八二、四四		
三五、四〇一〇七	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五	一、二四八、九四二、三五		

計	厚岸路上寒糠寄	釧川阿白足郡	計	全クチョロプト	全マムト	全利別川上	全上落別	全落別	全上利別	全足寄	上足寄郡	直別	尺別
三、〇七三、四三五、〇八九、〇五八、二四八、四三五、四〇一〇七	—	二、三八二、四四	二、三八二、四四	—	三	—	—	四九	二〇七	七九三、九〇〇〇	八七三、八一七	五〇五、二五八	一、三三三、〇八〇八
三四一五	二〇〇	三〇	一八	五二									

音別	上庶路	上茶路	茶路	白糠郡路	他別								
一七二	—	八	一三三	一〇四	五	一七							
七九五	—	三七	八四〇	四五	一七	一九二、三〇〇七							
一、〇三〇、三〇一八	二九四、五一二	九四、五八一九	一、二六一、二四四	一、三五、〇〇〇	一、二四八、九四四	三一〇、七五							
九三、三六八一六	—	四一、八四一六	一、七一、九六二										
四〇、三七三三	九三、七一三												
二九四、五六一二													

二〇 大小豆、稲黍、ソバ、馬鈴薯、玉蜀黍

区画地段区日尚浅キヲ以テ住民ノ生計ハ概シテ豊ナラザルモノト思料ス

二〇 全 新区画地ニシテ未タ移民ナシ

一三 蕎麦、馬鈴薯、稲黍、玉蜀黍、蔬菜

生計豊ナリ農業ノ傍ラ専ラ木材採取ニ従事ス

一〇 大小豆、稲黍、玉蜀黍、馬鈴薯、蔬菜

全 新区画地ニシテ未タ移民ナシ

三〇 燕麦、蕎麦、大小豆、馬鈴薯、玉蜀黍

庶路原野ニ全シ

二 燕麦、蕎麦、大小豆、馬鈴薯

全 大小豆、稲黍、馬鈴薯、玉蜀黍、蕎麦

専農ニシテ生計尤モ富メリ

一三 燕麦、蕎麦、大小豆、馬鈴薯、玉蜀黍

全 専農ニシテ生計尤モ富メリ

八〇 全 専農ニシテ生計尤モ富メリ

九 全 全

三 全 全

◉官林地郡別地積（明治四十二年末日現在）

郡名	積	
郡	六六、六五一町	八六〇二
郡	一三、九二四七五一一	
郡	六八、〇三四〇二〇七	
郡	八六、六六八三四一〇	
郡	七五、一八五七〇二三	
郡	八九、三五三四六一〇	
郡	三九九、八一八一五〇三	

◉賣拂貸付ス可キ未開地（明治四十二年末日現在）

郡名	地積
釧路郡	六、八一〇町四〇一六
厚岸郡	一、二〇五、〇六七、〇九
白糠郡	三、二七六、六九二六
阿寒郡	一、一五〇一、五八一九
川上郡	六、五六四、六七一四
足寄郡	九、二四二、五九〇五
計	四九、四四四、六六二九

◉貸付地地目別（明治四十二年末日現在）

町村名	畑	郡村宅地	牧場	海産干場	植樹地	計
釧路町	五三、九〇四町	一、〇〇町	三、一七、八一三町	町	町	三、六九一、九〇七町
厚岸町	一、〇〇七、一五二	三九〇三	七、三三六、三〇三	一〇一二	八四四、〇二三	八、三四四、二九一〇
濱中村	二、八〇〇	二五一七	二、六二四、七八七七	五八〇〇	六一七、三二	二、九一九、八三七
白糠外二村	三、〇〇六、七八二四	四六二〇	二、〇五、七三六	一四〇四五	一四、六八〇、六三八	一四、六九〇、六三八
足寄外三村	二、二五四、三六一四	一四〇〇	三、一八一、〇六二八		五、四三五、四三一二	五、四三五、四三一二
熊牛外二村	二、二五七、五〇〇	〇五〇	二、〇九、八七二七		二、二五、六九〇七	二、二五、六九〇七
弟子屈外三村	四三、五八一八		一九、六八〇、八六			一九、八六〇、三六

町村名	畑	郡村宅地	牧場	海産干場	植樹地	種畜分用地	其他	計
釧路町	三、一八〇、六八三五町	二、〇〇三三町	二、七九、九五三三町	七六、五三五町	町	町	四四〇、九五町	五、一八、三二九町
厚岸町	一四六、七七三	六七、〇一三	一、三四六、九〇七	八三、一〇一八	四三〇五		七〇八一〇	一、六八三、七一五
濱中村	一三、二九〇九	三八四六一	二、〇七、九〇七	一五、一八四一二			一七、二四	四五九、四五〇三
白糠外二村	一、七二、九三一四	四一三三七	四、三六〇、八二一	三九、〇四一九			三、三六〇三	三、九三四、九一〇
足寄外三村	一、三七九、三三七	一二八八	四、三九八、二一					一、四〇九、一八
熊牛外二村	三、九八、一〇七	二、八八	九二、八四〇〇				三、〇五	三七〇、〇五
弟子屈外一村	一四三、四九七	八一四	三一、三二〇三				一七九、一四	一、七六、〇五〇一
西辛外三村	一、二九、二一〇〇	三三一〇	二、五六、五〇二一					四、八三一、〇一〇
鳥取村	二、一八九、二四〇六	四一六一四	三、五〇〇、八〇〇				一五六、三一七	一五六、三一七
昆布森外二村	一〇〇、六七一四	一五二一一	一七〇三一七				一、一二、四二一〇	二、一二、四二一〇
太田村	三、八四八一一						四六、八三一八	四六、八三一八
計	六、八九一、四六〇三	三五三、九〇五、二三	四〇一、〇〇一五	一四、〇〇一〇	四三〇五	一、五四一、六〇七	五八六、七三、八三四、四六八三一	

町村名	畑	郡村宅地	牧場	海産干場	植樹地	種畜分用地	其他	計
舌辛外三村	三、七四〇、三〇七	一六一〇	五、九四九、三三	町	町	町	町	五、九四九、三三
鳥取村	七五、五四一二							
昆布森外二村	九二、五九〇五							
太田村	二、八四七、九一七	四四七一〇	四、五三〇、八一三					四、九七七、八二三
計	五、九四九、三三	二、四六三、六一〇	二、一八七、〇八九	七五、五四一二				二、三一八、六二一
				二、八四五、七二六				
				二、二四五、九三一七				
				四、一、九三九、五九二				

◉民有地地目別（明治四十二年末日現在）

◉移住者

郡別	種別	三十八年 戸	三十八年 口	三十九年 戸	三十九年 口	四十年 戸	四十年 口	四十一年 戸	四十一年 口	四十二年 戸	四十二年 口
釧路郡	往來	一三〇	四六一	一九一	六四〇	三六七	九四六	三六八	一四七	三六五	八五四
	住者	二元	一七一	二七	五四	三六	五九	四九	七四	一七	一四九
厚岸郡	往來	一九八	六四七	七〇六	二六九	九一三	三六〇	一二〇	四五九	一七〇	六一五
	住者	一五	一九	一四	九〇	一三	五五	一五	六一	一三	五五
白糠郡	往來	一三〇	四九〇	一三四	四九〇	一二〇	四五九	一二〇	四五九	一二〇	四五九
	住者	一三	五一	一三	五一	一二	四六	一二	四六	一二	四六
阿寒郡	往來	一〇八	四〇七	一二九	五〇二	一〇二	三九〇	一〇二	三九〇	一〇一	三九〇
	住者	一〇	四〇	一二	四九	一〇	三九	一〇	三九	一〇	三九
川上郡	往來	一三	四九〇	一三四	五〇二	一三〇	四九〇	一三〇	四九〇	一三〇	四九〇
	住者	一三	四九	一三	五〇	一二	四六	一二	四六	一二	四六
足寄郡	往來	一三	四九〇	一三四	五〇二	一三〇	四九〇	一三〇	四九〇	一三〇	四九〇
	住者	一三	四九	一三	五〇	一二	四六	一二	四六	一二	四六
差引超過郡	往來	一三〇	四六一	一九一	六四〇	三六七	九四六	三六八	一四七	三六五	八五四
	住者	二元	一七一	二七	五四	三六	五九	四九	七四	一七	一四九

◉財政

◉國稅

（明治四十一年度）

◉地方稅

（明治四十一年度）

郡名	税目	釧路郡	厚岸郡	川上郡	阿寒郡	白糠郡	足寄郡
釧路郡	地租	四、一四四、四九〇	五、六二四、九一〇	一、三八四、四五	四、四〇五、〇六〇	三、三三一、三六〇	四、二六三、〇六〇
	所得税附加税	二元、〇三四、一〇	二、八三九、三〇	七四、四〇五	三五六、〇六〇	八九、一一〇	四二六、三〇
	營業税附加税	一六、二七二、一〇	四、九七一、七〇〇	一、三三七、〇	五五、四一〇	五二、二七〇	一六、八〇〇
	賣藥營業税	三、〇〇〇	六、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
	計	四九、五三二、一〇	三、四四二、〇〇〇	一、三八四、四五	四、四〇五、〇六〇	三、三三一、三六〇	四、二六三、〇六〇
厚岸郡	地租	四、一七四、四九〇	五、六二四、九一〇	一、三八四、四五	四、四〇五、〇六〇	三、三三一、三六〇	四、二六三、〇六〇
	所得税附加税	二元、〇三四、一〇	二、八三九、三〇	七四、四〇五	三五六、〇六〇	八九、一一〇	四二六、三〇
	營業税附加税	一六、二七二、一〇	四、九七一、七〇〇	一、三三七、〇	五五、四一〇	五二、二七〇	一六、八〇〇
	賣藥營業税	三、〇〇〇	六、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
	計	四九、五三二、一〇	三、四四二、〇〇〇	一、三八四、四五	四、四〇五、〇六〇	三、三三一、三六〇	四、二六三、〇六〇
川上郡	地租	四、一七四、四九〇	五、六二四、九一〇	一、三八四、四五	四、四〇五、〇六〇	三、三三一、三六〇	四、二六三、〇六〇
	所得税附加税	二元、〇三四、一〇	二、八三九、三〇	七四、四〇五	三五六、〇六〇	八九、一一〇	四二六、三〇
	營業税附加税	一六、二七二、一〇	四、九七一、七〇〇	一、三三七、〇	五五、四一〇	五二、二七〇	一六、八〇〇
	賣藥營業税	三、〇〇〇	六、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
	計	四九、五三二、一〇	三、四四二、〇〇〇	一、三八四、四五	四、四〇五、〇六〇	三、三三一、三六〇	四、二六三、〇六〇
阿寒郡	地租	四、一七四、四九〇	五、六二四、九一〇	一、三八四、四五	四、四〇五、〇六〇	三、三三一、三六〇	四、二六三、〇六〇
	所得税附加税	二元、〇三四、一〇	二、八三九、三〇	七四、四〇五	三五六、〇六〇	八九、一一〇	四二六、三〇
	營業税附加税	一六、二七二、一〇	四、九七一、七〇〇	一、三三七、〇	五五、四一〇	五二、二七〇	一六、八〇〇
	賣藥營業税	三、〇〇〇	六、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
	計	四九、五三二、一〇	三、四四二、〇〇〇	一、三八四、四五	四、四〇五、〇六〇	三、三三一、三六〇	四、二六三、〇六〇
白糠郡	地租	四、一七四、四九〇	五、六二四、九一〇	一、三八四、四五	四、四〇五、〇六〇	三、三三一、三六〇	四、二六三、〇六〇
	所得税附加税	二元、〇三四、一〇	二、八三九、三〇	七四、四〇五	三五六、〇六〇	八九、一一〇	四二六、三〇
	營業税附加税	一六、二七二、一〇	四、九七一、七〇〇	一、三三七、〇	五五、四一〇	五二、二七〇	一六、八〇〇
	賣藥營業税	三、〇〇〇	六、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
	計	四九、五三二、一〇	三、四四二、〇〇〇	一、三八四、四五	四、四〇五、〇六〇	三、三三一、三六〇	四、二六三、〇六〇
足寄郡	地租	四、一七四、四九〇	五、六二四、九一〇	一、三八四、四五	四、四〇五、〇六〇	三、三三一、三六〇	四、二六三、〇六〇
	所得税附加税	二元、〇三四、一〇	二、八三九、三〇	七四、四〇五	三五六、〇六〇	八九、一一〇	四二六、三〇
	營業税附加税	一六、二七二、一〇	四、九七一、七〇〇	一、三三七、〇	五五、四一〇	五二、二七〇	一六、八〇〇
	賣藥營業税	三、〇〇〇	六、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
	計	四九、五三二、一〇	三、四四二、〇〇〇	一、三八四、四五	四、四〇五、〇六〇	三、三三一、三六〇	四、二六三、〇六〇

税目	釧路郡	厚岸郡	川上郡	阿寒郡	白糠郡	足寄郡
地租	四、一四八、一六〇	五、六一五、九〇〇	一、三八四、四五	四、四〇五、〇六〇	三、三三一、三六〇	四、二六三、〇六〇
營業税	一、一七二、一三〇	五九二、〇九〇	七四、四〇五	三五六、一五〇	八九、一一〇	四二六、三〇
雜種税	四、七八六、九七〇	一、一三七、七〇〇	一三九、三〇	五五、四一〇	五二、二七〇	一六、八〇〇
營業税附加税	二、〇七九、〇五〇	五五五、四一〇	六九、二六三	二七、七〇五	二五、九八八	八、三二六
戸數割	六、八九六、三五〇	四、一〇六、四〇〇	三五六、五五	一四二、六二〇	一三三、三七五	四二、七六二
段別割	一、三三二、八五	三五六、五五	三五、六五五	一四、二六二	一三、三三八	四、二七六
水産税	八、九八一、六八〇	二、一九四、三〇	五五七、五八〇	一、九四二、三〇	四四三、九〇〇	一八、八〇〇
所得税附加税	一、二八九、八〇〇	五九七、五八〇	一五九、七四〇	四八七、一一〇	九一、三一〇	三八四、〇五〇
鑛業税附加税	四〇四、〇〇	二八九、〇〇	一〇、〇〇	一〇、〇〇	一〇、〇〇	一〇、〇〇
計	二七、〇二九、八五	一〇、〇六〇、五五	三、四四二、〇〇〇	一三、三三一、三六〇	四、二六三、〇六〇	一、三八四、四五

◉滯納處分

（明治四十一年度）

年次	税別	督促狀ヲ發シタルモノ		處分決行徵收セルモノ		欠損トナリタルモノ	
		人員	税額	人員	税額	人員	税額
四十一年度	國税	二、五二八人	三六、一四三、八三二	二、三五人	一七〇、三五〇	二、四一七人	一、一九五、〇七五
	地方税	二、一〇六	二二、九五三、四五	五四	九三〇	一、四九三	六八四、三一〇
四十年度	國税	一、一四三	二、九八一、二九四	二、三〇五	二、三六六、三五〇	二、四一七	一、一九五、〇七五
	地方税	五、九九八	七、七一九、三八	一、七九〇	二、三四六、七二五	一、四九三	六八四、三一〇
三十九年度	國税	一、〇四五	一、三三八、〇二〇	二〇五	一二六、二七〇	三七	二四九、八三〇
	地方税	五、八二五	一〇、三三三、三〇	二、〇五二	一、八九五、九五〇	一、四二九	五二、九二〇

◉水產稅區會議員選舉權者

（明治四十一年度）

種別	釧路水產稅區		厚岸水產稅區		霧多布水產稅區	
	選舉權者	被選舉權者	選舉權者	被選舉權者	選舉權者	被選舉權者
一級	三〇	三〇	一〇	一〇	一〇	一〇
二級	一六一	一六一	一九二	一七五	一〇三	九五

◉所得稅決定及納人數

（明治四十一年度）

種別	人員	所得金額	税額	増徵額
第一種 甲 株主廿一人以上又ハ株主及社員數廿一人以上ニテセル株式會社又ハ合資會社	二人	四、五二、七五〇円	二六、二八〇円	一七四、四一〇円
第一種 乙 其他ノ法人	一九	一一、三五二、三五〇	一七一、九七〇	一七、一五五
第二種 計	五三	二八、二八〇、二五〇	三二一、九五〇	三一、八六一、四三〇
第三種 計	一一	一四、〇四〇、六七〇	一四六、四五〇	九二八、九五〇
第三種 十萬圓以上	一	一、三五一、七五〇	一四、八六四、八三〇	四、二九六、八五〇
第三種 五萬圓以上十萬圓未滿	一	一、七五一、五三〇	一八、五四、三〇	二、四五二、一〇二〇
第三種 三萬圓以上五萬圓未滿	三	一、〇四〇、六七〇	一〇、四〇、六七〇	一、三五二、七五〇
第三種 二萬圓以上三萬圓未滿	二	五二、〇三七、三〇〇	五二〇、三七〇	六七、六八一、〇一〇
第三種 一萬五千圓以上二萬圓未滿	一	一六、二一二、九四〇	一六二、一二〇	二一、〇七六、五六〇
第三種 一萬圓以上一萬五千圓未滿	一	九五、四八七、二七〇	九五四、八七〇	一二、四〇一、三一〇
第三種 五千圓以上一萬圓未滿	三	二一、三五二、三五〇	二一三、五三〇	二七、七五八、九五〇
第三種 三千圓以上五千圓未滿	九	三三、七一八、九九〇	三三七、一八〇	四三、八三四、三四〇

二千圓以上　四五　一〇七　三四　一、三五
一千圓以上　一〇七　三四七　一七七　一、三四
五百圓以上　三四七　一七七　九五、六四六、八五〇　一七、二八、一八〇　九五、六四六、八五〇
三百圓以上　一七七　九五、六四六、八五〇　二三、七九、六七〇　二三、七九、六七〇
合計　一、三四　一、三五　九五、六四六、八五〇　一七、二八、一八〇　二三、七九、六七〇　二三五、八三、〇一〇
計　一、三四　一、三五　九五、六四六、八五〇　一七、二八、一八〇　二三、七九、六七〇　二三五、八三、〇一〇

◉租稅外收入

經常部

（明治四十一年度）

科目	調定額	收入額	欠損額	收入未濟額	收入歩合
官業及官有森林收入	一九、〇八九、四二〇三	一三、三五〇、四九〇	一七五、一八三	五、五〇三、四〇〇	七、〇元
財産收入 官有物貸下料	三九二、〇八〇	三九一、〇八〇		一、〇〇〇	九、九四
雜收入 徵罰及沒收金	五九、〇〇〇	五九、〇〇〇			完納
雜收入 官吏遺族扶助法納金	五九、〇〇〇	五九、〇〇〇			完納
合計	一九、六八〇、七九	一三、九二七、四九〇	一七五、一八三	五、五〇五、二三〇	七、一六

臨時部

官有物拂下代 地所拂下代	二四九、七〇〇	二四九、七〇〇			完納
物品拂下代	二〇、七〇	二〇、七〇			完納

雜收入返納金　合計　一三七、九二〇　一〇三、三二〇　三四、六〇〇　一、九九〇
總合計　二〇、〇一六、四九　一四、三〇一、四三六　一七五、一八三　五、五九八、五八〇　七、五四

◉國費豫算配布額

（明治四十一年度）

科目	豫算額	科目	豫算額
歲出經常部		徵兵費	一七、四五九、四九〇
北海道廳		備人料	八、三一四、〇三〇
俸給及諸給		備品費	一、九九九、九〇〇
奏任俸給		筆紙墨文具	六、〇四〇、〇六四
判任俸給		消耗品	三六〇、〇〇〇
賞與		通信運搬費	一、四一五、一六〇
廳費		檢丁及新兵旅費	六三五、〇
備品費		雜費	一九九、〇
圖書印刷費		恩賜及救助費	三七三、三六〇
筆紙墨文具		救助費	三四六、〇
消耗品		滯納處分費	六四二、一〇
通信運搬費		滯納處分費	三五四、〇〇〇
修繕費		舊土人保護費	九七、〇〇〇
各所修繕費		教育費	一六五、〇七〇

雜給及雜費	
給與	二、六二九、三〇
雇員給料	九三、〇〇〇
傭人給料	一、〇四〇、七三〇
町村交附金	四五八、一五〇
雜費	四九、〇三〇
	七三、〇三〇
歲出經常部合計	一七、四五九、五九〇

◉地方費豫算配布額

（明治四十一年度）

科目	豫算額
歲出經常部	
土木費	一〇、五一〇、九八四
道路橋梁費	五、九三五、〇〇〇
道路橋梁費	四、三〇七、〇三三
橋梁修繕費	四、三〇七、〇三三
渡船費	三五、〇〇〇
渡船費	三五、〇〇〇
諸器具器械費	二四〇、七五五
雜費	一一五、〇〇〇
雜費	五五、〇〇〇
	六七、五五五

科目	豫算額
給料旅費	一〇、〇〇〇、〇〇〇
給料	八、五九七、六〇〇
旅費	一、四〇二、七八〇
旅費	一、九九九、〇〇〇
役場費	三三五、〇〇〇
備品費	五四四、〇〇〇
筆紙墨文具費	四四、〇〇〇
消耗品費	一三〇、〇〇〇
印刷費	六〇〇、〇〇〇
通信及運搬費	一一五、〇〇〇
雜給及雜費	五五、〇〇〇
傭人給料	六七、五五五
給與	

科目	豫算額
俸給	一、一〇〇、〇〇〇
旅費	六六、八〇〇
賞與	二〇、〇〇〇
事務費	三五、〇〇〇
歲出經常部合計	三三、六二六、七八
歲出臨時部	
土木費	七、二三四、〇〇〇
道路橋梁費	五、六六七、四〇〇
橋梁架換費	四、三六、〇〇〇
標柱費	八、〇〇〇
標柱費	八、〇〇〇
渡船費	三〇八、四〇〇

森林費	
俸給	六七五、四〇
廳費	一五五、〇四〇
旅費	一〇、一〇〇
雜給及雜費	二四二、四〇〇
歲出經常部合計	一七、四五九、五九〇
衆議員議員總選擧取締費	
旅費	一五、〇四〇
歲出臨時部合計	一三、六四六、六四〇
內務省所管合計	三一、一〇六、三三〇

救育費	
救助費	一、八一〇、〇〇〇
行旅病人死亡人諸費	一、八〇〇、〇〇〇
施療患者費	二〇、〇〇〇
諸達書及揭示諸費	二四、〇〇〇
令達諸費	二四、〇〇〇
公報費	二四、〇〇〇
勸業費	一、九三五、〇〇一
地方測候所諸費	一、九三五、〇〇一
俸給	六八四、〇〇〇
雜給	一三、〇〇〇
旅費	三〇、六一〇
所費	二九一、三九一
修繕費	三〇、〇〇〇
暴風警報費	七四、〇〇〇
二級町村長書記給料旅費	
給料旅費	一、四八六、九六〇
給料	一、一九五、九二〇
旅費	二九二、〇四〇
戶長役場諸費	二、六〇五、九六〇

雜費	三九〇、〇〇〇
修繕費	一、〇三〇、〇〇〇
修繕費	一、〇二〇、〇三〇
北海道廳命修繕費	二〇、〇〇〇
修繕費	二四〇、〇〇〇
釧路支廳々舍修繕費	四〇、〇〇〇
衆議員議員選擧費	二四〇、〇〇〇
選擧費	二二五、四六〇
雜費	一、九三五、〇〇一
立會人費用辨償	六八四、〇〇〇
北海道會議員選擧費	一三、〇〇〇
選擧費	三〇、六一〇
立會人費用辨償	二九一、三九一
地方稅取扱費	三〇、〇〇〇
徵收費	七四、〇〇〇
徵收事務費	一、四八六、九六〇
稅區會諸費	一、一九五、九二〇
水產物收獲審査會費	二九二、〇四〇
地方費吏員費	一、九六四、〇〇〇
吏員費	一、九六四、〇〇〇

臨時渡船費	三八四、〇〇〇
橋梁復舊費	一、〇三二、〇〇〇
釧路支廳管內復舊費	一、〇二三、〇〇〇
治水堤防費	一、五二二、〇〇〇
河岸堤防復舊費	一、四二一、〇〇〇
雜費	四四、〇〇〇
勸業費	三三〇、〇〇〇
地方測候所費	三三〇、〇〇〇
暴風警報信号標建築費	三三〇、〇〇〇
戶長役場諸費	一、四五二、三三〇
建築費	一、四五二、三三〇
建築費	一、四五二、三三〇
衛生補助費	一、四五二、三三〇
村醫補助費	一、四五二、三三〇
村醫補助費	一、四五二、三三〇
教育補助費	四五六、〇〇〇
教育補助費	四五六、〇〇〇
教育補助費	四五六、〇〇〇
歲出臨時部合計	九、九九九、五三〇
合計	四三、六二三、〇八

◉官有財産

（明治四十三年三月末日現在）

土地ノ部

地目	數量	價格
官舍敷地	五、〇四四、八九五坪	四七五、九八八
避病院敷地	九二〇〇〇	六一三〇
消毒所敷地	一六〇〇〇	一六〇〇
管內各驛逓所廳舍敷地	二五、五六六、二七	二七、七八七
全上放牧地	四、二七八、一〇〇〇	一九、八九三
全上畑	一、三五、五五〇〇	四七六
小學校敷地	三、一七二〇〇	五五一、二七三

建物ノ部

種別	構造	數量	價格
官舍	木造柾葺	二六六、七五坪	一、二六一、四四〇
全上附屬全	全	四一三〇	二五、一〇一
驛舍	全	三〇一、五七〇	四、七五、九五〇
尋常小學校々舍	全	四三七、五〇	七六一、五一〇

◉地方費財産

土地ノ部

地目	數量	價格
廳舍敷地	三、〇一〇、六〇〇坪	九〇、六一八
戸長役場敷地	五、九五〇〇〇	二九五、〇〇〇
暴風警報信號柱敷地	一、四一六、五〇	一四一七

建物ノ部

地目	構造	數量	價格
支廳々舍	構造柾葺	九一七、五〇	二、八〇〇〇
全上附屬全	全	一四五〇	一、二一、二五〇
各戸長役場廳舍	全	三三、四九九	五、一〇九五、七
全上附屬全	全	三五、七一〇	一〇一、一五
全上寫影奉賀所	全	一〇〇〇	三九、二五〇
全上附屬全	全	三三三三	一九、五三

◉雜件

◉支廳吏員

（明治四十三年五月末日現在）

支廳長	屬	技手	事業手	事業生	雇	計
一	九	二	二	二	九	三五

◉町村及戸長役場吏員

（明治四十三年五月末日現在）

制度	町村長	戸長	助役	收入役	書記	技手	筆生	書記補	附屬員	計
一級町村	一		二	二	九	二	一	一〇	六	三三
二級町村		一	一	一	三	一	一		三	一八
戸長役場		八								八

◉議員總代人並選被選舉有權者

（明治四十二年末日現在）

町村名	衆議院議員選舉權ヲ有スル者	北海道會議員 選舉權ヲ有スル者	北海道會議員 被選舉權ヲ有スル者	町村會議員 定員	町村會議員 有權者	總代人 定員	總代人 有權者	總代人 被選舉	總代人 選舉
釧路町	二三六	二二七	一八〇	二〇	三六三	一			
厚岸町	九九	三六	八四	一六	一九四	一			
浜中村	四九	四五	四七	一〇	三七	一			

◉賑恤救濟

（明治四十二年末日現在）

町村名	賑恤施療 人員	賑恤施療 金額	行旅病人及死亡人取扱 人員	行旅病人及死亡人取扱 救護費・償還費・地方費支出	精神病者救護 人員	精神病者救護 金額	罹災救助 人員	罹災救助 金額
白糠外二村	一	九、四七五	一	三、五八〇				
足寄外三村	三	一、八〇〇	九	一三、〇九〇				
熊牛外二村	一	六五、五二〇	一	一六三、九一五				
弟子屈外一村								
舌辛外三村	一	九、〇〇〇						
鳥取・村								
昆布森外二村								
太田村								
計	一六	九六、四五九	二六	一八三、〇九五	一			

町村名	賑恤施療 人員	賑恤施療 金額	行旅病人及死亡人取扱 人員	行旅病人及死亡人取扱 救護費・償還費・地方費支出	精神病者救護 人員	精神病者救護 金額	罹災救助 人員	罹災救助 金額
釧路町	一	一、〇九〇	一七	一、〇九〇				
厚岸町	一	一〇〇	一一	一〇〇				
滨中村	一	一〇〇	一一	一〇〇				
白糠外二村	一	一八五	一五	一八五				
足寄外三村	一	一、〇〇〇	一七	一、〇〇〇				
熊牛外二村	一	一〇〇	一一	一〇〇				
弟子屈外一村	一	一〇〇	一一	一〇〇				
舌辛外三村	一	一〇〇	一一	一〇〇				
鳥取・村	一	一〇〇	一一	一〇〇				
昆布森外二村	一	一〇〇	一一	一〇〇				
太田村	一	一〇〇	一一	一〇〇				
計	一一	一、三九〇	一三五	一、三九〇				

◉赤十字社員

（明治四十三年五月末日現在）

町村名	特別社員	終身社員	賛助員	正社員	計	協賛委員	人口百ニ対スル社員数歩合
釧路町	一	一三	三	二五七	二七一	三三	一、三五
厚岸町	一	一九	三	八五	一一四	一〇	一、〇四
滨中村	一	二		一四	一六	一	一、六
白糠外二村	三	一七	一	二七	三一	三	一、四一
足寄外三村		一		三	四	一	一、〇
熊牛外二村		二		三	五	一	一、七
弟子屈外一村		九		三	一二	二	二、七
舌辛外三村		二		四	六	一	一、三
鳥取・村		一		三	四	一	一、〇
昆布森外二村		一		二	三	一	一、七
太田村		一		二	三	一	一、六
計	三	一三〇	三	六五九	七九一	六四	一、六二

町村名	賑恤施療 人員	賑恤施療 金額	行旅病人及死亡人取扱 人員	行旅病人及死亡人取扱 救護費・償還費・地方費支出	精神病者救護 人員	精神病者救護 金額	罹災救助 人員	罹災救助 金額
舌辛外三村	一							
鳥取・村								
昆布森外二村								
太田村								
計	二	一七五、一六九	六	一三、一五〇	一	三四五、〇〇〇	二	三〇、三五

◉愛國婦人會員

（明治四十三年五月末日現在）

町村名	特別會員	通常會員	賛助會員	計	女子人口百人ニ對スル會員歩合
釧路町	三	三〇八		三一一	二、九六
厚岸町	二	一四七		一五〇	〇、三五
濱中村	四	八		一二	〇、六一
白糠外二村	四	三		七	〇、三五
足寄外三村	一	三		四	〇、二五
熊牛外二村	四	四		八	〇、四〇
弟子屈外一村	三	三		六	〇、三五
舌辛外三村	三	三		六	〇、三五
烏取外二村	四	四		八	〇、四〇
昆布森外二村	四	四		八	〇、四〇
太田村	四	三		七	〇、三五
計	三四	四三		四八	一、五六

◉勤業諸會

（明治四十二年末日現在）

組合名稱	位置	目的	創立年月	組合員人數	經費
釧路雜穀肥料商組合	釧路郡釧路町	弊害矯正取引上ノ	三十八年八月	三八	一一
釧路米穀雜貨商組合	全	入舟町	全	三七年七月	三三
釧路魚商組合	全	眞砂町	取引確實信用保持	三十九年六月	一五
釧路物產商組合	全	釧路村	良習慣養成進歩發達	三十七年五月	二〇
釧路木挽職組合	全	米町	弊害矯正福利增進	四十二年三月	一七
釧路町肉類販賣業組合	全	眞砂町	全	四十二年十月	一三
釧路陸送業組合	全	釧路村	全	四十二年三月	一四
釧路豆腐商組合	全	眞砂町	全	四十二年六月	一三
厚岸理髮營業人組合	厚岸町大字湾月町		全	四十二年二月	九
厚岸運送解船業組合	全		貨金ノ統一福利增進	三十二年三月	八
厚岸港通船組合	全		貨物運送ノ安全	四十二年一月	四二
厚岸大工組合	全	松葉町	船客出入安全ヲ圖	四十一年一月	四二
厚岸宿屋營業人組合	全		組合員ノ福利增進	三十五年月不詳	三
厚岸木挽職組合	全		全	三十九年二月	七
釧路外五郡農會	釧路郡釧路町濱中、熊牛、昆布森ノ外各町村		農事ノ改良發達	三十四年九月	二、三五
町村農會	全		全	三十四年中	二、七四
釧路產牛馬組合	釧路郡釧路町		畜產ノ改良發達	三十九年八月	一、五〇〇

組合名	設立年月日	目的	三十五年七月一日現在			
			組合員	出資口數	貯金高	貸出高
釧路白糠水産組合	釧路郡釧路町	水産業ノ改良發達水産動植物ノ蕃殖保護其他組合員共同利益	全	一、二〇〇	四、一六	三、四五二
厚岸水産組合	厚岸郡厚岸町	全	三五〇	四〇〇	一、二五九	
奔渡水産組合	厚岸郡奔渡村	全	三〇〇	三〇〇	二、五二四	
濱中水産組合	厚岸郡濱中村	全	四十一年四月七日	一四八	二〇、九九	三、四〇七
釧路郡漁業組合	釧路郡釧路町	組合員共同利益	全	三〇	三、四〇七	
白糠郡漁業組合	白糠郡白糠村	全	四月十七日	二五一	一、五一三	
厚岸灣漁業組合	厚岸郡厚岸町	全	四月十七日	一三	四、〇一〇	
濱中漁業組合	厚岸郡濱中村	全				

◉風教ニ關スル諸團体

組合名	設立年月日	目的	三十五年七月一日現在			
			組合員	出資口數	貯金高	貸出高
釧路貯金組合	釧路町役場	勤儉貯蓄	全	一、二〇〇	四、一六	三、四五二
安田鐵業事務所組合貯金	明治三十六年二月	全	三五〇	四〇〇	一、二五九	
昆布森村勤儉貯蓄組合	三十六年五月	全	三〇〇	三〇〇	二、五二四	
跡永賀村貯蓄組合	全	全	四十一年四月七日	一四八	二〇、九九	三、四〇七
仙鳳趾村貯蓄組合	四十二年十一月	全	三〇	三〇	三、四〇七	
昆布森村自彊會	全	戊申詔書ノ聖旨ヲ奉体シ福利ヲ進メ人心ノ振興ヲ期ス	四月十七日	二五一	一、五一三	
仙鳳趾村自彊會	全	全	四月十七日	一三	四、〇一〇	
跡永賀村自彊會	全	全				

白糠外二村戸長役場

組合名	設立年月日	目的	三十五年七月一日現在			
			組合員	出資口數	貯金高	貸出高
鳥取貯金組合	鳥取村戸長役場	勤儉貯蓄	全	一、二〇〇	四、一六	三、四五二
鳥取報恩會	三十六年六月	全	三五〇	四〇〇	一、二五九	
舌辛外三村勤儉團	舌辛外三村戸長役場	風俗改良貯蓄	全	三〇〇	三〇〇	二、五二四
徹別村戊申詔書奉體會合	三十五年十一月	全	三〇	三〇	三、四〇七	
共同貯蓄農業組合	三十八年一月	勤儉貯蓄	四月十七日	二五一	一、五一三	
白糠村市街貯金奬勵會	四十年一月	風俗改良貯蓄ナシ基本財産ヲ造成シ公課滯納セス道路掃除等ノ掃除ナス	四月十七日	一三	四、〇一〇	
白糠村茶路青年會	三十七年六月	勤儉貯蓄				
白糠青年會	四十一年三月	風俗改良				
白糠村（土人部落）共友會	四十二年十二月	智識ノ変換風俗ノ改良				
茶路（一番二番三番四番五番六番七番八番九番ノ所）貯金組合	三十八年三月	勤儉貯蓄				
庶路（一番二番三番四番五番六番七番八番九番ノ所）貯金組合	全	全				
貯金組合	全	全				
大樂毛貯蓄組合	全	全				
尺別（二番三番四番）貯蓄組合	全	全				
舊土人貯金組合會	全	全				
尺別音別戊申詔書紀念貯金組合	四十二年三月	組合員貯蓄ノ上各自ヘ貸借ス				
庶路戊申會	四十三年二月	風俗改良				